
機械仕掛けの未来

葛城 炯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

機械仕掛けの未来

【Nコード】

N5324M

【作者名】

葛城 炯

【あらすじ】

惑星ルクソルでのブライ達の戦い

虚数次元振動物質ナノマシン、イノーガエレメントを纏い、ブライ達は遺跡へと向かう。

注) 『イノーガ・エレメント(虚数次元振動物質ナノマシン)』に

については出典を明らかにする事を条件として自由使用とします。

例) 文末に注釈として『出典：「機械仕掛けの未来」葛城炯著』と記載する等々。

1・完全なる戦争 1（前書き）

惑星に残された12人の少年少女の物語

1・完全なる戦争 1

1・完全なる戦争

「空が青いな」

意味もなくブライは呟いた。

斜面にウォーマシンと呼んでいる機体を預けて空を見上げている。

「こら。ブライっ！ さぼってないでちゃんとしなさいっ！」

怒鳴っているのは斜面の上、丘の頂上に陣取っているアルテだ。

インカムを通じた声だが実際のところ直接、響いているように感じている。

「はいはい。それにしてもだ」

「なによ？」

「機械の身体だと色っぽくも何ともねえな」

数瞬後、ブライの顔面に岩のシルエットが黒い影を落とした。

「……下らないこと言ってるって岩落とすわよ」

「落としてから言っなっ！」

ブライは機体の顔面に落下した岩を払い除けてから叫んだ。

「有言実行よっ！」

「なんだそれはっ？ 意味と時系列が違うだろうがっ！」

「気付け薬よっ！ それぐらいじゃ何のダメージもないでしょっ？」

「これぐらいでダメージを受けるかっ！ って、それが問題じゃねえよっ！」

「2人とも、じゃれるのはそこまでにして下さい」

冷静な声で割り込んできたのはクダン。通称ハカセだ。

「なんだ？」

「時間です。敵の配置は右舷に4体、左舷に3体、中央に5体。それぞれに長距離砲と狙撃砲、そして白兵戦用の機体。左舷はそれぞれ1体ずつ。右舷は長距離砲が2体、中央に白兵戦と狙撃砲が2体。

典型的な防御陣形ですね」

右舷左舷と言い分けてはいるが別に船に乗っている訳ではない。共通座標としてそれぞれのモニターに表示されているだけだ。

それでも位置は判りやすい。

「じゃ、いつものとおりでいいな」

「ブライ？ それはアタシの台詞」

はいはい。と心の中で呟いてからブライはいつもの配置である正面に陣取った。

「行くわよっ！ ショットガン・フォーメーションAっ！ 今度も

敵を瞬殺よっ！」

「おっっ！」

「はあい」

「ふい〜」

「ほ〜い」

ブライは気の抜けた返事をする最後方の機体をチラリと見る。

長距離砲の機体を操っているのは「キッズ」部隊。

最年長で9歳のユミ。その次が8歳のマユとユマ。どん尻が7歳のトマ。女の子が3人、男の子が1人の戦力としてはアテにしている部隊。

年齢的に白兵戦には向いていないから長距離砲を搭載した機体をあてがっている。

「いいですか？ ブライさん。頼みますからあまり動き回らないで下さい」

生意気な口を利くのはハカセことクダン。

「今度こそ僕達、スナイパー部隊が全滅させますから」

「そうなのかな？」

「そだね。たまにはスコアを稼がないとネ」

「スコアがたまったらドレスを買って貰うんだヨ」

戦場に似つかわしくないことを言い合っているのはアルテのやや後方にある「बीジー」部隊。

ボーイ&ガールの略で適当につけた部隊名だ。

部隊の最年長がユキの13歳、その次がクダンで12歳。以下、マキの11歳、アキ10歳と続いている。

コイツらも白兵戦を任せられるほどではないので中距離砲である狙撃砲を搭載した機体を任せている。

「ふあ。また戦うのですか？ できれば避けたいものなのです」

「何、寝惚けたことを言ってるのよ。レミ。しっかりしなさいよ」

いつの間にかブライの左右にいるのはレミとラミの共に15歳の双子の姉妹。

両腕に短距離砲であるガトリング砲を装備した白兵専用の機体なのだが、今の所ブライは基本的に当てにしていない。

他に白兵専用の機体に搭乗しているのは15歳のブライと16歳のアルテ。

4人でコンバット部隊となっではいるがアルテは大将で後方にいるだけなので戦力として……当てになる訳がない。

「信じられるのは己だけ……ってか」

ブライが呟いた時、前方の地面が破裂する。

「着弾っ！ 距離至近っ！」

ハカセの声に被せてアルテが叫ぶ。

「宣戦布告無しの攻撃は戦法違反よっ！」

「相手もいい加減飽きてんだろっ！」

ブライは叫びながら粉塵の中へと身を投じた。

1・完全なる戦争 1（後書き）

この小説は『イシスの記憶』、『ラプラスの魔女』などの後編となります。

感想などをいただくとありがたいです。

1・完全なる戦争 2（前書き）

惑星に残された12人の少年少女の物語

1・完全なる戦争 2

粉塵の先は崖。

ブライは崖を飛び降り、腕を広げる。腕と胴体の間に電磁皮膜の翼が展開され、背中のジェットエンジンが火を噴く。

地面すれすれに移動し、岩陰を目指す。

敵の砲弾が近くに着弾し、粉塵がブライを包む。

(この辺で軌道修正っと)

翼を大きく広げて減速、素早くターンし、岩陰に隠れて電磁皮膜の翼を収納する。

(粉塵でレーダーが効かなくなるっていう設定は助かるね)

そして敵の位置を再確認するため時を待った。

「キッズっ！ 正面の敵に砲弾の嵐をお見舞いしなさいっ！ ビー
ジーっ！ 左右の敵を狙い撃ちよっ！」

アルテが叫ぶ。

同じ台詞を何度聞いたのだろうか。ブライは醒めた心で思いだしていた。

それにしても最近の指示は素早い。そして的確になってもいる。

(アルテも……手慣れてきたんだろうな)

粉塵が途切れ、正面の敵を5体確認。

直後っ！ キッズ部隊が放った砲弾がブライと敵の間に着弾し、

衝撃波と共に視界を奪う。

絶妙なタイミング。

(ナイスっ！)

ブライは数歩、斜めに動いてからガトリング砲を放ち、そして逆方向へサイドステップ。元の場所を敵の砲弾が撃ち抜く。

(そこにはいねえよ。え?)

自分はいない。しかし射線上の岩陰にレミがいた。

敵の砲弾が岩を破壊する。しかし半分は残った。辛うじてレミは無傷のようだ。

「バカ野郎っ！ ウロチヨロするなっ！」

ブライが叫ぶ。生存確認を兼ねて罵声を放つ。

「ふぁ。吃驚したぁ」

「バカね。ちゃんと隠れていないとダメでしょ」

その声の主はと見れば……ラミは後方の岩陰にしっかり隠れている。

……戦闘意欲は皆無のようだ。

「あー。とにかく隠れていてくれ」

「なによ。アタシだって参加するんだからね」

「そうです。参加するのです」

レミとラミは岩陰に隠れながら敵に向かってガトリング砲を放つ。
(おいおい。距離も足りねえし、狙いが上過ぎる。鳥でも撃つ気が?)

それでも敵を攪乱する効果はあるだろう。ブライは粉塵の中を斜めに突っ切って敵の横に出た。

「おりゃあぁあっ！」

至近距離からのガトリング砲の砲撃に敵の2体が破壊される。破壊されたのは短距離砲の機体と中距離砲の機体。

(ちっ。短距離砲のを全部仕留めたかったっ！)

ブライは舌打ちしながら岩陰に隠れ、敵の白兵戦用機体である短距離砲を装備した機体が放つガトリング砲の攻撃をかわす。

「……こりゃ時間がかかるな」

ブライが諦め気味に呟く。近距離用の機体同士は膠着状態になりやすい。

諦めて空を見上げる。

だが……ブライの予想は外れた。見事なまでに。

「なんだっ！」

見上げた空に砲弾。言うまでもなく味方のキッズ部隊が放った砲

弾。慌ててさらに後ろに下がる。

直後にさつきまで隠れていた岩が破壊された。

「何処を狙っているっ！」

インカムに叫ぶっ！

「敵に決まっているでしょうがっ！」

帰ってきたのはアルテの声。

ブライは迫ってくる敵にガトリング砲を放ちながら、叫んだ。

「敵じゃなくてオレの頭の上だったぞっ！」

「それは敵陣に飛び込んだアナタの責任でしょっ！」

「だからっ！ 余計なことをするなっ！」

「判ったわよっ！ キッズ。正面は良いから右舷に砲弾を放ちなさいっ！ 集中砲火よっ！ ビージーっ！ 左舷の敵を狙い撃ちにしてあげなさいっ！」

おいおい。とブライは呟く。

こっちの支援は0なのか？ と言いたかったが元はといえば自分の言葉だ。

「身から出た錆ってか。くそっ」

敵のガトリング砲に追われて後退一方。もう直に中距離砲の適正射程距離。さらに下がれば長距離砲の射程距離。眼前に白兵戦用機体。

（詰まらされたっ？）

1・完全なる戦争 2（後書き）

この小説は『イシスの記憶』、『ラプラスの魔女』などの後編となります。

感想などをいただくとありがたいです。

1・完全なる戦争 3 (前書き)

惑星に残された12人の少年少女の物語

1・完全なる戦争 3

典型的な敗北パターン。

しかし……嬌声と共に敵の配置が崩れた。

「きゃああああっ！」

「壊れてしまいなさいっ！」

粉塵の中から左右に飛び出たレミとラミの機体が敵の長距離砲の機体を挟撃。ガトリング砲で破壊。そのまま十字砲火を中距離砲の機体に浴びせる。

あっという間に中距離砲の機体も破壊、動作を停止させた。

「振り向くなっ！ 間抜けっ！」

何事かと振り向いた眼前の白兵戦用機体を1連射で破壊。

絶体絶命の場面があっという間に勝利に終わった。

「ふう。助かった」

「はい。愛妾としましては少しは役に立ちませんと」

あいしょう？ 愛しい妾？ ブライは頭を抱えた。

「レミ？ 何、巫山戯たことをいつてんのよ？」

「あれ？ ラミはブライの愛人になるとか言ってますでしたか？

それならばワタシは愛妾なのです」

「あのね？ アタシは飛びつきりの美人になるといつてんのよっ！

ブライだけじゃなくて全銀河の男を魅了する……」

「2人ともそれまでだ」

呆れ気味の声でブライはレミとラミの会話を止めた。

「左舷の敵に向かうぞ。ビージー部隊と狙い撃ち（スナイパー）合戦をしているみたいだからな」

「右舷の方はよろしいのですの？」

問うレミにラミが言い返す。

「キッズ部隊の長距離砲で身動き取れないでしょ？ だったら狙うのは左舷よ」

同じ言葉を言い返そうとしたブライは言葉を一度呑んでから言い直した。

「そのとおり。さつさと左舷のを壊滅させるぞっ！」

「はい」

「はあ、その気の抜けた返事をやめてよね。ところで……」

「何だ？ ラミ？」

「今のフォーメーションは良かったよね？ トライアングル・ラミ・アタックって事で良いかしら？」

作戦パターンとして登録する気だなとブライは思った。しかし特段、反対することでもない。使える手順パターンが増えるのはよいことだ。

「トライアングル・アタックとして登録しておく」

「んん？ 『ラミ』が抜けてるよお」

レミに対しては厳しく言うラミが自分に対しては猫なで声を20%程混ぜて返す。ブライは心の中で溜息を吐いてから無視することにした。

「いいからさつさと左舷に向かうぞっ！」

「はい」

「ふんだ。ネーミングについては譲らないからねっ！」

戦闘は互角の状態が崩れると脆いものだ。

左舷の敵は中距離砲の撃ち合い状態から側面をブライ達に襲撃されて壊滅。

右舷の敵もキッズ部隊が足止めしている間に手の開いたブライ達とビージー部隊にも挟撃されてあっさりと壊滅。

敵の大將は右舷の中にいた白兵戦用機体だった。

「やったーっ！ 久しぶりの完全勝利よっ！ だよね？ セルケト？」

勝ち名乗りを上げたアルテが問い掛けたのは……それまでは戦場にいなかった機体。

セルケトと呼ばれた白く輝く機体は上空の雲から光と共に地上に

降り立った。

いや機体ではない。完全人間型の巨大アンドロイドの姿。

『はい。完全勝利です。これで合計スコアが1449ポイントになりました。そうですね？ テミス様』

セルケトが呼び掛けたのは同じく天空から光と共に舞い降りてくる尼僧のような機体。

セルケトと同型機のように似ているが雰囲気だけが違う。

セルケトは慈愛の女神だとすればテミスは戦闘天女のような印象を放っている。

『確かに。そちらの完全勝利です。1000ポイントを超えたスコアは何と交換されますか？』

テミスの確認に周りが沸き立つ。

それぞれ勝手に「玩具」とか「お菓子」とか「ドレス」とかと言っている。

しかしブライは憮然とした声で言った。

「惑星ルクソルへの『再生』作戦延期。2ヶ月追加だ」

キッズやビージー部隊、さらにはレミとラミも不満の声を上げる。

しかしブライは動じずにアルテに確認した。

「それでいいよな？ アルテ」

「ええ。もちろん。これで何年延期になったのかしら？」

『そうですね。1年と4ヶ月です』

テミスが微笑みながら答え、そして付け加えた。

『ですが、個別スコアで100ポイントを超えた方には私の方からプレゼント致しましょう』

1・完全なる戦争 3（後書き）

この小説は『イシスの記憶』、『ラプラスの魔女』などの後編となります。

感想などをいただくとありがたいです。

1・完全なる戦争 4（前書き）

惑星に残された12人の少年少女の物語

1・完全なる戦争 4

再び沸き立つ周りの声を無視してブライが低い声で確認する。

「それは合計ポイントとは別なんだろうな？」

「ええ。ご心配なく。私からの特別ボーナスです」

テミスが女神のような微笑みで見つめ返す。

『ブライ様。貴方の望みのものは？ なんてしょう？』

「何もねえよ」

ブライはさつさと群れから離れた。

「オレのポイントはアルテにくれてやる。アルテ、適当に皆に振る舞ってくれ」

ブライを見送りながらアルテは溜息を言葉に変えた。

「はいはい。じゃ……」

アルテの言葉を聞き終えたテミスは右手を挙げて最後の言葉を告げた。

『判りました。全てはイシス様の名にかけて送り届けましょう』

『はい。イシス様の名にかけて』

セルケトが同じく右手を挙げて同じ言葉を返す。

そして世界は……霞のように消えた。

霞から現実の世界に戻る。

キッズ達はそれぞれの筐体から出て、はしゃぎ回っている。ピージー達も笑っている。

7日に1度行われるシミュレーションによる戦争が終わった。

『皆様。お疲れ様でした』

放射状に並んだ筐体の中央の黒い箱、ロゼッタと呼ばれる制御ルームから出て来たのは白く輝く服をまとった尼僧。いや、アンドロイド。尼僧と明らかに違うのは髪に数本の簪が挿したように見える

頭部だろう。

「セルケトお。今日はボクはちゃんと戦ったよね」

一番に駆け寄ったのはトマ。セルケトは女神のように微笑む。

『はい。見事な戦いでした。皆様も無駄のない動きでしたよ』

セルケトの微笑みは疲れた子供たちの心を癒す。そんな効果があった。

「ありがと。セルケトの御陰よ。感謝している」

筐体から出たアルテが長い黒髪を手で直し、腕や足の汗をタオルで拭ってからセルケトと握手し感謝した。

レミとラミも筐体を出て腕と足をタオルで拭きながらアルテと微笑み合う。

そして……筐体から最後に出てきたのはブライ。

「うがあっ!」

1人だけ呻き声で。上部にラテン語で「メメント・モリ」と書かれている筐体から後ろ向きのまま床に転がった。

そしてブライの腕や足から無数の針が抜かれ……筐体の中へと戻っていく。

アルテが駆け寄りブライのヘルメットを外し、ブライの頭を自身の膝の上に乗せる。

「ブライ。大丈夫? 1人だけダイブインしているんだからね。無理しないでよ」

アルテが心配げにブライの顔を覗き込む。左右に座って覗き込んでくるのはレミとラミの双子の姉妹。

アルテは端正な顔立ち。レミはほわふわとした不思議系。ラミは知的系の美少女。

これだけの美少女に囲まれてもブライは苦しそうに顔を顰めたまま。

全員が操作していたのは筐体の中のコントローラー。前後左右、そして上にあるモニターを見ながら操作している。

しかしブライだけは違う。

ヘルメットを通して意識が直接、「世界」と結合されている。そして腕と足に刺さったニードルセンサーが神経と結合。そのためにブライの機体は敵味方の中で最も機敏に動ける。代償として……シミュレーションの中で被弾すればそれなりのダメージを受ける。「……気にするな。全壊しても2、3日寝込むだけだからな。いつものコトだ。それに……」

ブライはアルテの顔を見上げる。心配げな美少女の顔はいつ見ても飽きない。視界を遮る2つの膨らみは形良い。

「この景色は見飽きない。またでかくなったか？」

直後。鈍い音がしてブライの後頭部は床に落ちた。

「いてえっ！」

アルテが膝を外して急に立ち上がった結果である。

「ふん。そんな下らないことを言っているんじゃないや心配する必要は無さそうね。みんな、セルケト、夕飯の準備するわよ。今日はコックロボットさんに頼らない日だからね」

少しだけ恥ずかしげに頬を染めて立ち去るアルテはセルケトよりも背が高い。そして抜群のプロポーション。

「ブライ様。ワタシも大きくなったのですよ？ 大きさではアルテ様に……」

ブライの横に座っていたレミがブライの手を取り自分の胸へと、その瞬間にレミがレミの手を取り遮る。

「レミ？ さっさと夕食の手伝いに行きましょう。ブライ？ 今日にはキツそうだから暫く横になって良いわよ」

全員が立ち去ったコンバットルームでブライはよろりと立ち上がり、近くのソファに身を投げた。

1・完全なる戦争 4（後書き）

この小説は『イシスの記憶』、『ラプラスの魔女』などの後編となります。

感想などをいただくとありがたいです。

1・完全なる戦争 5（前書き）

惑星に残された12人の少年少女の物語

1・完全なる戦争 5

戦争。

完全なる戦争。

全ては仮想世界の中。3Dシミュレーションの中。物理法則を完全に再現した世界。

こちらの機体が破壊されても誰も傷つくことはない。相手の機体に誰かが乗っている訳でもない。仮想空間でウォーマシンを破壊し、破壊されるだけの戦争。

まるで……ただのゲーム。

だが単なるゲームではない。

敗北して……溜め込んだポイントが無くなれば「作戦」が実行される。

惑星ルクソルの「再生」という名の壊滅作戦。

3年前。

原因不明の疫病で大人達が全て「いなく」なった。

殆どが土の下。ほんの一部は宇宙空間で待機している移民船に凍結保存されている。

幾多の医者や科学者が来て分析したが原因は不明のままだった。

原因不明の疫病が流行った植民星の運命は決まっている。

小惑星を落したり、宇宙戦艦からの砲撃で地上の全てを焼き払う。正体不明の病原菌毎総てを焼き払うのだ。

何故か「疫病」から生き残った……ブライ達が作戦の中止をかけて戦っている。

「ふん。「再生」作戦が実行されたら……オレ達は籠の鳥だからな」

再生作戦が実行される時。

ブライ達はこの星から強制的に隔離されて……たぶん何処かのコロニーで暮らす。

完全隔離の病室で一生を過ごすことになる。

原因不明の疫病が流行った星の生存者達への当然の処置。

「だが……今のままでもこの星からは出られないんだよな。一生…

…」

自分の筐体を見る。

入り口の上に書かれた文字を目でなぞる。

メモント・モリ。

「死を忘れるな」という意味のラテン文字。

死は……随分と身近にあった。

呆れてしまうほどに。

ほんの僅かな間に誰も彼もが倒れていった。

惑星全土で生き残ったのは僅かに12人。しかも子どもだけ。

「オレ達は……何故、まだ生きているんだろう？」

応えるモノは誰もいない。誰も生き残っている理由を教えてはくれない。

ソファから見上げる窓の外は夕焼け。

青から朱となりそして再び青が濃くなり闇へと向かう。

その空に浮かぶ2つの『月』。

青い『月』は自分達を護っている移民船『セルケト』。そして黄色の『月』は再生作戦を実行するために銀河中央政府から派遣された宇宙戦艦『テミス』。

それらの下。

地平から天に聳える煌めく塔は……遺跡。

まるで『セルケト』と『テミス』を迎え撃つかのように天に向かって聳えている。

そんな時の狭間で……ブライは未来を見つめていた。
判りきっている、先のない未来を。

1・完全なる戦争 5（後書き）

この小説は『イシスの記憶』、『ラプラスの魔女』などの後編となります。

感想などをいただくとありがたいです。

2・ほんの先の未来 1（前書き）

惑星に残された12人の少年少女の物語

2・ほんの先の未来 1

2・ほんの先の未来

『私達は「再生」作戦を実行すべくこの星系に参りました。銀河中央政府の指示を無視する訳には参りません』

『ですが、私達は銀河中央政府の承諾を得た移民です。この星で生存していく権利があります』

セルケトが誰かと言いつている。

ああ。そうだ。ソイツは見慣れた惑星往還機に乗ってオレ達の前に降り立った。

そして「再生」作戦とやらを説明した。

『この惑星の全てを焼き払います。皆様はこの船に乗り「避難」されることをお勧めします』

よくよく訊けばそれは「避難」ではなく「隔離」だった。

『ですが、このままこの惑星で過ごされるのですか？ 原因不明の疫病で大人達がなくなったこの惑星で？』

ソイツに一番食ってかかったのは……アルテだ。

「何よ。アタシ達はこの星で生きるわっ！ アタシ達の父さんや母さんが……開墾したこの惑星で生き続けてみせるっ！」

背が高い美少女。それでもソイツとは同じ程度の高さ。機械と人間じゃ取っ組み合ったら勝敗は目に見えている。しかも相手は銃器を携えたメイド型対人戦闘用アンドロイドを12体も従えていた。

普通の神経ならば尻込みして相手の言いなりになるだろう。

だが……アルテは違った。

何も武器もない状態で、世界の全てが自分の味方かのように振る舞い、相手の要求を撥ねつけた。

とうとう相手が根負けした。

……機械だというのに「根負けした」という表現は正確ではないような気もするが、とにかく相手は説得を諦めてアルテに提案した。

『判りました。ですが、私も銀河中央政府の指示を全うする責務があります。そこで提案ですが……』
そしてオレ達は……戦争をすることとなった。

「ん？」

転た寝から目覚めたブライの眼前には不思議美少女レミの無邪気な笑顔があった。

いつの間にか寝てしまったのだろう。

身体を預けている戦闘ルームのソファの横の窓の景色はすっかり漆黒の闇一色だ。

「……なんかついているか？」

自分の顔をじいっと微笑み見つめるレミに訊く。

「ブライ様の無防備な寝顔を眺めているのです」

今は起きているぞと返したかったが、その後は無意味な会話が続くだけだと思いい言葉を呑んだ。

「なんか用か？」

「ご飯ができたから呼びに来たのです」

ああ。なるほどと思い、起き上がると……両腕に違和感を感じる。何事かと確認すれば両腕が包帯で厚くグルグル巻きにされていた。

「まだ少し血が出ていましたから包帯を巻いたのです」

足はと見れば同じく包帯が巻かれている。違いがあるとすれば腕の方は指の先まで巻かれているが足の方は足首までだという事だろうか。

「前に足先まで巻いたら怒られたのを覚えているのです」

それは僥倖……ではない。

やはり常識と言つべきものだろう。

2・ほんの先の未来 1（後書き）

この小説は『イシスの記憶』、『ラプラスの魔女』などの後編となります。

感想などをいただけるとありがたいです。

2・ほんの先の未来 2 (前書き)

惑星に残された12人の少年少女の物語

2・ほんの先の未来 2

それでも「以前」のように歩行困難な状態でないのは幸いと思うべきか？

「ささ。はやく晩御飯を食べに参りましょう」

その言葉でブライの腹が盛大な音を立て、不思議少女は弾けたように笑った。

「ユミ、残さないでちゃんと食べる。マユ、サラダのトマトも残さない。ユマ、ニンジンをとマに渡さない。トマ、こぼさないで」
食堂でも仕切っているのはアルテだ。

夕食は普通にカレーとサラダのありふれたメニュー。

だが、ニンジンもジャガイモもゴツゴツとデカイ。いや、細切れもある。つまりキッズ達が手伝った結果であろう。そして匂いからして味付けはキッズ向けにやたらと甘いのは確実。

どれぐらい甘いかというと「レッドペッパーはまだあったかな？」と思わず呟くほど。

「あ、ブライ。……なにその手は？」

アルテが呆れた視線をブライの腕に刺している。

「まだ血が出ていたので巻いてあげたのです」

レミが得意げに説明する。

「でもそれじゃスプーンも持てないでしょ？」

「大丈夫です。ワタシが食べさせてあげるのです」

なるほど。それが狙いだったのかと他の全員（キッズ達を除く）が納得した。

「ささ。ブライ様。こちらに座って下さいませ」

レミに促されテーブルに着いたブライの前にアルテがカレーとサラダをドンと置く。

ライスもカレールーも大盛り。ついでに置かれたサラダも大盛りだ。そして何故かブライが苦手としているスライスオニオンが特盛り状態。

「一番の功労者だから体力つけてね」

サラダにドバドバとドレッシングをかけるアルテの笑顔がどこかしら引きつって見えるのはブライの錯覚ではないはずだ。証拠にハカセを筆頭にビージー達が呆れ気味の視線で眺めている。

「はい。ブライ、レッドペッパー。あ、掴めないから……アタシがかけてあげるね」

と横に座ったラムミが小瓶を振るう。が、何の拍子か小瓶の中身全部がぶちまけられた。

「あ、ゴメンね。でも、いつもこれぐらいかけてるよね？」

ブライが無言で抗議の視線で睨むとラムミはしれっとした態度で立ち上がった。

「食べ終わったから食器片付けよ」

アルテも冷めた視線で仕切り直す。

「はいはい。全員、食べた。食べた。食べ終わったら食器は自分で片付けるのよ」

そしてアルテは自分のカレーを食べ始めた。何故かあまり手がついていないのは……どうやら仕切るのに忙しく食べてなかったのだとブライは根拠もなかった。

「はい。ブライ様、あーん」

横に座ったレミがスプーンに山盛りにしたカレーをブライの口先に持つてくる。ついでに身体をすり寄せ……肩の下辺りに柔らかい何かの感触が……

「ブライ。だらけてないで食べたら？」

氷点下に冷めきったような視線と声でアルテが指摘する。

その声に触発されたかのようにブライは眼前のスプーンに食らいつく。ついでにスプーンに咬み付き……レミの手からスプーンを奪った。

「何なさるんですか？」

変わらず甘い声でレミがブライの口からスプーンを奪おうと手を伸ばす。というか身体をすり寄せる。ブライは構わずに包帯の隙間にスプーンの柄を突き刺した。

「自分で喰うっ！」

宣言し終るとブライは大盛りカレーと大盛りサラダに食らいつき

……あつという間に食い尽くした。

「喰ったから寝るっ！」

そして席を立った。

「ブライ」

アルテが低い声で呼び止めようとした。

「なんだ？」

ブライは足を止めずに首だけ捻って振り返る。

「食器は自分で片付けるって、さっきアタシは言ったよね？」

引きつった笑顔のアルテの指摘にブライは足が止まった。

「いいのです。ワタシが片付けますから」

トンと軽い音を立ててレミがブライのカラになったカレー皿の上に自分のカレー皿を乗せて食べ始めた。

見れば殆ど手がついていない。

(……そうか。オレを呼びに来たから……これから食べるのか)

ブライは場の空気を乱しているのが自分だと気づき、それでも何をすべきか判らず、結果として足早に立ち去るしかなかった。

そしてシャワールームに行き、歯で包帯を外し……冷水のシャワーを浴びて全てを忘れることにした。

2・ほんの先の未来 2（後書き）

この小説は『イシスの記憶』、『ラプラスの魔女』などの後編となります。

感想などをいただけるとありがたいです。

2 ・ほんの先の未来 3 (前書き)

惑星に残された12人の少年少女の物語

2・ほんの先の未来 3

ブライは自分の部屋で横になっていた。

既に消灯時間は過ぎているが、目は冴えている。

元々はネイチャーリゾートホテルとして建てられた建物はブライとアルテが親と共に暮らしていた場所。親が生きていた時は臨時の研究所として利用していた。今は生き残った子供たちを集めて共に暮らしているが部屋は余っているし、設備に不足はない。

そして総てをセルケトが制御しているこのホテルはどんな場所もそれぞれの部屋も適度に快適なのだが、睡眠欲というヤツは気分次第でどうにかなる訳ではない。

(昼間……というか夕方に寝てしまったからな)

ふと、寝起きに見たレミの笑顔とそれからの騒動(?)を思い出し、やるせない気持ちのような何かが頭の中を走り回る。

起き上がって頭をかきむしり……それでもする事がないのでベッドに横になる。

と、誰かがドアを叩いた。

ベッド横のボタンを押してオートロックを外し、ドアをオープンにするとアルテが寝間着姿で立っていた。長身のアルテにはサイズが合わずにへその辺りが露わになっているが、完全空調の寝室では……アルテの体調という点においては問題はないだろう。

「ブライ……寝てた？」

「なんだ。アルテか。どうし……た？」

ベッドに横になったまま声をかける。ブライとアルテは幼なじみでお互い様々なことをあまり気にしない。が、ブライには多少なりともアルテの姿形は問題はあったようで声の最後が妙な具合になっ
てしまった。

ダイブインしている時や「戦争」直後などではいろいろと昂ぶっているから言える軽口も、いざこざという時には……臆病になってし

まづのは自然の道理だとブライは自分に言い訳した。

「ううん。何でもない。何でもないんだけど……」

アルテの視線が泳ぎ……ベッド横の小物入れに辿り着いて……あるモノを手に取った。

「ブライ。耳掃除してあげるっ！」

ブライは「はい？」と疑問を口にしたかったが……どうでもいいやとアルテの申し出を受け入れた。

ベッドに腰掛けたアルテの膝にブライの頭が乗っている。ブライの視界にはベッドと反対側の壁。勉強机と机の上に乗っているパソコン。

アルテの耳掃除の手際は心地よく、ついウトウトと思考能力と視界が澱んでいく。

「……ブライ、聞こえている？」

「ん？ 悪い。聞いてなかった」

「こっち終わったから頭を変えて」

ブライは「判った」と寝返りを打つ。と視界はアルテの身体。つまり腹部でへその辺り。

ついでに何処からか漂う甘酸っぱい薫りが鼻腔をくすぐる。

思わず本能とか煩惱とやらがブライの中でむくりと頭をもたげそうになる。

「……ブライ、覚えている？」

ブライは「な、何をだ？」と声の上擦りながらも平静を装って訊き返した。

「ブライとアタシがさ。まだコロニーにいた時……あの事件のこと覚えてる？」

それは……ブライがまだ8歳の時。

アルテは7歳だった。

半年ほど違う誕生日のおかげで学年は1つ違ったが家が隣で共に一人っ子だった2人は兄妹のように過ごし、そしていつも2人は一緒に学校へと向かっていた。

「待ってよ」

まだアルテは小さくブライの歩幅に追いついていくのがやっとだった。

コロニーの中の道は先に行くほど上に伸び、2ブロック先の学校はセンターシャフトの下の上空に見えた。

ブライは途中途中で止まっては「早く来いよ」とアルテを待った。

その時、事件が起きた。

小さな岩塊がコロニーを直撃。

コロニーのフレームが歪み、空気が漏れだした。人々は慌てて避難する。

ブロックごとに遮蔽された中で……ブライ達は取り残された。

「あの時……アタシが小さくて……転んだりしたのを助けてくれていたから……2人とも取り残されたんだよね」

アルテの声が震えている。

取り残されたブロックの中で避難ルームに辿り着き……緊急用酸素ボンベを見つけた。

本来ならば20本以上はあるはずの酸素ボンベが3本しか無く、しかも2本は使用済みのままで放置されていた。使えるのは1本だけ。

何処かの気密が壊れているらしく薄くなる空気の中で……2人は1つの酸素ボンベに接続されている吸入器を使い交互に吸った。

その1本も……最初から残量は半分ほどしかなかった。

2・ほんの先の未来 3（後書き）

この小説は『イシスの記憶』、『ラプラスの魔女』などの後編となります。

感想などをいただけるとありがたいです。

2・ほんの先の未来 4 (前書き)

惑星に残された12人の少年少女の物語

2・ほんの先の未来 4

「それで……段々と呼吸が苦しくなって……アタシは気絶してしま
った」

次にアルテが気づいた時、酸素吸入器はアルテの口に固定されて
いた。

「……え？」

ブライは？ と見渡すとブライは部屋の片隅で倒れている。

アルテは駆け寄り……何度もブライの身体を揺すつたが起きない。
ブライを呼ぶ声は段々と大きくなり……泣き声になり……叫び声
になった。

「オマエの声が大きかった御陰で助かったんだよな」

アルテの声に搜索していた救助隊が気づき、2人は助かった。

「だって、あの時ホントに死んじゃったんだと思ったから」

「バーカ。オレは緊急仮死睡眠薬を見つけて飲んだんだよ」

緊急避難室のエマージェンシーボックスの中には様々な薬があっ
た。

その中にあつた本当に緊急的な対処薬として一時的に仮死状態と
する薬があつた。冷凍睡眠で宇宙を移動するために開発された薬を
応用したモノだ。

「ま、大人用だったからな。それで1年間も眠ってしまった」

服用条件は15歳以上。当時8歳のブライには薬が効きすぎてし
まった。

「そだよ。本当に心配して……毎日病院に行つたんだから」

ぼとりとブライの頬に何かが落ちる。

片眼で見上げるとアルテの大きな瞳が涙で溢れている。

「ふん。気にするな。選んだのはオレだ。あの時はオレが年上だったからな。年上が責任取るのは自然なことだ」

今はアルテが年上。ブライが寝ている間に追い抜かれてしまった。

「でも……ゴメンね」

「何が？」

「いつも怒鳴っているばかりで……アタシは……そんな風にしかできなから」

「気にするな。キッズ達には母親とか父親が必要だ。母親役はセルケトにもできるからな。オマエが厳しく言うのは仕方ないさ」

「でも……ゴメンね」

アルテが謝罪を呟いた後は何も言わずにブライの頭を抱きしめる。ぼたぼたとブライの頬に溢れ落ちるのは……アルテの本当の姿が滴となって落ちていっているのだろう。

「……気にするな」

ブライはアルテの背中をぽんぽんと叩いた。

「今はこうして大気の下にいる。コロニーでは致命傷となるような隕石もここではただの流れ星になって消えていく。あんな事件は起こりようもない。だから……気にするな」

「うん」

「そしてまた7日後の戦争に勝って……オレ達が生きている間はこの星に住み続ける。それがオレ達の未来だ。違うか？」

アルテは涙を拭い、微笑んだ。

「そだね。頼んだわよ。ブライ。次も期待している」

「それは大将として？」

「当然でしょ？ 今はアタシが年上なんだから。ね？」

「おしっ！ それで良いっ！」

アルテの背中を景気づけにちよつと強めに叩く。

と、その衝撃でホックが外れてしまったよう……巨大なブラが

寝間着の中を通ってブライの顔にバサリと落ちた。

「ばっ！」

直後、平手打ちの音が盛大に響き渡った。

頬を紅潮させて怒っているアルテがブライの部屋から出て行った後で……廊下で呟く声があった。

「ラミ、どうします？」

「ん、押しかける雰囲気じゃなくなっただわね」

2人は寝間着姿のまま枕を抱えて通路に隠れていた。

「アルテとブライが妙な雰囲気になったら突入する予定だったけど……今夜はいいや」

「そうですね。そうしましょうか。今夜は2人で寝ましょうね」

「2人で？」

「そうですね。たまには双子姉妹の交流を図りましょう。久しぶりにラミと懽りっこをしたいし」

「ば、ばっ！ そんな子供じみたことっ……」

「ラミは敏感ですから楽しいのです」

「い、一緒に寝るのは構わないけど。変なことしたら叩き出すからねっ！」

「はいはい。変なことにならない程度に懽ります」

「……レミって本当に人の話を聞かないわね」

そうして惑星ルクソルの夜は更けていった。

2・ほんの先の未来 4（後書き）

この小説は『イシスの記憶』、『ラプラスの魔女』などの後編となります。

感想をお待ちします。

3・束の間の休息 1（前書き）

惑星に残された12人の少年少女の物語

3・束の間の休息 1

3・束の間の休息

翌日。

ブライ達はロボット達と共に農場で朝の作業をしていた。

戦闘シミュレーションをしている筐体も元々は大型汎用作業ロボット操作のシミュレーション訓練用の筐体。

その結果としてキッズ達も難なくロボットを操作して働いている。とはいえ……ヒューマノイド型ロボットの背中で操作しているキッズ達の姿は傍目には作業用ロボットに背負われているとしか見えなかった。

もちろん、キッズ達が操作しているロボットもオートモードにすれば全ての作業を自律行動で行う。全てをロボット達に任せても良いのだが、やはりそれでは教育上よろしくないというアルテの意見により皆で働いている。

実際、ビージー達の中のアキなどは農家の娘だったので自分から「働きたい」と申し出ていたし、全員が自分達の口に入るのを作り育てるといふのは貴重な体験だ。

「今回の早生のジャガイモは良い出来ね」

自分が運転してきた無限軌道式トラクタ型ロボットのエンジンを止め、倉庫に運び入れた採り立てのジャガイモを手にとってアルテは上機嫌だ。

「ああ。やっと馴れてきたからな。最初は不作続きでどうなるコトやらと思ったが……なんとか機械任せよりは良いものになってきているな」

ブライはジャガイモが入った箱を積み上げてから、乗ってきた車輪式トラクター型作業ロボットの操作をオートにする。

途端に自律モードの証であるブルーに輝くメインカメラが周囲を確認し、残りの作物を倉庫に運び入れるべくサスペンションを軋ま

せながら圃場へとタイヤを進めていく。

周囲を監視するカメラレンズは機体の数箇所についている。間違っても衝突することは有り得ない。

「骨董品もあるけど無事に動いているな」
倉庫の中を見渡す。

親達が研究所として使っていた時は閑散としていた倉庫の中には収穫したイモやら、作業ロボットのメンテナンス機器が並んでいて、昔を……親達が生きていた頃のことを思い出すこともなくなった。

「そうね。第10次入植隊からのモノもちゃんと動いている。ロボット達に感謝すべきね」

アルテとブライは第12次入植隊。

ビージー達は大体が11次入植隊。そしてキッズ達は第10次入植隊の子供。つまりキッズ達はこの星で生まれた第一世代。言わば惑星ルクソルの正統なる申し子と言える。

「あの子達が……大人になるまで頑張らないとね」
キッズ達を見つめるアルテの姿はまるで母親のようだとブライは感じていた。

朝から働き、午前の残りと昼を挟んでの午後は勉強時間である。無論、進んで勉強したがるのはハカセぐらいのもので他は皆嫌がる。

「あのね？ しっかり勉強しているんな事を覚えなきゃ大人になった時に苦労するわよ」

アルテはここでも仕切る。

「大人になってどんな時に苦労するの？」

「え〜と。それはその……」

トマの素朴な疑問にはアルテも口籠もってしまうのだが。

「いろんな機械の操作方法。宇宙船も機械の1つ。その仕組みが判らないと操作できまい？ 場合によっては非常事態の対処方法。そして……」

ブライが皆の顔を見渡してから続きを声にする。

「……場合によっては何処かの医者か学者が原因不明の疫病の治療方法を見つけても理解できなければ実行することができない。違うか？」

ブライ自身がコロナーの緊急時に遭遇し、生き延びたことは皆が知っている。そして疫病に関して全員が同じ思いを持っている。

全員が黙って肯き、勉強に勤しんだ。

……が、持続しないのは子供である故に必然である。

全員がヘッドホンでそれぞれのレベルに応じた授業を受けていてもキッズ達には緊張感は続かない。特に午後は朝に働いたことと昼御飯を食べたことも相まって大抵は1時間ほどで夢の中……となってしまう。

「ま、仕方ないわよね」

アルテも苦笑いするしかない。

「気にする必要はありません。ボク達が着けているヘッドホンには脳波測定センサーが組み込まれています。睡眠に陥ると同時に睡眠学習モードに切り替わりますから。キッズ達も他の惑星の同学年には引けを取らない成績であることは明白です。ボク達はきちんとボク達ができることを成し得ましょう」

ハカセの意見にはブライ達は頭が下がる。

3・束の間の休息 1（後書き）

この小説は『イシスの記憶』、『ラプラスの魔女』などの後編となります。

感想をお待ちします。

3・束の間の休息 2（前書き）

惑星に残された12人の少年少女の物語

3・束の間の休息 2

実際の所、ハカセの知識と知能は何処の惑星の大学でも入学を認めるレベルに達している。

ブライは黙って自分のヘッドホンに集中することにした。

そして「戦争」が無ければ夕方からは自由時間。

リビングルームで星系間通信……超次元通信で他の惑星で流れている数日から数ヶ月遅れのTV放送や映画を観たり、或いはゲームなどをして過ごし、コックロボットが作った夕食を食べ、再び自由時間で映画を観たりゲームを見たり。

時には映画に嵌ったキッズ達相手に小芝居などの相手をする。

特にトマは正義感が強いらしく、いつも保安官みたいな役になりたがる。それに付合い、悪役を演じたり、無力な市民を演じたり。

トマの配役ではブライはいつも悪役なので疲れること夥しい。

そんな風に時間を過ごし風呂に入って床につく。

それがブライ達の日常だった。

だが……夜になればアルテ達には別の仕事がある。

毎晩ではないにしろキッズ達は夜になれば寂しがり、寝付かせるのに苦労するコトもある。やはり子供は子供なのだ。ピージー達もキッズほどではないにしろ、時には寂しがってアルテの手を焼かせる時もある。

もちろんレミやラムも手伝うのだが大抵はアルテが全てを引き受けている。

そしてセルケトも。

実際、最年少のトマはセルケトに隙あらばまとわりついている。

だが当のセルケトはアルテやレミやラムが代わりに接するとすっと空気のようにいつの間にか離れる。

トマにはそれが不満のようだった。
それでも……平穏な日々だと言えただろう。
3つ目の「月」が現れるまでの日常は。

完全勝利の戦争の2日後。

アルテ達は海にいた。

「たまには休みの日があっても良いじゃない？」

と、朝一番にアルテが提案し、ハカセが反対しブライが棄権、残り全部が賛成。結果として賛成多数で決定した。

ロボットカーに分乗して約1時間。

今は惑星ルクソルに12人の子供しかいなくても近くの旧市街には数十万人が住んでいた。歴史を紐解けば惑星全土で数千万人が住んでいた時代もあった。

海までの道は舗装されていて、実に快適である。

途中のゴーストタウンと化した旧市街で全員が神妙な面持ちになったのを除けば……だが。

それでも砂浜に着けば全員が目を輝かせた。

そしてパーカーを脱ぎ捨てたアルテ達の水着姿は……ブライには閃光のように眩しすぎ……鼻血を出して倒れてしまった。

そして今……ブライはパラソルの下で横になっている。

少し離れた場所で日傘を差したセルケトと無骨な作業ロボットが皆を見守り、コックロボットが食事の準備をしている。

ブライの横にはハカセしかない。海に来てまで勉強することは無かるうにポータブル・コンピューターとヘッドホンで勉学に勤しんでいた。

「オマエ……楽しいか？」

ブライが駄目を押すかのように呆れた口調で尋ねる。

「楽しいとか楽しくないとかではなく、勉強はボクの責務です。存在理由です。唯一にして無二の行動原理です。気にしないで下さい」
それはたぶん……原因不明の疫病を誰の手でもなく自らの手で解決したいというコトなのだろう。液晶画面には「疫学」とか「微生物学」などの単語が時折現れてはスクロールされて消えていく。

「ボクはブライさんと違って……」
ハカセが呟く。

「冷凍睡眠で詰めこまれた知識がありませんから、自分で溜め込むしかないんです」

ブライ達は惑星往還機型の小型宇宙船に乗り、1年間ほど冷凍睡眠されてこの星、というか移民船セルケット内部の小型コスモゲートに辿り着いた。その1年間、冷凍睡眠している間に睡眠学習で様々な知識が詰めこまれていた。それは両親共に科学者だったという所為もあるだろう。

ついでにブライは子供の頃の経験が副作用として現れ、さらに半年ほど眠っていた。当然ながらその間も睡眠学習でさらに知識を詰めこまれている。そう言えば子供の頃の「事故」で眠っていた1年間も強制的に睡眠学習されていたなと余計なことも思い出した。

「とは言え、アルテは詰めこまれていないぞ」

反論しながらもアルテの両親も共に科学者だったことを思い出し、単に家風というか教育方針の違いだろうなと改めて思った。

「ま、総ての冷凍睡眠経験者がそういう状態じゃないさ」

3・束の間の休息 2（後書き）

この小説は『イシスの記憶』、『ラプラスの魔女』などの後編となります。

感想をお待ちします。

3・束の間の休息 3（前書き）

惑星に残された12人の少年少女の物語

3・束の間の休息 3

ブライは反論というか言い繕いながら、そういえばハカセは11次入植隊で……その時は移動中のコスモゲートを借りて大型宇宙船ごと冷凍睡眠無しに空間跳躍させて来たんだよな。と思い出した。

そのコスモゲートは自ら空間跳躍し、発注した星系に届けられた。そのハカセ達を運んできた宇宙船も別の星系へと届けられて、今は観光船として働いているはずだ。

……ブライは自分でも要らない知識を詰めこまれていると実感し、軽い虚脱感に浸ってしまった。

「そうだとしてもボクとブライさんでは基礎知識の差は歴然としています。ボクは……早くいろんな知識を積み上げて知識の境界の端に辿り着きたいだけです。アカシックレコードなるモノが存在するのであればそこに辿り着きたい。それだけです」

ブライは「解ったよ」と溜息を声にして返しておいた。

「ブライさんこそ泳がないんですか？ 折角、海に来たというのに」
ブライは心の中で「それをオマエが言うのか？」と思ったが声には出さずに起き上がって皆を見た。

遠浅の湾。波は穏やかで、遠くまで行っても足がつくほどの浅い湾。そんな海ではしゃいでいるアルテ、レミ、ラミ達を人魚のように幻視してしまう。

トマを玩具にして世話を焼いたりしているビージー達や、ちよこちよこと視界に割り込むキッズ達が邪魔だと何気に思う自分の心の浅さと、いやいや、ビージー達も成長が……と余計なことを考えてしまう妙な心の動きと、それにしても色違いというか彩色デザイン違いでもセパレートとかいうスクール水着っぽい同じ形状の水着と、いうヤツはそれぞれの成長の具合をくつきりと際立たせ、アルテが背の高さに比例した胸のボリュームなのは当然として、自分より若干背が低いレミがアルテと同じボリュームなのは神様の悪戯なのか、

いやいや、ラムは背に比例したボリウムであるのに視線を集める作用があるのはやはり形で……と要らぬ分析を本能のままに暴走気味に進める思考回路を無理矢理に停止させ、それでも『もつと詳細な分析をつ！』と抗議し、実行しようとする煩惱の捕縛を理性らしきモノに脳内で命じてから、不自然に視線を逸らした。

薄いブルーの先に白い砂州が煌めき……その先のコバルトブルーの海の水平線。その上に浮かぶように見える遺跡が虹色に煌めいている。

「オレはカナツチだ。泳げないんだよ」

「本当ですか？」

ハカセが視線を液晶から外してブライを見た。

思いの外に意外だったようだ。

そういえばハカセはコロニーからではなく別の星系の惑星からここに来たのだなと思いだしてブライは説明を続けた。

「ああ。コロニー育ちは大抵カナツチだ。知ってるか？ コロニーの海は宇宙からの粒子線防御も兼ねているからな。誰も進んで泳ぐうとはしない」

「本当ですか？ 中性子線の防御に使っても放射能があるという訳では……」

「そう。迷信さ。原子炉の中性子線遮断と同じ原理と云っただけで海が放射線を放出する訳じゃない。でも心理的には……というだけさ」
「でも……アルテさんは泳ぐのが好きなようですけど？」

アルテの様子はを見ると……泳ぐというよりははしゃいで誰彼と無く水をばしゃばしゃとかけ合っていた。

「アイツもカナツチだ。多少は泳げるが足のつく場所じゃないとダメ」

と、その言葉を証明するかのようになちよつとした深みに足を入れてしまったようで「ぎゃあっ」と悲鳴を上げて波打ち際まで凄まじい速度で泳いで戻っている。

「超高速……犬かきですね」

ブライも苦笑いする。

「ま、そういう前にオレは腕とか足の傷が染みて入れないだけだ」
ゴロリと横になるブライの腕や足にはニードルセンサーが刺さった後が無数に残っている。

「……すみません」

「ん？ 何を謝ることがある？」

「ボクがもう少し射撃の腕が上がれば……ブライさんにそんな思いをさせなくて済みますから……」

ブライは「そんなコトを考えていたのか？」と軽く流そうと思っただが、ハカセの表情には真剣さが浮かんでいる。

「バーカ。オマエの腕が上がるのが、上がるまいがオレの腕とかの傷は減りも増えもしない。操作方法なんだからな」

「敢えてもつと軽く受け流す。ハカセも「そうでしたね」と微笑した。

「でも……少し変だと思う時があるんです」

ハカセが少し離れた場所にいるセルケットを気にしながら聞こえないであろう音量でブライに囁いた。

「何が？」

「あの……「戦争」をしている時、ボクの間接では外したと思った時でも……敵にヒットするというか……なんか感覚がずれる時があるんです」

同じ感覚はブライにもある。いや、在ったと言っべきかなとブライは思い直した。

始めた時に同じ感覚があった。それ故にダイブインという直接コントロールする方法を選択して……今に至っている。

3・束の間の休息 3（後書き）

この小説は『イシスの記憶』、『ラプラスの魔女』などの後編となります。

感想をお待ちします。

3・束の間の休息 4（前書き）

惑星に残された12人の少年少女の物語

3・束の間の休息 4

「ボク達のコントロール信号をテミスに送っているのは……交信しているのはセルケトです。ボク達のミスをセルケトが修正しているのではないのでしょうか？」

同じ事はブライも思っていた。

戦争では同士討ちが殆ど無い。そしてレミヤラのヒット率が高いようにも感じている。さらにはキッズ達の砲撃で敵が足止めされ続けているというのも……常識で考えれば有り得ない確率だとも思う。

こっちが次第に上達しているように相手がかっちの行動パターンを学習し、回避することがあっても良いはずなのだが、それもあまり感じられない。

結果として最近ブライ達が連勝している。

「……結局ボク達は単にゲームをしているだけなのかも知れませんが、違うな」

ブライは一言で否定した。

ハカセが何か言い返そうとしたのを機先を制して言う。

空を見上げて。

「あの戦場の空を見たことがあるか？」

「空？」

「ああ。そうだな、オマエ達の操作方法ではモニター画面だから感じないかも知れないが……あの戦場の空はリアルだ」

「リアル？」

「そう。高さがある。深さがある。何と言うか……あの戦場の端を確認しようとして戦争が終わってから何度か走り回ってみたが端はない。

それ自体は戦場が3Dシミュレーションだという証明になるが……空だけは違う。雲が浮かんでいることも殆ど無いが、高さというか深さは実にリアルだ。あの空は戦場の大きさの何倍も奥行きがある。

少なくともオレはそう感じている」

「つまり……どういうコトでしょうか？」

「ひよっとしたらあれは3Dシミュレーションではなく何処か……実際にある場所なのかも知れない。別の惑星とか。そしてその場所でロボット達を操っている。敵は敵のロボットを、オレ達はオレ達のロボットを」

「だけどそれではレスポンスの感覚が合いません」

「確かに。超次元通信で操作しているのだとしても、信号自体は光速を越えられない。信号はセルケトが本体である移民船に次元跳躍させているんだろ？……その先が何処かの惑星とかだったらレスポンスというか反応が早すぎる。だから……結局はオレにもよく解らない」

起き上がり、視線を水平に戻すとアルテ達が水から上がってこっちに戻ってくるころだった。

揺れ動くモノに反応して視線を固定するのは日頃の「戦争」による眼球動作の鍛錬の賜物であり煩惱ではないとブライは勝手に決めつけ視線を不自然に逸らしてから軽く手を上げて迎える事にした。

「ま、たぶんキッズ達はセルケトのサポートがあるだろう。それでもテミス側から抗議されていないというコトは相手も承知しているというコトだ。こっちが気にすることではないさ」

「そうでしょうか」

「それより、今の話はアルテとかには言うなよ。特にキッズ達にはヤツらは真剣に操作しているんだからな。それに子供とはいえプライドもある」

「解ってますよ。特にトマは甘やかしているせいか……結構わがままですからね」

話題に上ったトマは一番にセルケトにしがみつき、タオルで頭を拭かれている。他のユミ、マユ、ユマのキッズ達もセルケトと作業ロボット達に身体を拭かれている。

「キッズ達にとってセルケトは……母親代わりだろうからな。ま、

それも……」

アルテ、レミ、ラミがこちらに向かってくる。ユキ、マキ、アキのबीジー達も。まるで美少女コンテストの入場シーンのようだ。再び煩惱が騒ぎ始める。

「……成長するまでの辛抱さ」

「そ、そうですね」

同じく内なる煩惱が騒ぎ始めたであろうハカセも口調が怪しくなっていた。

そして目聡くハカセの変化に気づいたユキ達にハカセはからかわれ始めた。

「あー。ハカセったら勉強するフリしてアタシ達のことをずっと見ていたのかな？」

「それで、ハカセの好みってどんなの？ 教えてよ。努力してあげるからネ」

「でもハカセも努力してくれないと相手してあげないんだヨ？」

どう返せば解らないハカセは無言でブライに助けを求めるがブライもどう助けに入ったらいいのかが解らない。

「ブライ様。ずううつとワタシ達のことを見ていたのでしょ？」

「ブライも年頃だものね。それで誰のが好み？ もちろん水着のデザインのことだけど？」

「ブライ。ハカセと変な事を話し合っていたんじゃないでしょうね？」

結局、ブライもレミにからかわれ、ラミにもからかわれ、アルテの冷たい視線を受けることとなった。

ブライとハカセは「多勢に無勢だ」と心の中で呟いていた。

3・束の間の休息 4（後書き）

この小説は『イシスの記憶』、『ラプラスの魔女』などの後編となります。

感想をお待ちします。

4・来訪者 1（前書き）

惑星に残された12人の少年少女の物語

4・来訪者 1

4・来訪者

コックロボットが昼食の準備を始めようとしている頃。
キッズ達は既に待ちきれずに、コックロボット近くで待ち侘びている。

ビージー達はハカセをひやかし続けて、ブライ達はパラソルの下でのんびりとそんな様子を眺めていた。

「そうなのです。訊こうと思っていたことがあるのです」

突然、レミが手を上げた。

「なにを？」アルテが目をパチクリさせて訊き返す。

「ワタシ達の筐体の上に書かれている……模様みたいな文字は何と書いてあるのですか？」

「え〜と。それは……」アルテが言いかけるが正解を思いつかない。
「……ブライ。答えてあげて」さっさと考えるのをやめてブライに任せた。

ブライは記憶の中を掻き回して答えを見つけた。

「レミの筐体の上に書かれているのは『コギト・エルゴ・スム』というラテン語だ」

「意味は何なのでしょう？」

「ん〜と。『我思う。故に我在り』だな。古い哲学の概念だよ。物体とかの他に『心』とかそんなモノが存在するって論拠になった言葉だ」

「んじゃ。アタシの筐体に書かれているのは？」ラミが若干の猫なで声で訊いてきた。

「あれは『コギト・コギト・エルゴ・コギト・スム』で意味は『我思うと思う我在り、故に我在りと思う我在り』……だったかな。意味としてはレミのヤツを詳細にしたヤツだな」

「なんか、こんがらかりそうな言葉ね」

ラムミは目を顰めている。一度訊いただけでは理解できなかったらしい。

「ブライ。アタシのは？」隙を見つけてアルテが訊いてきた。

「んんと。『アルスロンガ・ヴィタブレウイス』だったな。意味としては……」

ブライは少しだけ長考して答えた。

「えーとだ。『学芸を得るは長し、生涯は短し、時機は速し、経験は危うし、判断は難し』だな。確か」

「なにそれ？ 訳が長すぎるわよ。ひょっとして知らないんで適当に言ったんじゃないの？」

アルテは疑心を露わにした視線で睨む。

「もっと長い文章の一部分なんだよ。だから意味としては長くなるのさ」

ブライは憤然とした顔で答える。

「でも意味としましては……」とレミが割り込み、ブライ達はその先を待つ。

「アルテ様にぴったしですね」満面の笑みで人差し指を顎に当てて微笑んだ。

「なんで、アタシにぴったしなのよ？」アルテは慥然としている。

「だって司令官そのものじゃないですか。『判断は難し』なんて」アルテは「あ、そっちな」と呟いて、ブライは他の句の何処が気に言わなかったのかを推察し……口にはしないでおいた。

だが、レミは一切そんなコトを気にしない。

「それに『美人薄命』なんてコトもありますから」

「レミっ！ なんてコトを言うのよっ！」慌ててラムミが止めに入る。「そんな『生涯は短し』なんて所をフォーカスしてズームアップしなくても……あ」

ラムミの注意は……自ら地雷原に踏み込んだようなものだった。

「いいのよ」ラムミ。アタシは一切、気にしてない・か・ら・ね？」

アルテの笑顔が人形のように微動だにしていない。ラムはアルテの口調に凍りついたまま。

一瞬の間が空き……何かが燻っているような空気が漂い始めた。「ではブライ様のは？」レミが燻りかけた雰囲気をあっさりと吹き飛ばして訊く。

ブライは表情を止めて数舜黙つてから答えた。

「……オレのは『メメント・モリ』。意味は『死を忘れるな』だ」
ブライの答えにアルテ達は黙り込んでしまう。「疫病』の記憶がアルテ達を沈黙させた。

「何を考えてそんな文字をあの筐体に書いていたんだろうな。親父達は」

ブライは目を閉じてゴロンと砂浜に横になる。アルテ達も寂寥とした視線で在らぬ方を見る。

「ん？ なんだ？」

目蓋を透してくる日光が急に陰となった。不意に空が曇った。いや周りが陰となってしまうた。

何事かと見上げると……惑星往還機が上空でホバリングしていた。

「テミス？」

アルテが呟く。全員がアルテの声に反応し緊張する。

「何をしに来たんだ？」

ブライも疑問を口にする。嫌な予感と共に。

4・来訪者 1（後書き）

この小説は『イシスの記憶』、『ラプラスの魔女』などの後編となります。

感想をお待ちしています。

4・来訪者 2(前書き)

惑星に残された12人の少年少女の物語

4・来訪者 2

程なくして惑星往還機は少し離れた場所に着陸し、中から出て来たのはアンドロイドのテミスとディアナ達だった。

『これはこれはお久しぶりですね。ブライ様。貴方の戦い振りには私もディアナ達も感心しています』

テミスの後ろに傳くディアナと呼ばれるメイド達は対人戦闘用アンドロイド。それが6体。武器は携帯していないようだが素手で戦って敵う相手ではない。テミスと呼ばれるアンドロイドの戦闘能力がどれほどかは知らないがこの場で実戦となったらブライ達が勝つ見込みは皆無だろう。

「何をしに来たの？ 説得ならお断りよ」

アルテがずっと前に出て睨む。

『これはアルテ様。貴女の指揮振りも私達は驚きと感心を持って……』

「見え透いた口上はいいわ。用件は何？ 実力で「避難」させに来たの？」

突っ慳貪なアルテの態度にテミスは軽く首を傾げて応じ、ディアナ達に合図を送った。

ディアナ達は一礼してから惑星往還機へと戻り幾つかの箱を持って出て来た。

『過日の戦闘終了時にお約束した品が揃いましたのでお届けに参りました。もちろん、皆様の本拠地であるホテルの方にお届けに上がったのですが、皆様がこちらだと聞きました、こちらに届けた方が良いと思われる品を持参した次第です』

テミス達が持ってきたのは……確かトマが望んだ「でっかい骨付き肉」だった。

バーベキュー調理セットを使ってディアナ達が焼いた骨付き肉を

手に取りながらもアルテは怪訝な面持ちのまま。当然ながらブライやレミ、ラミも。そしてビージー達も程よく焼かれた骨付き肉を手に持ち、複雑な表情で矯めつ眇めつ睨んでいる。キッズ達は食べたそうにしているがアルテが口にしないので唾を飲んで我慢している。セルケトはテミスとアルテ達の間でどうしていいか解らずに困惑していた。

『何か仕込まれているとでも？ イシスの名にかけて何も入っていないと宣言致します』

片手を挙げて宣誓するかのようなテミスの言葉にブライは「ならば」と喰らいついた。

「ち、ちよつと。ブライ、大丈夫なの？」

「ん？ 『イシスの名にかけて』と宣言したなら問題ないだろ？

……んまつ！」

ブライの声にいち早く反応したのはキッズ達。即座に手に持つ骨付き肉に食い付き、歓喜の声を上げている。そしてビージー達やレミやラミも「美味しい」と声を上げた。

「あゝ。前から気になっていただけ『イシス』って何なのよ？」

「知らないのか？ 『イシス』ってのはセルケトやテミスにとつての大偉人。いや機械だから偉人ってのはおかしいな。……まあ、とにかくそういう存在だ」

ブライの説明にテミスは誇らしげに微笑み、セルケトは何故か視線を下げた。

そしてアルテは怪訝そうな表情をさらに曇らせる。

「そうなの？」

「ああ。セルケトのようなアクエリア型移民船の前……えーと。カールネアデス型移民船の時代。移民というか植民というか、とにかくそれ自体の成功確率が50%程度で移民船の移動能力も目標となつた星系に辿り着くのが精一杯で余力は皆無という時代に……確か廃棄された宇宙船とかコスモゲートとかを見つけては自分の船を移動中に改造し、12の星系を渡り歩いてまで移民に適した星を見つけ

て植民を成功させ、さらには5つの星系を改造して合計6つもの星系に植民を成功させた……伝説の移民船統括コンピューター。実際には総てはある植物学者の指示だったというオチはあるが……セルケトやテミスにとつては大偉人だろう。そいつの名を出して宣言するなら信頼するし信用もするさ」

アルテはまだ信じられないという表情で持っている骨付き肉を見ている。

「実際、テミスが姑息な手を使うのだったら『戦争』で使うだろ？」

『戦争とは相互信頼の上に行く最も野蛮な行為』だと誰かが言っていたぜ。信用できなくてもだ、少なくとも信頼はするべきだ」

「なによ、それ。意味わかんないわよっ！」

アルテはブライを睨んでから決意したようで「解ったわよ。食べれば良いんでしょっ！」と骨付き肉に齧り付いた。

直後。

アルテは表情を綻ばせて「あら。美味しいじゃない」と声にしてしまった。

『喜んで戴いて何よりです。その肉は私が移民船としての職務を全うした星、タマジ星の特産物である『跳び牛の骨付き腿肉』です。タマジ星の民も喜ばれるでしょう』

テミスは満面の笑みになっていた。

『他にも色々の特産品、野菜や海産物も持参しております。皆様に楽しんで下さいませ』

テミスの言葉に皆は歓喜の声を上げた。

皆がテミスの贈り物に喜び、楽しんだ後。

アルテとブライ、そしてセルケトはテミスと並んでパラソルの下に座って海を見ていた。

他の皆は……作業ロボット達やディアナ達とビーチバレーのようなゲームで遊んでいる。

「アンタ……移民船だったの？」

まだアルテは疑うような視線のまま尋ねた。

「ええ。私ほかのイシス様から直接、記憶を受け継いだ最後の機体だと……私の記憶にはありません。そして移民を成功させ……暇を出されてしまいました」

少し寂しそうだと言いは思った。

「私が担当した星系は資源を始めとする幾多の条件に恵まれていたから……イシス様から受け継いだ移民プログラム、アクエリアプランが優れていた所為もあったのでしよう。あつという間に文明を発展させ、自ら大型コスモゲートを建造するまでに至りました。銀河中央政府とダイレクト接続するほどのコスモゲートを。そうなれば……」

テミスは一度言葉を切つて……遙か上空の2つの月と化している移民船セルケトと宇宙戦艦テミスを見上げ、ひらりと手で指し示してから言葉を続けた。

「小型宇宙船程度しか離発着できない小型コスモゲートを内蔵する私達、アクエリアタイプ2の移民船は……さほど存在する必要性はありません。それで私の所属は惑星タマジから銀河中央政府へと移籍することとなりました」

アルテは疑う視線を止め……痛ましい何かを見るような視線へと変わっていた。

4・来訪者 2(後書き)

この小説は『イシスの記憶』、『ラプラスの魔女』などの後編となります。

感想をお待ちしています。

4・来訪者 3（前書き）

惑星に残された12人の少年少女の物語

4・来訪者 3

「そんなコトをされて……どうしてその惑星タマジの生産品を？ 私達に届けたの？」

『私達……機械にとつて人間の行動は不可解です。ですが……時折、私達の判断結果を私達自身が不可解だと思う時があります』

テミスは笑つて言葉を続けた。

『私達は……「人間になりたい」と思っているのかも知れません』

「人間に？」

ブライは驚きの声を上げる。

『或いは……人間の行動を理解したいが為に単に模倣しているのかも……ですね』

アルテは黙つてテミスを見ている。

ブライもまたテミスの「気持ち」を推し量るかのようにテミスを見つめていた。

そんな……妙な雰囲気吹き払うかのように微笑みの表情を繕いながらテミスはある提案をした。

『そうそう。5日後の「戦争」ですが、少しルールを変えたいと思います。が如何でしょう？』

「ルールを？」

「どういう風によ？」

ブライとアルテが問い返す。

『私達のロボットを操作しているのはあのディアナ達です。ディアナ達が申すにはブライ様と心ゆくまで戦いたいと。それも1対1で何を言い始めたのかブライには解らなかつた。』

ディアナ達とは見れば……全員、動きを止めて不敵な笑みでブライを見つめている。まるで……敵か獲物を見つけた野獣のような視線で。

急な動作というか雰囲気の急変にキッズ達やビージー達は息を吞

んで見つめていた。

ディアナ達が動作を止めたのは一瞬だけで再び陰のない笑顔へと戻り、キッズ達と遊び始めた。

「そんなのダメよ。こっちはブライ1人。そっちは全部で12体じゃない。ブライの消耗が蓄積していく。段々と激しくなる。厳しくなる。認められないわ」

アルテが素早く提案の欠点を指摘した。

『そうですね。では、最初の戦闘でブライ様が勝ちましたら、そこで勝敗は決定。後はボーナスステージというコトで如何でしょう？さらに1つの戦闘が終了したらブライ様のダメージはリセットと致しましょう。如何です？』

アルテは考え込んだ。

その条件ならば問題はないかも知れない。だが……何かを見落としているような気もする。

考え込むアルテを微笑んで見つめ、それからテミスは一度ゆっくりと瞳を閉じてから言葉を続けた。

『この「提案」についての疑義、或いはそちらからの提案は……ゆつくりと話し合ひましょう。時間はまだあります。通常の戦闘にしたいのであればそれに従います。総ては5日後までの間に……』

テミスは瞳を明け……敵意を露わにした視線を遺跡に向けた。

そして呟くように……不可解な言葉を音声化した。

『私達は……いずれは共にあの遺跡に立ち向わなければならない存在なのですから、その前に……でき得ることは総て行いたいだけです』

「遺跡？ なにそれ？」

「遺跡に？ 何かあるのか？」

アルテとブライの問い返しにテミスは怪訝な表情を露わにした。

『遺跡のことを……御存知ない？』

さらに問い返す。

ブライとアルテは黙って肯き……そしてセルケトを見た。

テミスがセルケトを見つめていたが故に。

テミスはセルケトを。何故か咎めるような視線で見つめていた。そしてセルケトはまるで罪人のように怯えているように見えた。

『テミス様。それは、そのコトは……私には……』

テミスはセルケトが言いたいことを察知したかのように肯いた。ただし……責めるような視線をセルケトに注いだまま。

『……私達はやはり機械です。ある「条件」が揃わない限り、ある「行動」を実行しないようにプログラムされている、いえ「指示」されればそれに従う。それだけの存在です』

セルケトはブライとアルテ、そしてテミスの視線から逃れるように視線を砂浜に向けた。

『そしてセルケトに課せられた制約は私には存在しません。私はセルケトが伝えることができない「情報」を皆様に告げることもできません』

『テミス様っ！ それは、そのコトはっ！』
セルケトはテミスに懇願していた。まるで罪人が懺悔するかのよう
うに。

ブライとアルテは驚いていた。

あれほど穏やかなセルケトが明らかに狼狽している。怯えている。何故？

ブライとアルテの疑問を払拭するかのよう
にテミスは言葉を音声
化した。

『どうやら「それ」は私が告げるべき情報ではないのでしょうか。ならば……』

そして……すくつと立ち上がる。

『私は私の職務を実行するだけ。そしてセルケトはセルケトの職務
を実行するだけ』

テミスは遺跡へと視線を戻した。

『少し話が過ぎたようです。私達は戦うモノ同士。いずれは……遺跡で、遺跡の前でお会いするまでの……』

テミスは遺跡を見つめたまま。セルケトは怯えたまま。そしてブライとアルテは困惑したままだった。

再度テミスが声を発した。

『しかし……セルケト様。そこまで何も話していないとは私にも驚きでした。少しは……ブライ様に話された方がよろしいのでは？』

セルケトは……項垂れていた。

テミスはセルケトを見下すかのように睨み……正面へと視線を正した。

『すみません。やはり……少し言葉が過ぎたようです。機械は同じミスをする。その典型でしょう』

テミスは日傘を広げ、軽く手を上げる。直後にディアナ達はささっと集合した。

まだ遊びたそうなキッズ達を無視して。

『私が今、この場で音声化すべき言葉は1つのようです』

テミスはブライを見つめていた。まるで……母親のように。

『ブライ様。どうか私達と戦って下さいませ。私達が納得するまで、そして……』

テミスはアルテを見つめた。

『アルテ様が納得するまで……戦って下さいませ』

アルテは意味が判らずに困惑している。

そんなアルテの表情を確認して……テミスは目を伏せて微笑んだ。

『では……また5日後に。失礼します』

テミスは一礼し、ディアナ達とともに惑星往還機へと戻り、そして立ち去っていった。

4・来訪者 3(後書き)

この小説は『イシスの記憶』、『ラプラスの魔女』などの後編となります。

感想をお待ちしています。

5・疑惑と困惑 1 (前書き)

惑星に残された12人の少年少女の物語

5・疑惑と困惑 1

5・疑惑と困惑

その夜。

ブライとアルテ、レミ、ラミ、そしてハカセはブライの部屋にいた。

ブライとハカセは椅子に座り、アルテとラミはベッドに腰掛け、レミは寝そべっている。

そしてレミ以外の全員が深刻な表情を隠さずにいる。

「どういう意味なんでしょうか？」

ハカセが声を出す。困惑のままに。

「まるでわかんないわよ」

アルテも困惑したまま。

「セルケトも何も言ってくれないし……ちょっと喧嘩になっちゃったし」

あの後、ホテルに戻ってからアルテはセルケトと言い合いになった。

いくら頼んでもセルケトは『今は言えないのです』と繰り返すだけ。そしてセルケトを庇うトマ達と喧嘩になってしまった。

「キッズ達にとってセルケトは母親だからな。庇うのは当然だろう」
ブライの言葉に全員が納得した。アルテ以外は。

「でも私達は仲間なのよ。セルケトは機械じゃない？ 人間じゃないのよ？」

立ち上がって言い切ってから……アルテは後悔した。

「ゴメン。言い過ぎだよな」

しよげてベッドに座り直した。

「気にするな。セルケトが何か隠しているというコトだけは事実なんだからな」

ブライの言葉にハカセが疑問を返す。

「でも……テミスが嘘をついている可能性もあります。ボク達を混乱させるために……虚偽の情報を言ったのではないのでしょうか？」
「その場合はセルケトが否定するはずだ。即座にな。だがセルケトは『話せない何か』自体は否定していない。つまりテミスが言ったことは事実だというコトだ」

「つまり……どういうコトになるの？」

ラムミが誰と無しに問う。

答えたのはハカセ。自分自身を納得させるかのように説明する。

「セルケトは僕らに何かを隠している。そして「それ」は遺跡に関する事。そして7日毎に行っている戦闘というか戦争は「それ」に係している。そして「それ」に最も深く関係するのは……」

ハカセがブライとアルテを見る。

「……深く関係するのはブライさんとアルテさん。特にブライさんに係している。そういうコトになりますよね？」

言葉の最後が疑問形になってしまったのはハカセも自信が無い所為だろう。

「そうだな。そういうコトになる」

ブライは腕組みし自分を納得させるように同意した。

「それで？ 遺跡って結局、何なの？」

ラムミが問い直す。答えたのはブライだった。

「遺跡……遺跡に関する記録が残っているのは第8次移民からだ。

それ以前の記録は……この星系に移民船が向かったという事が記録されているだけで、移民船が辿り着いたかどうかさえ疑わしい。そして……第8次移民の記録はデータとして朽ち果てた移民船にあっただけで、継続する観測記録があるのは……」

ブライは言葉を切ってから椅子に座り直す。

「トマ達の親がこの星に移民してから。そしてある程度の開発が進んだ段階で第10次移民団は銀河中央政府に追加移民の申請を行い、そして来たのがハカセ達。それでも遺跡に関する調査は行われてはいない。遺跡の調査で訪れたのは……」

ブライはアルテを見る。

「オレとアルテの親達。オレ達の親は科学者で銀河中央政府から遺跡の調査を依頼されて来た。もつとも……それはオレとアルテの親にとつては序でのこと。オレ達の親はコロニーに住み続けるのを嫌がっていたからな。惑星への移住を申請していた。そして……なかなか、許可が下りなかった。どこの惑星も人に溢れていたからな。それで調査依頼は渡りに船だったというわけさ」

「レミさんとラミさん達は？」

ハカセが疑問を口にする。

ブライはレミとラミより先に事も無げに答えた。

「レミとラミの親は技術者。あの筐体のメンテナンスを請け負う力タチで来た。そうだったよな？」

「そうよ」

「そうですね。ワタシ達の御父様は技術者で色々なモノを作るのが好きでした。ワタシ達が小さい頃なんかナノマシンで玩具を……」

「つまり……第12次移民は遺跡調査が目的だったのですか？」

ハカセがレミの思い出話を遮って疑問を挟む。レミはちよつとふくれて枕を抱きしめた。

「そうだな。そういうコトになるな」

ブライの同意にハカセが意気込んだ。

「ではっ！ それだとしたらブライさんの御両親の記録を調べれば何かわかるかも。調査記録とかがあるんじゃないですか？」

5・疑惑と困惑 1（後書き）

この小説は『イシスの記憶』、『ラプラスの魔女』、『101人の瑠璃』などの後編となります。
感想をお待ちします。

5・疑惑と困惑 2 (前書き)

惑星に残された12人の少年少女の物語

5・疑惑と困惑 2

「残念だがそれはない」

ブライは腕組みしたままハカセに答えた。

「親父達が死んだ時にオレなりに調べた。総て記録はロックされている。調査結果はセルケトを通じて総て銀河中央政府に送られているコトだけは解った。それでセルケトに教えてくれるように頼んだが……」

ブライはある場景を思い浮かべていた。

それはブライの両親の葬儀が終った時。他の大人達がまだ生きていて……ブライは一人で部屋に戻った時、訪れたセルケトに頼んだ時のことを。

セルケトは困惑した表情で同じ言葉を返すだけだった。

『ブライ様が大人になったら総てお話しします。そのように「指示」されています』

「……つまりセルケトはオレの親の遺言を守っている。だからオレは何も知らない。誰も知ることはない。アルテも同じだろ？」

ブライの言葉にアルテは肯いた。多少困惑気味の表情のまま。

「アタシの時も同じ。途中途中で……父さんとかが『こんな事が解ったぞ』って教えてくれていたんだけど……アタシはどんなコトだったのか覚えてない。亡くなってから調べようとしたら……親のパソコンには何も記録が残ってなかった。残っていたのは『セルケトに総てを預けた』というテキストデータだけだった……」

「ワタシ達も同じなのです」

アルテの言葉に同意したのはレミ。

「ワタシ達の親も……色々調査結果を話してくれていたりにしていいのです。でも記録は綺麗さっぱり消去されていました。残ってい

たのは……」

レミが小首を傾げて思い出そうとする。話を続けたのはラミだった。

「残っていたのはあの筐体の設計図とメンテナンスマニュアル。アタシ達とアルテとブライが使っている筐体はメカ操作のシミュレーション訓練用の筐体を改造したモノだからね。ダイブインできるのはその4つだけよ」

「違いますよ。セルケトが設計図を元に改造しましたから……それでもハカセ様達、ビージー部隊が使っている4つの筐体、つまり全部で8つの筐体だけです。でも部品が足りなくてダイブインは無理っぽかったですけど」

レミがラミの説明に付け加えて言葉は途切れた。

全員が「あれ？ 何の話をしていたんだっけ？」と疑問の霧に包まれて数秒、沈黙が場を支配した。

「えーと。話を元に戻して……ブライ。あの遺跡で記憶していることは？」

アルテに促されてブライは記憶を探る。

「えーとだ。遺跡は第8次移民の記録では『到着した時には既に在った』と記されている。つまり第7次移民までの間に建築されたというコトだけは確かだ」

「しかし……あのようなモノを作る技術があるのでしたら移民は成功して銀河中央政府と交信していたのではないのでしょうか？」

ハカセが疑問を挟む。

「確かに。形状としては高層ビルとも言えるし、形状から推定するに軌道エレベーターの地上部分にも見える。しかし……全人類が幾多の星系に建造した総ての建造物には似てはいない。地図を見るか？」

ブライは机の上のパソコンを立ち上げ……ある画像を表示した。

「これは軌道上から撮影した画像だ。それに地図化した情報を重ねたモノ」

表示された衛星写真には……遺跡が4つのブロックに分れ、そのブロックごとに尖塔が聳えているのが写っている

しかしそれ以上のことは解らない。

「それに軌道エレベーターの地上部分だとしたらこんなにゴツイ建物にはならない。ゴツイのは衛星側の方で地上部分をゴツくする必要はないからな。まるでバベルの塔みたいだよ。コレは」

全員が黙り込む中でレミだけが違う何かを見つけた。

「ん〜？ この塔は虹色の湖というか池みたいな所から立ち上がっているんですね？」

指摘されて尖塔の根本をズームアップすると……確かに水面のように見える。そして水面を充しているのは虹色の液体。

「ん……確かに水面に見えるな。だが色は……尖塔の色が反射しているだけかも知れない」

ブライの分析に全員が納得した。

「ついでだ。見てみるか？」ブライはパソコンを操作し、あるフォルダに辿り着いた。

「何ですか？ このフォルダ？」ハカセ達は疑問符を瞳に浮かべている。

「前に言っただろ。セルケトによってロックされ、銀河中央政府に送られたらしいデータファイル名が羅列されたテキストデータ。このデータの御陰で親父達が何かを解明したってコトは解るんだが……」

ブライが開いたテキストデータには意味不明な文字が並んでいるだけ。

「遺跡の外観。構造物質。ハミルトニウム。相転移炉。制御方法。同調制御。イノーガ・エレメント……何ですか？ この『イノーガ・エレメント』って？」

ハカセに訊かれてブライは両肩を軽く挙げて「知らん」と表現した。

「イノーガってのは『無機質』でエレメントってのは『物体の成分』

って意味になるけどな。なんの「トヤラサッぱりだ」

5・疑惑と困惑 2（後書き）

この小説は『イシスの記憶』、『ラプラスの魔女』、『101人の瑠璃』などの後編となります。
感想をお待ちします。

5・疑惑と困惑 3 (前書き)

惑星に残された12人の少年少女の物語

5・疑惑と困惑 3

「ブライ様。エレメントというのは元素という意味もあります」
レミが得意げに解説した。

「そもそも元素とはアルケーと呼ばれる、原初のガイアの最初の哲学者達は炎とか水とか風とか土を元素と考えていたのです」

レミは得意らしい科学史を披露するが、隣でラミが「また始まった」と呆れている。

「そうか？ だが……それでも意味が解らない」ブライは話を戻してあっさりとは否定する。

「……あれ？ 何の話でしたっけ？」

レミは自分の話が場違いだというコトだけは気づいたようだ。他の全員を脱力させるといふ副作用を伴って。

「ま、結局良くわかんないというコトだけ判ったというコトよね」
アルテが締めくくる。

全員が肯きかけた時にレミが提案した。

「だったらワタシ達で調べればいいのです。あの遺跡を」

ブライ以下、全員が「そうだな」と納得した。

しかし……

次の朝。

セルケトに「遺跡調査」を提案したブライ達だったが、あっさりとセルケトに否定された。

『申し訳ありませんが、遺跡調査は銀河中央政府から停止命令が届いています。何人たりとも許可なく遺跡への調査を行うことは禁止する』と。そして皆様の……』

セルケトが全員顔を見る。申し訳なさそうな表情を浮かべて。

『御両親からも依頼されています。誰も遺跡に近付けないでくれ』
と』

そしてセルゲトは深々と頭を下げた。

『今私と言えることはそれだけです。納得して下さいませ』
ブライ達は何も言えなくなった。

その昼。

昼食を食べたブライ達はやはりブライの部屋に集合していた。今回はビージー達全員が加わったため部屋は随分と狭く感じる。

「どうします？」

口火を切ったのはハカセ。

「どうもこうもないわ。完全に手詰まりよ」

答えたのはアルテ。少し怒っているようだ。

「遺跡には何かがある。それも7日毎の「戦争」に関係した何か。でも調べようにも記録は無い。そして調べに行くこともできない。

ブライの記憶だって……」

アルテに話の先を振られてブライは両手を挙げた。

「オレの記憶は冷凍睡眠とかで詰めこまれたモノばかり。つまりはここに来る前の段階で知られたことだけ。オレらの親が調べたことは何一つ記憶していない」

「コスモネット調べたらいいんじゃないのかな？」

声を上げたのはビージー部隊の最年長のユキ。

「ブライさんのパソコンはコスモネットに接続しているんでしょう？ 調べましょうよ」

ブライはユキとハカセの提案に従い黙ってパソコンを立ち上げ、コスモネットに接続し、IDとパスワードを入力し、席を譲った。
ユキとハカセは争うようにパソコンの前に座り、色々とサイトを調べだした。

その後ろでブライはベッドに身を投げてから疲れたような声を出した。

「知っているとは思いが……」

ハカセとユキ以外はブライの言葉を待っている。

「……コスモネットへの接続は移民船セルケトを通じて行っている。つまりコスモネットに載っている情報にはセルケトが隠している情報は何一つ存在しないという証明になる」

「あ、そうですね」

素直に納得したのはレミ。

「それで解ることだったら隠すことはないし、もし隠している情報が載っていたら……」

「……閲覧阻止。って事ね」

ラムが納得してベッドに横になる。

ハカセとユキはブライ達の言葉に対抗するようにムキになって調べるが……何一つ有益な情報は出ては来なかった。

「閲覧阻止をされた形跡は？」

アルテの確認にハカセとユキは首を横に振ってから項垂れた。

「いよいよ手詰まりだな」

ブライが天井を見て呟く。

「この状況を打開する方法は……」

口にははみたものの何も思いつかない。それでも何か頭の中心で引っかかった。

「そうだ。呪文でも唱えてみるか？」

「何よ？ 呪文って？」

ブライが起きてアルテに提案した。

「セルケトとテミスがいつも言っているイシスっていう移民船コンピュータはある植物学者の言葉を頼りに行動して奇蹟を起こした。12もの星系を渡り歩いたり、時には宇宙戦争をしたり、そして5つの星系を改造したり」

アルテはブライが何を言いたいのか解らない。

5・疑惑と困惑 3（後書き）

この小説は『イシスの記憶』、『ラプラスの魔女』、『101人の瑠璃』などの後編となります。
感想をお待ちします。

5・疑惑と困惑 4 (前書き)

惑星に残された12人の少年少女とアンドロイド達の物語

「その言葉を……どんな言葉かは記憶にないが、その植物学者の言葉を、つまり呪文をアルテが唱えたらイシスが奇蹟を起こしたようにセルケトもテミスも奇蹟を起こして総てを教えてくれるのかも知れないぜ？」

アルテはレミが抱きしめていた枕を奪ってブライを殴った。

「何よそれっ！ アタシは植物学者でも魔女でもないわよっ！」

「ははは。悪い悪い。ただの冗談だ」

暫く枕で叩かれて防ぐという攻防を続けて……ふと気づくとアルテとブライを見る皆の視線が凄まじく冷めている。

特にレミとラミの視線は極寒のブリザードのようだ。

アルテは頬を赤くし、ブライに枕を投げつけてそっぽを向き、ブライは投げつけられた枕をレミに投げ渡して、ベッドに仰向けになった。

「しかし……なんの手掛かりもないな」

その場凌ぎのブライの溜息のような呟きに……皆は状況を再確認し溜息と共に肯くしかなかった。

皆が押し黙ってしまった中で、ふと……テミスの言葉がブライの頭を過ぎった。

『共に遺跡に立ち向う存在』

『遺跡の前でお会いするまで戦う存在』

『私達が納得するまで戦って下さいませ』

『アルテ様が納得するまで』

「つまり？」

ブライの呟きに皆が注目する。

「遺跡に立ち向うために戦う。その時にはテミス達は同行している

？　そしてオレはアルテが納得するまで戦う？　何故だ？　何のた
めに？　そんなコトになる？」

ブライの呟きにビージー達は呆れたような表情となり、レミとラ
ミは複雑な表情となり、アルテは……微妙な怒りのような感情を露
わにしていた。

「ブライ？　アタシのために戦うというのがそんなに嫌なの？」

ブライはアルテの問いかけと視線を気にせずに起き上がりベッド
の端に腰掛けるような格好で考えている。

「そもそもテミスの目的は何だ？　オレ達を「避難」させて「再生」
作戦を行う。その時に遺跡が関係するのかわ？」

そしてセルケトの言葉を思い出す。

「条件が揃うまで……オレが大人になるまで話せない？」

脳裏でキーワードが絡み合う。両親の姿とアルテの両親の姿と、
そしてこの惑星^{ほし}に来てからの会話を。

「そうだ。アレは、あの筐体は……」

何かを掴みかけたブライの左頬に衝撃がっ！

「ブライっ！　ちゃんと答えてっ！」

床にまで転げ落ちたブライが見上げるとアルテが怒っているとも
笑っているとも悲しんでいるともとれる……正確には形容しがたい
形相で見下ろしている。

「な、何をだっ！　今なんか掴みかけたというのにつ！」

立ち上がり、アルテの目の前で手を胸の高さに上げて「何かを掴
みかけた」というのを行動でも表現したブライの両手は……何か程
よく柔らかくかつ弾力が心地よく、それなりに重量のある「何か」
を鷲掴みにしていた。

「ん？　これは？」

直後、ブライの右頬が破壊されたかの衝撃を感じ、身体は壁近く
まで吹き飛び、ベッドへと崩れ落ちていた。

「少し頭を冷やしてなさいっ！」

頬を真っ赤にし、胸を押さえて怒って出て行くアルテと呆れた顔

で従うビージー達。そして複雑な表情のレミとラミも後ろに従い…

…ブライは一人で部屋に残された。

「……不可抗力だ。単なる事故だ」

ブライの抗議は誰もいない部屋に空しく響いた。

夕方。

まだ夕食前の時間。

ベッドに仰向けに寝そべっているブライは天井を見つめていた。

両頬にアルテの手のカタチが残っていたが瞳は真剣。

「オレの両親は……分野としては考古学者、というか社会形態学者で技術歴史学者」

文明の進化と傾向と過去の文化文明、特に技術の変遷を研究をしていた。

「……結局、どんな星に移民しても人類は農業から工業へと進む中で、自然崇拜を色濃く残す。原初のガイアでも存在したガイア神教のように科学が発展すればするほど自然崇拜の熱は高まる……時と場合によってはテロに走るほどに狂信的にまで……だったかな」

そしてアルテの両親は……

「……アルテの母さんが植物学者というか生物学者で親父さんは化学者だったよな。分野としては虚数次元振動物質化学。たしか相転移炉の技術開発……ん？」

5・疑惑と困惑 4（後書き）

この小説は『イシスの記憶』、『ラプラスの魔女』、『101人の瑠璃』などの後編となります。

途中ですが感想をお待ちします。

5・疑惑と困惑 5（前書き）

惑星に残された12人の少年少女とアンドロイド達の物語

相転移炉。この時代の宇宙船の動力源。

「原型は最初のガイアで開発された『固体ヘリウム電池』で原料はハミルトニウム。ハミルトニウムは軽い方からハーフニウム、クォーターニウム、オクタニウム、セドニウム。総ての総称としてハミルトニウム。或いは虚数次元振動物質と呼ばれる元素。最初に使われたのはハーフニウム。現在の大型相転移炉の原料はセドニウム遷移体。そして虚数次元振動制御の応用原理としてはナノマシンも製造可能。ナノマシン自体は最初のガイアの対テロ用戦闘アンドロイドの修復用として開発されたという記録はあるが、製造技術は……失われてしまったロストテクノロジー。いや？ 時折、ナノマシンを造りだした技術者の記録はあるが総て偶然の産物で量産されたことはない……ナノマシンとしての可能性としては、えーと、セドニウムで最低3の16乗・1で……ん〜と、43,046,720以上もの次元振動同位体となり、自己修復機能が付与された場合は事実上の『永久存在』となりうる……」

記憶のままに学術記録を羅列して……脈絡なく思い出す。

レミとラミと出会った最初の日のことを。

「ブライ。挨拶しなさい。今日から共に研究することとなった……さんだ」

「ほら、アルテムも挨拶して」

挨拶した大人の陰に隠れるように姉妹がいた。

「ブライ君。私達の娘と友達になってくれるかな。レミ、ラミ。挨拶しなさい」

「ワタシはレミというのです」

「アタシはラミ。言っとくけどアナタ達の御父様達がどんなに偉く

てもアタシのパパの技術がなければ……」

「技術？」

ブライは何か引つかかった。

「確か筐体のメンテはレミやラミの親がしていた。えーと？ 遠隔操作？」

ベッドにうつぶせになり頭をかきむしる。

「そうだ。筐体で遠隔操作していたんだ。何を？ ……親達は何をしていた？ 遺跡調査？ 遺跡調査をしていた。だが……」

過去の記憶が甦る。総ての記憶がスライドのように連続して映像として切り替わっていく、

「……だが、毎日ここにいた。遺跡に出かけていった記憶が無い。出かけずに調査？ つまり？」

起き上がる。

「あの筐体で操作していたロボット、調査ロボットは何処だ？」

ブライは部屋を飛び出て……倉庫へと向かった。

記憶と共に倉庫を掻き回す。

農作業に使うロボット達が邪魔で、過去の記憶と配置が違う所為で、何処に何があるのかが思い出せずにもどかしい。

作業ロボット達を片っ端から起動させて倉庫から出て行くように指示をする。

ロボット達は迷惑そうな拳動ではあったが、ブライの指示に従い出て行く。

「遺跡で……を見つけた。ほら。これが持って帰った……だ」

親達は何かを見つけて、実物を手に取っている。ポリマーグローブ越しかったが実際に何かを手に取っている。それは何処だ？ どうやって遺跡から持ってきた？ 手段は何だ？ どんな機械を操作して持ってきたんだ？

いくら掻き回しても何も出ては来ない。

苛立ちが行動となり、種芋を入れた箱を蹴り飛ばす。

積み上げられた箱が崩れ……ポロポロの壁板が倒れた。

そしてその板の後ろに……扉を見つけた。三色の3つの菱形が六角形の中にある宇宙船の相転移炉動力室にあるのと同じマークが書かれているドアを。

「ああ……そうだ」

記憶の中の親達がブライに注意した。

「いい？ ハミルトニウムの中でもセドニウム遷移体は調査しようとしたら……とにかく扱いが難しいの。遺跡から持ってきたのはそれに近いモノ。触っちゃ駄目よ」

「ま、セドニウムかどうかは疑わしいが、分析してみたらだ」

そしてドアの向うに消えていった。そのドアが目の前にある。

「この中に……」

ドアノブに手を伸ばし……触ろうとした瞬間っ！

「ブライ様っ！ そこに触れてはなりません」

振り返ると……悲しげな、そして困惑した表情のセルケトが皆の前に立っていた。

5・疑惑と困惑 5（後書き）

この小説は『イシスの記憶』、『ラプラスの魔女』、『101人の瑠璃』などの後編となります。

途中ですが感想をお待ちします。

6・乱入者 1 (前書き)

惑星に残された12人の少年少女とアンドロイド達の物語

6・乱入者 1

6・乱入者

セルケトがリビングルームでAV機器を操作しながら言葉を発している。

『あの部屋の存在をブライ様が思い出しました以上、私は総てを告げるべきなのでしょう』

そして機器のセットアップが終わり、セルケトは振り返って皆に向き直り、モニター横に立ち振り返った。

『……しかし、私には指示された「制約」があります。私にはまだ告げるべき言葉がないのです』

言葉を句切り、そしてブライを見つめ、アルテを見つめ、皆を1人ずつ見つめてから、言葉を続けた。

『ですからテミス様に判断して戴こうと思います。それで宜しいでしょうか？』

断る理由はない。ブライもアルテもそして皆も肯く。

『ではテミス様に……回線を繋ぎます』

モニターの電源を入れ、回線をナンバー255で接続する。

直後。テミスの姿が映った。

何故か長いテーブルの向うで食事を待っているかのような姿。

『皆様、ご機嫌麗しゅう。そろそろ食事の時間ではありませんか？』
セルケト以外の全員が少し脱力する。

「えーと。アナタも食事をするの？」

アルテが代表して訊く。

『いいえ。食事の真似事をしていただけです』

全員の脳裏で疑問符が舞い踊る。

『以前、申しましたとおり、私達、機械にとって人間は不可解な存在。その不可解なる人間を少しでも理解したいが為の真似事です。』

皆様、お食事はまだですか？』

トマのお腹がぐうと鳴く。

『では御一緒に如何でしょう？』 テミスが笑って促した。
ハカセがマイクは何処だと見渡す。

ブライが「セルケトが見聞きした情報がそのままテミスに渡っているだけだ」と説明し、皆が納得した。

「食事の前に答えて貰えない？ セルケトが知っている情報、そして私達に言えない情報を」

アルテが焦れているのを隠さずに棘の立った声で訊く。

『そのコトですか……』

テミスはゆっくりと額に長い指を当てて考え込む。

「もうセルケトから総て伝わっているんでしょ？ 昨日言っていたじゃない。『セルケトが言えなくても私は言える』って。答えて」

テミスは小首を傾げ、数秒ほど沈黙し、アルテは痺れが切れた。

「さつさと言いなさいよっ！ 引っぱたくわよっ！」

ハカセが「無理です。相手は衛星軌道上です」と小声で否定したが、アルテには聞こえていたようで素早く振り返りハカセを睨んだ。震え上がるハカセを助けるかのようにテミスの声が響く。

『ええ。セルケトから総てを聞いています。そして私の立場で判断するに……』

皆が固唾を呑んで次の言葉を待っている。

『……やはり、言えません』

「うおいつ！」 全員が叫んだ。

『私とセルケトは同じ機械。同じイシスの記憶を行動の礎とする機械なのです。総ての「指示」を知ってしまうと同じ判断をしてしまう。機械として仕方のないことです』

「それでも立場の違いとかで違うコトが言えるって言うていたじゃない？」

アルテが諦めきれずに問い質す。

『ええ。どのようがコトが言えるかはもう一度、精緻に判断していることとして……先ずはアルテ様、レミ様、ラミ様。ブライ様に申

し上げるべきコトがあるのではないのでしょうか？」

テミスの言葉にブライは訝しんだ。

「オレに？ 何のことだ？」

『筐体の……操作方法について』

テミスの言葉にアルテ達は視線を逸らした。極めて不自然に。

「操作方法って……まさか？」

アルテが舌を少し出して恥ずかしそうに謝った。

「ごめん。ブライに止められたけど……アタシ達もハカセ達とは違う方法で操作している」

そしてレミとラミも言い繕う。

「ですが、ダイブインではありませんですよ。ヘルメットは使ってますけど」

「針で腕とかが穴だらけになるのはゴメンだからね。アタシ達が使っているのは……接触型センサー。ロンググロブとかレッグウオーマーみたいなのをつけて操作している」

ブライは……何を声にすべきか解らず、ただ怒っていた。そしてやっと言うべき言葉が口から出た。

「そんな……それでも危ない方法なんだぞ？ ヘルメットで視覚情報とかを直接、脳味噌に叩き込むのは。そんな危ない方法を使うのはオレだけで……」

6・乱入者 1（後書き）

この小説は『イシスの記憶』、『ラプラスの魔女』、『101人の瑠璃』などの後編となります。

途中ですが感想をお待ちします。

6・乱入者 2 (前書き)

惑星に残された12人の少年少女とアンドロイド達の物語

6・乱入者 2

アルテが直ぐに言い返す。

「だってっ！ アタシ達だって戦いたいんだものっ！ ブライだけに危険な方法をさせてまで……戦うなんてできないわっ！」

「そんなのです。つまりワタシ達は一蓮托生、輪廻転生、活殺自在なのです」

「レミ？ 最初のしか合っていない。ま、とにかく、ブライだけに全部、背負って貰うっていうのもアタシ達には辛い。苦しいのよ。だから……無理のない範囲で性能UPを図った。という訳。最初は平衡感覚の混濁みたいなのが酷かったけど、今は馴れたからもう平気だよ」

「レミやラミが言っているとおり。アタシが……最初に始めて、レミとラミも無理のないように少しずつ……始めたの。ごめん。言わなかったのは謝る。でも……」

ブライはアルテの言葉をテーブルを拳で小突いた音で止めた。

「……解った。最近の……レミやラミの動きがよかったり、アルテの指示が素早かったのは……そういうコトなんだな」

ブライの中で……1つの疑問が解消した。それは……少しばかり苦さを伴って。

総て自分1人で背負うつもりだった。だが、それは相手にとつて重荷でしかなかったというコトが……苦い何かとなって心に残った。しかし、それは心苦しくはなく、自分が自分を叱責しているような、そんな感覚だった。

「オレが自分で……自分勝手に背負い込んでいたというのは解った」
ブライは心の中の苦い何かを吐き出すように深呼吸した。

そしてテミスに訊き直した。

「だが……最初のオレ達の問いにはまだ答えて貰っていないな？」
テミスはふつと笑顔になった。

『そうですね。ビーチで言った言葉の幾つかは訂正しなければなりません』

テミスは目を伏せて言葉の一つ一つを選ぶかのようにゆったりと間を開けてから答えた。

『……遺跡の前でお会いするのはブライ様の他にアルテ様、レミ様、ラミ様になるでしょう。そして遺跡に立ち向うのはその4人。或いはさらに私達。それでも最後の要になるのは……やはりブライ様だけとなるでしょう。ブライ様が戦う理由は……アルテ様、レミ様、ラミ様、そして今ブライ様の周りにいる総ての方々、場合により100光年以内の近傍の総ての星系の方々のため』

「なに？」

いきなり、話のスケールが大きく変わりブライは困惑した。

「話がでかくなりすぎだな。それじゃまるで……」

言いかけたブライの脳裏で「ある可能性」についての記憶が……イメージが展開された。

「……相転移炉開発時代、空間跳躍技術開発時代のお伽話。正体不明の魔女の話。ラプラスの魔女……だな？」

テミスは黙って笑みで応えてから言葉を続けた。

『単なる可能性……としての話です。そしてその可能性を実現させないために私達が来た。と受け取って戴いても構いません』

「なるほどな。確かにそうだ。単に「避難」させるためだけならアంతが来なくてもセルケトに指示すれば済む話だからな」

『お解り頂けたようで何よりです』

テミスは顔の前で合わせた手を小さく叩いて喜んでいる。

ブライは行き場のない感情を抑えているようで息が荒れている。

そして皆は……意味が判らずに疑問符を表情に浮かべている。

セルケトは何やら肩の荷が少し下りたようで穏やかな表情に戻っていた。

『それでは皆様、お食事に致しませんか？』

テミスの提案にブライが応じた。

「ああ、そうしよう。今すべきコトはそれだけのようだからな」

食堂のモニターにテミスが映り、皆と一緒に食事をしている。

テミスの食事はひと欠片の何かを食べただけの簡素の極み。その後はただ水を飲んでいただけ、そして微笑みながら皆の様子を見ている。

キッズ達は最初のうちはテミスを気にしていたが、その後は気にもかけずにいつもの調子。ビージー達は終始気になっているようだったが、それも敢えて無視するかのようにいつもの調子を装っている。ブライは無言のまま食べ、アルテはキッズ達に注意しながらもブライの様子を気にして、レミとラミはそんなブライとアルテの様子を気にしつつ食事している。

たまりかねてアルテが小声でブライに訊いた。

「ねえ。ブライ、さっきのコトを教えてよ。何とかの魔女って何なの？」

「後で言う。今は……オレも言いたくはない」

だが……ブライが言わなかったコトは突然、明らかにされた。

何の前触れもなく、食堂のサブモニターの電源が入った。

「なんだ？」

「超新星の前兆？ それとも避難船の救難信号？」

そのモニターは緊急回線用のモニター。近傍で何らかの災害が発生した時、発生が予想される時に強制的に立ち上がる。

そして映し出されたのは……

「はろー。あろー？ ボンジュール。グーテンターク。ボンジュール。ブエナスタルデス。ボアタルデ。フーテミッターフ。グディ。グター。グドツグ。ヒューヴェバスヴェ。ドブリジェン。ドーバルデン。ブナズイバア。ヘレテ。シャローム。ナマステー。惑星ルクトルの皆様。お元気かな？」

むさ苦しい髭面の男だった。

「ロバー？ 今はアイツらの居住区は夜だよ。昼間の挨拶だけ並べても意味ないだろ？」

後ろに響いているのは声の主が高慢ちきだと見なくても解るような艶っぽい声。

「そうそう。さつさと戴くモノを戴きましょ」別の男の声が響く

「バンデ？ 物事には順序ってモノがあるんだよ。ロバー。さつさとお退きっ！」

後頭部を蹴られたようで髭面の男の顔がモニターいっぱいに映り、そして消え去ってから、レンズの汚れが綺麗に拭き取られて……下目に見下ろす些か年が嵩んだような美女が映った。

「ごきげんよう。惑星ルクソルに現在、居座っているガキ共。ご機嫌如何？」

ブライ達が口々に抗議しても相手に伝わる訳がない。

6・乱入者 2（後書き）

この小説は『イシスの記憶』、『ラプラスの魔女』、『101人の瑠璃』などの後編となります。

途中ですが感想をお待ちします。

6・乱入者 3 (前書き)

惑星に残された12人の少年少女とアンドロイド達の物語

代わりに抗議したのはテミスだった。

『何ですか？ アナタ達は？ 緊急回線での悪戯は法に触れます。直ちにおやめなさい』

丁寧だが敵意が籠もっている口調。しかし相手も怯まない。

「おやおや。アンタは……確か銀河中央政府からガキ共の撤去を命じられた……元移民船のテミスさんでしたっけ？ 業務怠慢で報告しても宜しいんですけど？」

『構いませんが、その前に貴女方の所属とこの星系に侵入した目的を教えて戴きたいと思いますが如何でしょう？』

「ふん。機械風情が。いいよ。バンデ、教えてやりな」

画面が痩せた男に変わる。男は分厚い書類を取り出して読み上げた。「私達は第8次移民船の、惑星ルクソルに人類で初めて踏み込んだと記録のあるヤタオカ一族の傍系で別星系で延々と代を重ねてきた子孫。バグラン様、およびロバーと私、バンデで御座います。最初に降り立った人類の遺産として銀河中央政府は私達に惑星ルクソルの鉱物採掘権を認めた。はい、これが証拠の許可書。そして採掘権確認書。お解り？」

画面いっぱい書類が映し出される。確かにそれらしき書類だがそんなモノを見たことがないブライ達にはただの訳の解らない書類にしか過ぎない。

困惑しているブライの様子を解っているかのように美女の声が響く。

「ふふふふ。解らないようだね？ ガキ共」

「くくく。全くこれだからお子様には困りますね？」と同意した痩せた男がカエルが潰されたような声を放ちレンズに大写しになる。また蹴られたらしい。

「言うこと言ったらさっさとお退き。アタイが映らないじゃないか

っ！」画面は美女へと戻った。

「お解りかしら？ 惑星ルクソルのガキ共。アンタ達はその惑星に住む権利はあるだろうさ。だけど、その惑星総ての鉱石の採掘権は私達にある。アンタ達が住んでいるホテルの地面も私達のモノ。解ったらさっさと退去しな」

『抗議しますっ！』

声を上げたのはセルケトだった。

『この子達は移民です。銀河中央政府から命じられた正統な移民です。移民である以上、惑星ルクソル、およびこの星系総ての権利はこの子達にあります。二重の権利は有り得ませんっ！ その書類は偽造か何かの間違いです』

セルケトの声が食堂に響く。

ハカセが「ここで言っても聞こえないのに」と呟く。

ブライがハカセの言葉をあつさりと否定した。

「セルケトは宇宙にいる移民船が本体。ここにいるのはインフォメーションアンドロイドとしての端末だ。セルケトの『声』はヤツらに届いている」

皆が「なるほど」と納得した。

「おやおや。移民船セルケトさんでしたっけ？ 第9次移民から延々と失敗続きの移民船の言葉なんか無視しても良いんだけどね。ま、反論してあげよう。いいかい？ 移民が成功したと認められる条件は銀河中央政府移民法によると……」

美女は分厚い本を取り出して読み上げ始めた。

「1。移民船に搭乗した人間が惑星に居住し、5世代以上、継続すること。アンタ達はせいぜい2世代めだよねえ？」

「2。移民が文化文明を發展させ、他の星系と交流すること。受け取るだけじゃ駄目。発信して誰かが価値を認めて継続的に受け取らないと認められないんだよお？」

「3。移民がその星系で採掘した鉱物、採取した作物、獲得した動植物を以て他の星系と交易すること。コレも貰うだけじゃダメダメ

なのよ？」

「4。その星系に銀河中央政府に認められた何らかの特徴のある物体、状態、痕跡が存在し、移民がそれを管理していること。遺跡はあるみたいだけど管理してたっけ？」

「5。上記以外に銀河中央政府が特例として認めた場合。こんな条文、前例がなさ過ぎてカビとかキノコがジャングルみたいに生えるわよお？」

美女は本を放り投げ、問い質した。

「で？ もう一度確認するけどアンタ達は今の条件のどれか1つでも達成しているのかい？」

皆黙り込む。

総ての条件を満足していないことは明らかだ。

「ふふん。条件を達成していないと解って貰えたようだね？ じゃ、さっさと乗り込む……」

美女の言葉は不意に途切れた。信号が乱れ、戻った時には美女は驚いていた。

「ばっ、バカなっ！ なんてコトをするんだいっ！」

皆は何が起こったのか解らなかつたがモニターのテミスに向かいセルケットが驚きの声を上げた。

『テミス様っ！ な、なんてコトをっ！』

『質量プラズマ砲のメンテナンスの一環として試射しただけですけど？ 射線上の横におられる正体不明の宇宙船の方々は驚かれたようですが……何か問題でも？』

6・乱入者 3（後書き）

この小説は『イシスの記憶』、『ラプラスの魔女』、『101人の瑠璃』などの後編となります。

途中ですが感想をお待ちします。

6・乱入者 4 (前書き)

惑星に残された12人の少年少女とアンドロイド達の物語

6・乱入者 4

「問題大ありだよっ！ アタシ達人間を攻撃するなんて機械の風上にも置けないねっ！」

美女の抗議を冷ややかにテミスは受け流した。

「貴女方の宇宙船の船籍が確認できません。先程の戯言が総て事実だとしても私が確認できるまでは貴女方はただの正体不明の不審船です。もしも惑星ルクソルに許可なく何かしようものならば……」

もう一度信号が乱れた。また質量プラズマ砲の試射を行ったらしい。

「この星系の第5惑星のように風穴を開けて差し上げます。了解されましたか？」

テミスの画像が切り替わり、映し出されたのは巨大ガス惑星の第5惑星。そしてその表面に……黒い弾痕というか砲撃跡が2つ。美女達が震え上がっている様子が緊急通信モニターに映し出されていた。

「……私も覚悟を決めます」

セルケトが呟く。

「もし、私の承諾なしに何かを実行されるといふのでしたら……私の全能力を持って貴女達を排除します。移民船の名誉にかけて」

その言葉は力強く、そして悲壮感を漂わせていた。

「どうするの？」アルテが呟く。

あ後はキッズ達が無謀にもセルケトに従い、戦うことを宣言して騒ぎまくり、ビージー達は急な展開に理解できずに困惑し、ブライ達は……何をすべきかが解らずに、食堂を後にした。

そしてブライの部屋にアルテとレミとラミ、そしてビージー達が集まっている。

「キッズ達は？」

「ブライが確認する。」

「皆、寝てしまいました。興奮した反動でしょうね」ハカセが所在なさに答えた。

「ブライ、どうするのよ？ アタシ達……何をすればいいの？ 訳わかんない」

アルテが頭を抱えて呟く。

ブライは窓の外を見上げている。

夜空に浮かぶ青い月。それはセルケト。

その横の黄色の月はテミス。

そしてそれらから離れた場所に浮かんでいる小さな赤い『月』。

それはアイツら……ヤタオカの末裔、バグラン達の船だろう。動きが違うから別軌道を回っているようだ。

「解らん」ブライは赤い『月』を睨み付けながら言い放った。

「解っているのは……テミスとセルケトがオレ達のために頑張っていること。そしてその結果次第では元の生活に戻る」

「戻らなかつたら？」ハカセが訊く。その可能性が高いと判断して

「オレ達は……アイツらとこの星を取り合いになるだろう」

「なんで？ 何でこうなるの？ アイツらは何を狙っているの？」

「こんな……鉱山だつてろくに開発していない、数十万人がなんとか暮らせるだけの農地と少しの工場と海産物を獲る港しか残っていない辺境の星に……何であんなヤツらが来るのよ？」

アルテが救いを求めるように訊く。

「ヤツらの狙いは……解っている」

ブライが言いたくないことを口にした。

「セドニウム遷移体。あの遺跡は……たぶん遺跡周辺は虚数次元振動物質ハミルトニウムの塊。しかもクォーターニウムとかオクタニウムじゃない。極めて貴重なセドニウム遷移体だ。ヤツらはそれを狙っている」

「え？」ハカセは驚きのあまり声が出ない。

暫し、慌ててからユキに水を貰い、一気に飲み乾し、一息ついてから叫んだ。

「そ、そんなコトがつ？ セドニウム遷移体って、僅か数kgで宇宙船を千年動かせるっていう相転移炉の燃料で極めて不安定な高エネルギー物質。下手に触って虚数次元振動スパイラル、つまり次元崩壊を引き起こしたらこの星が全て反物質反応で失なわれ結果として超新星爆発に匹敵する宇宙災害を引き起こすというそんな物質がつ？」

ブライは落ち着いて返答した。

「それは正確じゃない。自然界に存在する状態だったら安定している。一定条件下で制御していても安定。ただし……制御条件を急変させたり、強制的に振動を変化させるとか、下手に扱ったら虚数次元振動を発生させ周辺の物質を反物質に変換させうる物質、それがハミルトニウム。その高次元物質がセドニウム。オクタニウムからセドニウムに変化途中の物質がセドニウム遷移体。あの遺跡がセドニウム遷移体だとして虚数次元振動スパイラルが生じたら……超新星爆発並みの爆発を引き起こす。この星に住み続けるためには……アイツらのことがなくてもあの遺跡を『制御』しなければならぬ。それだけは確かだ。だからこそ、テミスが来た。オレ達には……この星で住み続けるか、この星を……葬り去るかを決めさせるために」

ブライは『月』から視線を逸らし皆を見た。夕方と違い、随分と落ち着いた雰囲気。ブライにアルテが皆を代表して訊く。

「それが……ラプラスの魔女なの？ さつき……テミスと言いつつ、出ていた時に出ていた『ラプラスの魔女』って……そういうコトなの？」

ブライは何かを思い出すように数秒黙り、「ああ。そのコトかと呟く。

「その『ラプラスの魔女』ってのは伝説さ。原初のガイアから人類が宇宙に踏み出そうとしていた時、ハミルトニウムが月で発見され、それを元に相転移炉を造る。さらに空間跳躍システムを造る。その

過程で……技術者とか科学者が遭遇したという人類外知的生命体というか宇宙人のような存在。ソイツの決め言葉は『アナタの死と人類の死、どちらを選ぶ？』だったかな？ たぶん幻覚かなんかだろう。ただ、ラプラスの魔女に出会ったと言っていた科学者や技術者が自分の命と引き替えに、というぐらいに考えて、考えに考え抜いて技術革新を推し進めた。そして宇宙へ踏み出す技術革新を成し遂げた。その……常識外の技術革新の過程が生み出した都市伝説。そんな所がオチだろう」

「ブライは憑き物が落ちたような表情だ。

「ブライ……随分と落ち着いているように見えるけど……どうしたの？」

6・乱入者 4（後書き）

この小説は『イシスの記憶』、『ラプラスの魔女』、『101人の瑠璃』などの後編となります。

途中ですが感想をお待ちします。

6・乱入者 5 (前書き)

惑星に残された12人の少年少女とアンドロイド達の物語

6・乱入者 5

訊くアルテにブライは飄飄と答えた。

「別に。オレの疑惑がヤツら、バ克蘭達が来たことで証明されたようなモノだからな。わざわざ、こんな辺境の星に来て山師みたいな連中が手を出して採算が合うような鉱物なんてハミルトニウムぐらいしかないからな。テミスやセルケトがオレ達に隠していたコト。それはあの遺跡をオレ達が命をかけてどうにかしなければならぬ、そんな代物だというコトが証明された。それで落ち着いているのかもな」

ブライは笑う。

「そんな制御が……できるんですか？」ハカセが訊く。

「できる」ブライは断言する。

アルテもレミもラミもビージー達もブライの次の言葉を待っている。

何故そんなに断言できるのかわかりたがっている。

「随分と遠回しな説得さ。制御不能だと……オレ達の親やセルケトが判断していたのであれば、疾うの昔にセルケトがオレ達を連れてこの星から離れていただろう。何か制御できる方法がある。そしてそれを訓練するために……あの筐体がある」

「筐体？」アルテが訊く。

「筐体……というあの筐体ですか？」レミが確認する。

「レミ、確認になっていない。あの筐体ってアタシ達がテミスとの「戦争」に使っている……アレ？」

ラミが訊き直し、ブライが肯く。

「多分な。テミスが言っていただろ？ オレが『遺跡に立ち向う』って。そしてセルケトからアルテやレミやラミが「ある方法」で筐体を操作していると知ってから言い直しただろ？ 遺跡に立ち向うのはオレとアルテとレミとラミになるって」

「つまり？」アルテが訊く。

「どついうコトなのですか？」レミも訊き直す。

「解らないの？　って、アタシもよく解らないんだけど」「ラミも訊き直す。」

ビージー達は展開について来られていないようだが必死についていこうと刮目したまま黙っている。

「さあな。オレも解らん」ブライが両手を挙げて降参した。

「っおい！」全員が突っ込んだ。

ブライは笑って言葉を継ぎ足した。

「コレは単なる憶測だけだな。とにかく、「戦争」を提案したのはテミスだ。そしてそのために筐体が用意された。テミスとセルケトによって。オレ達に遺跡の制御を行わせるために。そしてそのため訓練を行うために……と考えると辻褃が合う」

アルテ達はまだ納得できないようで疑惑の眼差しのまま。

「テミスが来た時、最初は避難することを提案されたら？　それに従っていればこの星は無人の星。遠距離から遺跡を破壊して総て終わり。テミスの質量プラズマ砲の威力はさつき見たとおりだ。だが、オレ達はこの星に残ることを選んだ。だからこそ「訓練」が始まった。というコトさ。そして総てはオレ達の親が仕組んだこと。そしてセルケトはソレを知っているからこそ銀河中央政府に提案し、提案を受け入れた政府によってテミスがこの星系に来た。但し選択するのは……この星に住むオレ達。というシナリオだろうさ」

アルテが……暫く黙考してから訊く。

「アタシ達の親が仕組んだことなの？」

「ああ。だからこそセルケトが『言えない』のさ。誰かに『言わない』ように指示されている。つまり、その『誰か』はオレ達の周りにいてセルケトに指示できる人間。遺跡に詳しい人間。その条件から推測できるのはオレ達の親だけだ。そして親が仕組んだ……このシナリオの総てが明かされるのは……オレ達があるレベルに達成してから。そんなトコなんじゃないのか？」

「あるレベルって……筐体での「訓練」の到達レベルってコトですか？」ハカセが訊く。

「多分な」ブライは目を閉じて肯く。

「そして今の所、順調だったんだろう。この前の「戦争」でテミスがボーナスを振る舞ったのも、次の戦争でオレとの1対1での戦争を提案したのも……訓練を次のレベルに進めるためだと思えば……解らんでもないさ」

ハカセがあることに気づいて訊く。

「……それじゃ、疫病は？」

ブライは……ハカセの真剣な目から逃れるように空の赤い月を見た。

「これは単なる推測、憶測だが……あの遺跡はこの星、全体を監視しているんじゃないかと思う」

「監視している？」 アルテが訊き直す。

「第1次移民から第7次までの移民の何処かでガイア神教が流行ったのかも知れない。あの原初のガイアでも流行った自然崇拜のテロじみた宗教、宇宙へ踏み出すことを極端に嫌い、さらに宇宙開発をも嫌悪の対象とした宗教が。そしてソイツらが……狂信者の中で創り上げた狂った科学が異常発達し……この星のハミルトニウムを使って数万年以上に渡って稼働する惑星監視システムを作り上げ……ソイツらも滅亡した。そんなモノなのかも知れない」

ブライは夜の闇でも虹色の光を点滅させている遺跡を見る。

「セドニウムが豊富にあるのであれば……動力には事欠かない。そして『人類が一定数以上繁殖した場合、抹殺する』とかそんなプログラムが稼働しているのかもな」

「そ、そんな……」アルテが絶句する。皆も声が出ない。

この惑星ルクソルはそんな悪魔のようなシステムが稼働している星なのだろうか？

「それが事実なら……」ただ一人、ハカセが怒りを抑えたような声で訊く。

「つまり疫病は？ 疫病というのは？」

「解らん。本当に何らかのウィルスがばら撒かれたのか、或いは……」

ブライは目を閉じる。ハカセの怒りが解っているために。

「遺跡から放出されたナノマシンが……命を奪っていったのかも知れない」

「そんな……そんなコトをあの遺跡がっ！」

ブライはハカセの感情が納まるのを待つてから言葉を続けた。

「……総てはオレの推測だ。だが、そう考えると辻褃が合う。過去の移民が全て失敗した理由。オレとアルテ、レミとラミの親がこの星に呼ばれた理由。調査結果が総て隠されている理由。セルケトが遺跡調査を止める理由。オレ達が遺跡に立ち向わなければならぬ理由。そしてテミスにアレほどの攻撃能力がある理由。総てはあの遺跡が……」

「……元凶なんですね」

ハカセの瞳に何かの炎が宿った。それは復讐だろうか？ 純粹な怒りだろうか……

「でしたらっ！ 今度の「戦争」からボク達もダイブインしますっ！ ダイブインじゃなくてもアルテさん達が使っている方法で。そして、ボク達も遺跡に……」

「駄目だ」

ハカセの提案をブライは一蹴した。

「あの方法は危険だ。まだ頭蓋骨の形が決まり切っていないオマエ達を使うのは自殺行為だ。一瞬で脳神経がやられるぞ」

「でもっ！ でもっ。ボク達だっ……」

「それにな。オレ達が失敗したら……次はオマエ達がやるんだ。大丈夫。疫病すらも乗り越えたんだ。オマエ達は巧くやれる。オレ達が失敗したとしても……オマエ達はオレ達の失敗を糧にして次は巧くやってくれ。な？」

ブライの説得に……ハカセは肯いた。ユキ、マキ、アキも肯いた。涙目で。決心していた。

「皆さん。落ち着くのです。いまのはブライ様の戯れ言というか総て勘違いなのかも知れませんか？」

レミの戯けた声に皆の感情が一掃する。澱んだ何かを涼風が吹き飛ばしてしまったかのような……そんな感覚にビージー達は包まれた。

「そうよ。ブライが勝手に推測したコトなんだからね。騙されちゃ駄目よ？」

アルテが思いつき作り笑顔でレミの調子に合わせる。

「そうそう。総ては……セルケトやテミスから全部聞いてからにしましょ。時が来れば全部教えてくれるんだからさ？」

ラミも作り笑顔で皆を落ち着かせる。

そしてビージー達とブライも笑顔を作った。

……誰もがブライの推測が正しいと信じて、そして信じたくないために、笑い合った。

「ふう。なんかオレもすっきりしたよ」

「あら？ ブライだったらいつも全部勝手に背負っちゃうんだから。誰も頼んでませんよおだ」

アルテの幼い仕草の反論に笑う。

「そうなのです。それに今、考えるべきコトは別なのですよ？」

レミの指摘にラミが気づいたように言う。

「そうよ。今、考えるべきなのはアイツらよ。バクランとかいう乱入者達のことよ」

「残念だがソイツらのことはテミスとセルケトに任せるしかない」

ブライの諦めきった言葉に皆が「んむ？」と怒りを混ぜた疑問の視線を返す。

「相手は宇宙空間だからな。オレ達には手が出ない。出しようがないだろ？」

ブライの指摘に皆は「あ。そうか」と納得した。

「ま、アレほど遠回しながらもオレ達のことを気にしているらしい
テミスに任せよう。セルケトは……言っちゃなんだが喧嘩が得意に
は見えないからな」

皆はテミスとセルケトの容姿と普段の言動を思い浮かべて全員が
首肯した。

苦笑いしながら。

だが……何一つとしてブライ達の思い通りには進まなかった。

6・乱入者 5（後書き）

この小説は『イシスの記憶』、『ラプラスの魔女』、『101人の瑠璃』などの後編となります。

途中ですが感想をお待ちします。

7・壊されたセルゲト 1（前書き）

惑星に残された12人の少年少女とアンドロイド達の物語

7・壊されたセルケト 1

7・壊されたセルケト

翌日。普段と変わりない生活が始まった。

朝食を食べ、農作業をし、勉強し、昼食を食べ、そして勉強。自由時間となり、思い思いに過ごす。

ただ1つ。頭上に3つ目の月が浮かんでいること以外は。

いつの間にか赤い月は昨夜とは反対側にいる。別軌道を回り、周期が違う故だろうとブライは考えていた。

それ以外の違いは……皆が居る場所のモニターに常にテミスが映っていることだろう。

何とはなくだが、セルケトがチャンネルを合わせて映し、セルケトがいなくても誰かが映していた。その理由はと問われれば、モニターを消す時のテミスの寂しそうな顔と、映し始めた時の嬉しそうな顔、そして別れ際の『次の場所でも映して下さることを願っています』という言葉だろう。

アルテは嫌がってはいたが、皆が映してしまうのは黙認していた。

そして……そんな状況に皆が慣れ始めた頃。

「テミス様？」モニター前に進んだレミが小首を傾げながら訊く。

『何で御座いましょうか？ レミ様』

モニターの向うのテミスは呼び掛けられたことを喜んでいるようで、笑みを満開にして訊き返している。

「そんなに御一緒したいのですしたら……ここに来られては如何でしょう？」

レミの提案に、アルテが露骨に嫌そうな顔をし、ラミが「また余計なことを言い始めた」と言わんばかりに頭を抱え、ブライは「面倒だからそれでもいいかもな」と無関心を装い、ビージー達は「どうでもいいや」と賛否を棄権し……キッズ達は後先考えずに喜んで

いた。

「どうやらキッズ達にとってテミスは「何かプレゼントしてくれる親戚の叔母さん」というレベルの認識らしい。」

『そうですか？ ではお言葉に甘えて』

嬉々とした表情を隠さずそくさとモニターから姿が消えてから……数分後にはホテルの庭先に惑星往還機が降り立った。

「……随分と早いわね？」アルテが不審そうな表情を隠さずに言い放つ。

「たぶん……宇宙空間の低軌道が高々度の大気中にも待機していたんだろ？」

ブライの言葉に皆が不思議がる。

「インフォメーションアンドロイドは移民船一隻に数体は乗っている。制御しているのは移民船本体だからな。惑星往還機で1体待機していても不思議じゃないさ」

皆は「なるほどね」と改めて納得した。

往還機から降り立ったテミスは日傘を掲げてから恭しく挨拶する。

『これはこれは皆様。お出迎え戴き恐悦至極で御座います』

「白々し」アルテはご機嫌斜めだ。

『いえいえ。こちらこそこのような事態にも関わらず来て戴いて感謝の言葉も御座いませぬ』

出迎えたセルケトは……心底から喜んでいるように見える。

「ま、実際、バクラン達が乱入しかねない状況だからな。セルケトには心強いことは確かだ」

ブライの解説に皆は納得する。

と、妙に場が和んでいた時、テミスがキツと空を睨んだ。

『……とうとう痺れを切らして侵入してきましたね』

皆がテミスの視線の先を見上げると……そこに白いホウキのような雲が伸びていく。

「大気突入した？」ブライが呟き、皆が状況を呑み込んだ。

『バクラン達が突入してきました。皆様はここで。ご安心を。総て

……』

テミスが指を鳴らすと……惑星往還機から背中に翼を背負ったメイド、つまり対人戦闘用メイド型アンドロイドのディアナ達が数体出て来て深々と頭を下げた。

『……対人戦闘用メイド型アンドロイドであるディアナ達が「対処」致します』

テミスが日傘を閉じるのを合図にディアナ達は飛び立った。手に……自動小銃のような武器を携えて。

『迎撃まで……暫くは時間がかかるでしょうが問題はありません。』
というか問題なぞ発生させません』

テミスのごく自然な攻撃的な笑みにビージー達は震え上がり、キッズ達は無邪気に喜んだ。

アルテ、そしてレミとラミは……「そうならいいけど」と少し不安げな表情を浮かべている。

ブライは……この先どうなるのが解らずに戸惑っただけしかできなかった。

7・壊されたセルケト 1（後書き）

この小説は『イシスの記憶』、『ラプラスの魔女』、『101人の瑠璃』などの後編となります。

途中ですが感想をお待ちします。

7・壊されたセルゲト 2 (前書き)

惑星に残された12人の少年少女とアンドロイド達の物語

7・壊されたセルケト 2

暫くは普段のままに過ごした。

だが……突然の爆裂音が事態が急変したことを告げた。

「何っ？ 今の音はっ！」アルテが大声で誰と無しに確認する。

「旧市街の方だ」ブライが音のする方を確認して呟く。

そして……テミスが自分の耳に手を当てるような仕草をして『何ですって？』と困惑の表情を浮かべた。

そしてセルケトがモニターの電源を入れ、回線を255に固定する。

大きく映し出されたのは……インカムをつけたディアナ達。

ブライはディアナ達のチョーカーとイヤリングに飾られた24という数字から宇宙戦艦『テミス』に残って制御しているディアナ達だなと推測した。

「すみません。昨夜のうちに大気圏に緩速突入を果たしていたようです」

『では先程の大気圏突入は？』テミスが訊き返す。

『囿でした。無人の突入機です。今ディアナ12が確認』

モニターが誰も乗っていない小型の突入機の映像を映す。

「私としたことが……」テミスはギリツと唇を噛む。

『ディアナ13はホテルを警護っ！ 439を現場に派遣っ！』

派遣先は旧市街。急げっ！』

『はっ！』

直後にホテルの庭先の惑星往還機が飛び立つ。3体のディアナを残して。

モニターが再度切り替わり……衛星軌道からの旧市街地の映像になる。

再び数箇所爆裂し、粉塵が舞い上がる。

「やつらは……一体何をしているんだ？」

ブライが呟く。予想とは違う相手の拳動に戸惑う。

『今……銀河中央政府から通信が届きました』テミスが報告する。

『彼らは……囚人。ただし、無人の星からの鉱石などの採取と売買は認められている……行動自由終身刑の囚人です』

それは宇宙を監獄とした終身刑。自身の糧を自分達で探させ、社会は有益な資源を囚人達から得るといふ……コストを重視した宇宙時代の刑罰。

『昨日モニターに映したのは……自分自身の行動規範文書と採取可能対象星のリストの本と推定されます』

「それじゃ、アイツらが……この星に降りる権利はないんでしょう？」アルテの問いにテミスが肯く。

『しかし、内容はほぼそのままです。移民が成功していない星の場合、居住区以外の場所での「採取」は認められています』

テミスの返答にアルテが怒った。

「でも旧市街はみんなが住んでいた場所よっ！壊したりしていい場所じゃないわっ！」

『当然です。このコトは銀河中央政府に報告致します。ですが……』再び爆発音が響く。

映像は惑星往還機からの映像に切り替わる。爆発箇所も詳細に解るようになった。

『今成すべきコトは実力による強制排除です』

画像に往還機から飛び立ったディアナ達が映る。携えているのは……長銃身の銃器。

『そして先住者は……総ての行動を取ることが赦されています』テミスが微笑む。その笑みは……凄絶。

『私は先住者であるアナタ達、そしてアナタ達の代理人であるセルケトから彼らの強制排除を委託された。それで宜しいですね？』

念のための確認にセルケト以下全員が怯えながらも首肯した。ただ一人ブライはモニターの中に違和感を覚えた。

「ちよつと待て。今の所の左下をズームしてくれっ！」

指示されてズームされた映像の中には……

「トマっ？」アルテが叫ぶ

トマは農作業ロボットを操作して走っている。

「アイツ、何でそんなところに……」ブライは唇を噛み締めた。

トマはテミスが来た時、セルケトの後ろに隠れるようにしていた。そして直後のバグラン達の大気圏突入に一人で倉庫に走り……ロボットに飛び乗った。

直後にディアナ達が飛び立ち……トマは自分が向かう必要が無くなったと判断した。

しかし……自分の中の正義感はまだ燃え上がっている。

（賊はあのアンドロイド達に任せて……何をすべきか？）

暫し考えても答えは見つからない。

（そうだ。取り敢えずパトロールすべきだ）

いつだったか観た映画の保安官はいつも街を見回っていた。

自分もそうすべきだと勝手に決め、旧市街へと向かった。

誰にも告げることなく……

そして今、旧市街で賊が暴れている。

自分は正義の保安官だっ！

トマは興奮していた。

現場に向かい、不埒な暴漢をやっつけてやるっ！

それが如何に無謀で無責任な行動だと何も省みずに……

7・壊されたセルケト 2 (後書き)

この小説は『イシスの記憶』、『ラプラスの魔女』、『101人の瑠璃』などの後編となります。

途中ですが感想をお待ちします。

7・壊されたセルゲト 3 (前書き)

惑星に残された12人の少年少女とアンドロイド達の物語

7・壊されたセルケット 3

「バカ野郎っ！」

叫んで部屋を飛び出ようとしたブライを…… テミスが襟首を掴んで引き戻した。

「何をするっ！ バカ野郎っ！ トマを助けに行かないとっ！ っ
た、いたたた……」

「バカ野郎はアナタです。現在の生身のアナタは戦力にはなり得ません。ただの要救助対象者です。要救助対象者数が倍になってしまつてはディアナ達の行動が著しく制限されます。失礼ながらこの場で見ていて下さい」

テミスはブライの後ろに回り腕の関節をきめて締め上げている。いや、ブライの腕を締め上げたテミスの腕がブライの顎まで伸び、顔をも歪に締め上げている。

その動作は流れるように見事。

「解りましたか？」

「わかつたっ！ 解つたから離してくれっ！」

テミスはブライをあつさりと放し、モニターを注視する。ブライは憤った感情のままにその足に横蹴りを入れようとした。が、ブライの行動を察知していたかのようにテミスはふわりと飛び上がり……くるりと体を回して着地した時には……ブライの両脚は折りたたまれたように関節をきめられていた。

「この技はリバーサインディアンデスロック。先程のはチキンウィングフェイスロック。どちらも原初のガイアでの公開格闘で使われていたという古の技です。まだ続けますか？」

ブライは……痛さのあまりに声が出ず、両手で床を叩き、降参した。

テミスが技を解いた後も暫くは起き上がれない。

「何やってんのよっ！ こんな非常時にっ！」

トマへの心配をブライへの怒りへと変えて吐き出すアルテは、それでも仕方なしに抱き起こす。

「いや、すまん。何というか……やはり戦闘能力は半端じゃないな。トマは？」

「トマは……なんか建物の間に入っていったわ」

ブライが皆を見渡すと……トマの実の姉であるユマが一番心配している。

「ユマ。大丈夫だ。テミスはオレをあつさり叩き伏せるほどに強い。ディアナというお姉さん達はもっと強い。トマを無事に救い出してくれる。きっとだ」

アルテは……ブライの暴挙もあながち無意味ではなかったのかと少しだけ感心した。

(いや？ 転んでもただでは起きない性格だというコトよね)

アルテは感心するのを止めて呆れることにした。

「違うの。トマは……自分の家に向かっていて」まだユマはトマを心配していた。

モニターに映し出されているのは……同じ形の建物が並ぶ団地の一角。そして建物の間の中庭に……トマが乗り捨てたロボットが佇んでいる。

「あれほど……もう二度と行かないって約束したのに……」

それは姉弟同士での約束だったのだろう。殆どの人間が死に絶えた、疫病が流行ったという事実から心を守るための幼い約束なのだろう。

「そうか。じゃ、叱ってやれ」

ブライはユマを抱き上げる。

「もう直、無事に戻ってくる。そしたら叱ってやれ」

ユマは黙って肯き、そして共にモニターを凝視した。

トマは……コンクリートの階段を上っていた。

自分の家、工場横のアパートの一室へと。

昔、家族と住んでいた場所。お父さんとお母さんと姉のユマと住んでいた場所。隣は叔母さんの家族が住んでいて、かなり年上の従姉妹のお姉さんが住んでいた。

疫病が流行り……従姉妹のお姉さんが倒れ、叔母さんが倒れて、叔父さんがいつの間にかいなくなった。そしてお母さんが起き上がれなくなり、お父さんも帰ってこなくなった。

でも……思い出はあの場所にある。

姉のユマは「もう二度と行かない。悲しくなるから」って言うていたけど、自分にとっては……いつも行きたいと思っていた場所。その場所に……

何かの影を見た。

仲間達ではない。

あのテミスとかいうアンドロイドの仲間でもない。

誰かが、自分達の家の中にいる。

トマは……自分の家のドアが壊されているのを見て叫んだ。

「誰だっ！ 誰だっ？ 名乗れっ！」

それは映画での保安官の台詞。同じ言葉を言うことで……少しだけ強くなれた気がした。

部屋に入り睨む相手は……機械の身体。

ロボットが部屋の中で何かを捜していた。

『ふん。しけた星だな。何にもありやしない』

声が出た。よく見たら胸の所にカメラレンズとモニターがある。

そのモニターに映っているのは……昨日、変なことをいっていた大人。

確かロバーとか言われていた髭面の男の顔。

つまり相手は遠隔操作で動いているロボット。

「出て行けっ！ ここはボクの家だっ！ さっさと出て行けっ！」

7・壊されたセルケト 3 (後書き)

この小説は『イシスの記憶』、『ラプラスの魔女』、『101人の瑠璃』などの後編となります。

途中ですが感想をお待ちします。

7・壊されたセルゲト 4 (前書き)

惑星に残された12人の少年少女とアンドロイド達の物語

7・壊されたセルケット 4

叫ぶ。ありったけの声で叫んだ。

だが相手はチラリと振り向き、あっさりとは無視した。

「誰かと思ったら……小僧じゃねえか。さ、邪魔だからでいきな叔父さんは正当な理由で金目のものを探して盗もうとしているんだからよ」

勝手な理屈をこね、タンスの中を探り、中身を放り出し、タンスをも投げ捨てる。

「ち、タンス預金すらもない。さて……あと何かありそうなのは……」

トマは両手を広げてロボットを止めようとするが、あっさりと振り払われて倒れたタンスの上に転がった。機械は奥の部屋へと進んでいく。

「やめろっ！ やめろっ！ そこはみんなの部屋だっ！ ボク達の部屋だっ！」

ロボットはトマの抗議と抵抗を無視してありとあらゆるモノをひっくり返す。

「ん？ 何だコレ？」

ロボットが何気に拾い上げたのは……細長いメモリーティック。

「ああ。家族写真とかが入っているのか」

カメラの記憶媒体として使われているありふれた記憶媒体。

「返せっ！ それはボクのだっ！ 返せっ！ 返せったら返せっ！」
トマは無謀にもそれを奪い取ろうとロボットにしがみつく。だが、あっさりと振り払われる。

「ほう？ そんなコトを言われるととてつもない宝物に見えてきたな。これだけでも持って帰ろうかしらね？」

メモリースティックを機械の指で弄ぶ。トマは獲ろうと何度も挑むが、右左へと両手で投げ遊び、ロボットはトマをからかい続ける。

『ははは。そろそろ飽きちゃった。こんなモノ壊してしまおうね』
ロボットがメモリースティックを弄ぶのを止め。指の間に挟む。
そして力を入れて……メモリースティックが軋み、ひび割れて……
直後っ！ ロボットが吹き飛んだ。

トマの頭上を越えて、ロボットは反対側の窓を壊して外に落ちていった。そして凄まじい砲撃音と振動が響く。

トマが振り返ると……窓の外で長銃身の重機を携えたディアナがホバリングして微笑んでいた。

『ディアナ6よりテミス様に報告。敵ロボットを粘着弾にて吹き飛ばし、上空よりディアナ8、9の斉射で完全に破壊。トマ様に影響のないタイミングと射角を確保するため遅れてしまったことをお詫びします』

ホテルでは皆が喜んでいた。

『ディアナ4より報告。これで敵、遠隔操作ロボット6体は総て排除しました。これより要救助対象者と共に帰投します』

ホテルのモニターにはディアナ達とアパートの床に呆然とへたり込んでいるトマの姿が映っている。

「な、大丈夫だったろ？」

ブライに言われてユマは涙を流して喜んでいた。

「帰ったら……うんと叱ってあげなさい。お姉さんなんだから」

アルテに言われてユマは無邪気に笑った。涙を溢しながら。

『さあ。トマ様、帰りましょう。皆様が心配されています』

トマは……目の前に落ちていたひび割れたメモリースティックを拾い上げて……ディアナ6に従った。

ホテルに帰ったトマはユマを筆頭に皆に怒られた。

「もう二度と勝手な行動をしないと約束しなさいっ！」

最後もアルテに叱られ、約束し……そして抱きしめられた。

「でも……無事でよかった。無茶なことはしないでね」

アルテに涙ながらに説得され、トマは黙って肯いていた。

だが……総ては罫を仕掛けるためのバグラン達の策略だった。

日が落ち、夕食となった。

昨日までと違い、ディアナというメイドが手伝うこととなり、夕食は随分と賑やかだった。

それは単に数が増えたというコトよりもテミスとディアナ達が話し上手だったことにある。

ブライは（テミス達も人間に触れたいと思っていたのだろう）と判断していた。元々は移民船の統括コンピューターと支援アンドロイド。担当したという惑星タマジのコトを思いだしていたのかも知れない。

賑やかな時はあっという間に過ぎ、消灯時間となった。

7・壊されたセルケト 4 (後書き)

この小説は『イシスの記憶』、『ラプラスの魔女』、『101人の瑠璃』などの後編となります。

途中ですが感想をお待ちします。

7・壊されたセルゲト 5 (前書き)

惑星に残された12人の少年少女とアンドロイド達の物語

7・壊されたセルケト 5

「それにしてもディアナ達の子どもの扱いは見事ね。まるでベビーシッターを専門でしていたみたい」

ブライの部屋でアルテはテミスに感謝していた。レミとラミも肯いている。

いつもならばキッズ達を寝かしつけるために奮闘するアルテ達も今夜はすることがなかった。ディアナ達の子守は実に見事でそつがなく、キッズ達はあっさりと寝てしまった。

『お褒めにあずかり恐悦至極に存じます』

「何処でそんな経験を覚えたのですか？」

「惑星タマジで覚えたの？」

レミとラミの質問にテミスは微笑みのままで首を横に振る。

『いいえ。私達、イシスの記憶を元に行動しているアンドロイドにとっては……「本能」と呼んでも差し支えないコトでしょう』

ブライが怪訝な顔で訊き返す。

「機械のアンタが『本能』？ そんなモノがあるのか？」

テミスは懐かしい何かを思い出すかのような顔になる。

『ええ。イシス様から受け継いだ記憶の中に……子守の記憶があります。実際、イシス様はある植物学者の孫娘を7人ほど育てられています。もちろん、孫娘様達の母親である植物学者の娘さんと一緒にですが。ディアナ達もまた私から記憶を受け継いでいる以上、小さい子どもに対処するのは……やはり「本能」に近いモノとなるでしょう』

イシスの表情にアルテも安心したような表情を浮かべる。

「セルケトが……キッズ達に慕われるのも無理はないってコトね」

アルテの言葉にテミスは優しい笑みを形作った。

『セルケトは……怯えているのです』

「怯える？ 何を？」ブライが訊き返す。

『いつまた「疫病」が流行るのか解りません。そしてその結果をセルケトは何回も見てきた。私と同じ能力がありながら、移民は……成功しているとは言い難い状況が続いています。その現状がセルケトを臆病にさせているのでしよう』

テミスは優しい笑みのまま立ち上がった。

『少し言葉が過ぎたようです。セルケトと同じ状況に私が置かれたら……私は即座に遺跡を破壊していたでしょう。セルケトはそれを行わずに、ただただ、人間を信じ、人間が対処することを待っている。私にはできないことです』

そして一礼する。

『私は食堂で待機しています。このホテルの警備はディアナ達にお任せを。瞬刻の間なく警護する事をお約束致します』

テミスは『ではこれで』と立ち去り、部屋にはブライ達が残された。

「なんかさ……」アルテが呟く。

ブライは黙って次の言葉を待った。

「……いろいろと圧倒されてしまいましたですね」

レミがアルテの言葉を継いだ。

「強くて優しくて……セルケトと同型とは思えないぐらい厳しいけど、総ては優しさよね」

ラムミが補足する。

「ああ。そうだな」ブライは肯く。

「アレほどの戦闘能力。アレほどの心遣い。子どもの接し方。長い年月が与えた才能だな。総てが長けている。オレ達、人間が敵う相手では無さそうだ」

ブライはベッドに身を投げる。

アルテ達は肯くように暫く黙っていたが……レミが妙に艶っぽい笑みを浮かべた。

「でも……機械にはできなくて人間にしかできないコトがありますよっ」

ブライとアルテはなんのコトだか解らず、ラミは既に察しているように慌て始めている。

「あれ？ ブライ様とアルテ様は解らないのですか？」

ブライとアルテは目配せしたが互いに意味が判らず疑問符を交わすだけ。

「人間にしかできないコト？ なんだそれは？」ブライが降参して訊く。

レミはあっけらかんと言った。

「それは人間を産み出すコトなのです」

レミは無邪気に笑っている。ラミは頭を抱え、アルテは暫くぼかんとしていた。

「そして、それが大人になった証明なのかも知れないのです」

レミの次の言葉にアルテも意味が解ったようで、顔を紅潮させ始めた。

「はい？ 大人の証明？」ブライはそれでも意味が解らない。

アルテは妙な雰囲気搔き消すかのように大きな声と共に立ち上がった。

「れ、レミっ！ ラミっ！ もう遅いから寝るわよっ！」

「はあい。あ、ブライ様。レミはいつでも大人の……」

「レミっ！ そんなコトを事細かく言わなくて良いからっ！ おやすみっ！」

まだ何か言いたそうなレミをアルテとラミが両脇を固めて連れ出していく。

「ブライ？ へ、へんなコトを考えないでよっ？ アタシ達はまだ15歳と16歳だからねっ！」

アルテはブライにとって謎の言葉を残してドアを勢いよく閉めた。「へんなコト？ なんだ？」

残されたブライは……意味が解らず、何をどうしていいのかも解らず、ただアルテ達が残した甘酸っぱい薫りというか雰囲気搔き消すように頭をかきむしり、消灯してベッドに潜り込んだ。

その深夜。

トマがベッドから起き出し……机の引出しを開けて中から壊れかけたメモリースティックを取り出した。

それは昼間の騒動で手に入れた……自分の家から持ってきたメモリースティック。

トマの脳裏に賊のロボットの言葉が甦る。

『ああ。家族写真とかが入っているのか』

「家族の……写真」

アルバムは既に持ち出してある。何度も何度も見た。

しかし……そのメモリースティックの中には……まだ見たことがない写真が入っているのかも知れない。

父の顔。母の顔。叔母さんの顔。従姉妹の顔。亡くなってしまった人達を思い出してしまふ。

そして見たことがない写真がどんなのかと思ってしまう。

トマはそつと部屋を出て……リビングルームへと向かった。

セルケトはいつもリビングルームで待機している。

それは朝に皆に挨拶するため。食堂に繋がる廊下手前に位置するリビングルームは朝の挨拶をするのには最も適した場所。

そして……トマは誰にも会うことなくリビングルームに辿り着いた。

『……え？ トマ様、こんな時間に？ 如何されましたか？』

問うセルケトにトマは……黙ってメモリースティックを差し出した。

そしてそれを何処でいつ手に入れたのかを言わずに……言ってしまった。

「この中に……ボクの家族の写真が」

セルケトは黙って受け取り……メモリースティックの状態を確認する。

『壊れているかも知れませんが……中の情報を、写真を見たいのですか？』

トマは黙って肯く。

セルケトは……何一つ疑わなかった。

『では私の中にコピーして解析しましょう。壊れていたら……すみません。でも、できるだけ修復しましょう』

セルケトの笑みにトマは安心して笑った。

『ではコピーします。この媒体にあったコネクタは……』

セルケトはイヤリングの1つを操作して……コネクタを選び、メモリースティックを接続し……中身を読み込んだ。

直後っ！

『あああああっ！』

セルケトは悲鳴をあげて倒れてしまった。

そして……動かなくなった。

7・壊されたセルケト 5 (後書き)

この小説は『イシスの記憶』、『ラプラスの魔女』、『101人の瑠璃』などの後編となります。

途中ですが感想をお待ちします。

8・タイムリミット 1 (前書き)

惑星に残された12人の少年少女とアンドロイド達の物語

8・タイムリミット 1

8・タイムリミット

『何事っ!』

異変に気づいたのはテミスが最初だった。

宇宙空間に浮かぶ移民船セルケトの反応が消えた。動力が突然、遮断されてしまっている。

『セルケトっ! 反応しなさいっ! 軌道制御をっ!』

そしてブライ達も異変に気づいた。

それはセルケトの悲鳴ではなく……総ての部屋の明かりが点滅し……そして何一つスイッチに反応しなくなったために。

『くそっ! コレかっ!』

部屋のドアも開かなくなったが、ブライはドアの横の非常コックを操作してドアを開け、リビングルームへと向かった。

直後に非常システムが立ち上がり、非常灯が点いた。

非常事態を告げる赤い灯りの廊下を走りリビングルームに辿り着いたブライが見たモノは……

倒れて動かないセルケトと横で呆然と立ち尽くしているトマ。

「トマっ! 何があつたっ?」

問い掛けてもトマはただ黙って首を横に振るだけ。その瞳に涙を浮かべて。

ほどなくしてテミスやアルテも集まったが、何が起こったのか解らない。

そして異変を発見したのはブライだった。

「なんだ? コレは?」

セルケトのイヤリングに接続している壊れかけたメモリースティック。

それを取ろうと手を伸ばすと……トマが素早く手を伸ばし奪い取った。

「トマ？ まさか……それは？」

ブライの問いにトマは黙ったまま首を横に振るだけ。

「トマっ！ 何だそれはっ？ 何処から持ってきたっ？」

叱責するブライをアルテが止める。

「ブライ、怒っちゃ駄目っ！ レミ、ラミ、トマを連れて行ってっ
！」

アルテの指示に皆が動き、ブライを押さえ、トマをリビングから連れ出そうとした。

が、それを止めたのはテミスとディアナ達。

『トマ様。伺いたいことがあります』

トマを見下ろすその視線は……冷たかった。

「だからっ！ 今トマを責めても何にもならないでしょっ？」

『責めるつもりはありません。確認したいだけです』

アルテはテミスの行動を止めようと押し問答を続けている。当のトマはメモリースティックを両手で握りしめたまま。押し黙っているだけ。

そして膠着した局面を打開したのは……小さな平手打ちの音だった。

皆がその音の方を見れば……ユマがトマの頬を叩いた音だった。

「父さんが言ってた」

ユマの瞳はトマを見つめたまま。

「叱られることをしたのを怒っているんじゃない。叱られるようなことをしたことを隠したのを叱っているんだって」

ユマの瞳から涙が零れる。

「母さんも言ってた」

ユマが腕を振り上げる。

「そして謝らないことが一番悪いって」

トマの頬を叩いた。泣きながら。

「トマっ！ 悪いコトしたんでしょっ？ 悪いことをしたんなら謝

りなさいっ!」

ユマが泣きながら怒っている。

トマは小さく頷いて……アルテの元に行き、メモリースティックを差し込んだ。

「これ。これをセルケトに……中の写真を……」

後の言葉は言葉にならなかった。トマも泣き出して……大泣きして、言葉にならなかった。

「解った。大丈夫。ここにはテミスもいるから。アタシもいるしブライもいる。皆もいる。セルケトは……ちょっと疲れて眠っているだけよ。直ぐに起き出すから……」

アルテがメモリースティックを受け取り、言いながら……涙を溢す。

同じ言葉を何度言っただろう。何度聞いただろう。

疫病が流行り、周りの人達が次々と亡くなっていく中で……何度も聞き、何度も幼い子供たちに言った言葉を……今、また口になっている。

忘れたはずの言葉を口になっている。二度と言いたくなかった言葉を声に出している。

3年前の記憶が甦る。忘れなくても忘れられない記憶が甦ってしまふ。

悔しくて、悲しくて、憤りが涙という形になって……瞳から溢れている。

アルテはトマを抱きしめた。

「大丈夫。きつとセルケトは直ぐに起き出す。だって……機械なんだもの。人間みたいに動かなくなったらそれで終わりってコトはないわ」

アルテの言葉にトマが肯く。涙でぐしゃぐしゃの顔で何度も肯いた。

その時……緊急回線用のモニターが点いた。

「おんやあ？ どしたのかしら？ 移民船のセルケトさんが壊れてしまったみたいね」

映し出されたのはバグラン達の1人。確かバンデとかいう痩せた男。

「そんなコトはないだろ？ あらホント。エネルギー反応がないわ。システムがダウンしちゃっているわね。長年の苦勞が祟って突然死でもしたのかしら？」

画面がバグランとかいう年の嵩んだ美女に変わり、勝手なことを言い始めた。

殆ど棒読みで。

「でも困っちゃったわね？ 移民船がいなくなってしまうと……くそガキちゃん達はただの漂着民扱いね。惑星ルクソルの権利は白紙に戻っちゃう。あ、そしたらアタシ達が上陸したらアタシ達のモノになっちゃうわね」

そしてわざとらしくウィンクする。

「うるさいっ！」

直ぐに反論したのはアルテだった。

「セルケトは直ぐに復活するわっ！ アンタ達の思い通りになんてならないからっ！」

アルテの言葉が聞こえていないのに相手はすまし顔のままですらに煽るようなことを言い始めた。

「バンデ。移民船セルケトちゃんが大気圏突入するまで後何時間か計算してあげたら？」

「はいはい。この船のオンボロコンピューターで計算したから誤差はたくさんあるけど……大体36時間後つてとこですね」

「あら。そんなにあるの。ま、じゃアタシ達はゆっくり高みの見物をしておきましょう。ワインでも開けて楽しみましょうね」

『……言いたいことはそれだけですか？』

テミスが冷静に確認する。殺意が籠もっているかのような声で。
「あ、テミスちゃんに怒られちゃった〜 そうそう。緊急回線は使
っちゃいけないだったわね。じゃ、バイバイ〜 くそガキちゃん
達」

幹線はぷつりと消え、リビングルームには憤りの感情が渦巻いて
いた。

静寂の中で渦巻く感情を……トマの泣き声が破った。

自分のしたことがどういう結果となったのか、やっと自覚して…
…後悔していた。そしてどうするべきかが解らずに……ただ、ただ
泣いていた。

「大丈夫。大丈夫だから」

アルテがトマをあやすが……トマは泣き止まない。そしてキッズ
達も泣き始めた。

セルケトが動かなくなつて……いなくなつてしまつと理解して。

8・タイムリミット 1（後書き）

この小説は『イシスの記憶』、『ラプラスの魔女』、『101人の瑠璃』などの後編となります。

途中ですが感想をお待ちします。

8・タイムリミット 2 (前書き)

惑星に残された12人の少年少女とアンドロイド達の物語

8・タイムリミット 2

「ごめん。ブライ、ここはお願い」アルテは弱々しくブライに頼んだ。

そしてテミスにメモリースティックを渡し、「……お願い」と言っ
つて、トマを抱いたまま……キッズ達を連れてリビングルームから
出て行った。

残されたブライはレミとラミにも「頼む」と促し、2人はアルテ
の後を追った。リビングルームに残ったのは、बीジー達とブライ、
そしてテミスとディアナ達になった。

「それが……セルケトを壊したのか？」

ブライが怒りの感情を無理矢理抑えて睨み付ける。

「……ええ。何が入っているのかはコレから調べます。ディアナ1、
コレを」

テミスはディアナ1にメモリースティックを渡す。受け取ったデ
イアナ1は無造作にイヤリング状の接続コネクタに突き刺した。

「お、おいつ！ 大丈夫なのか？」

「最初から疑わしいモノとして認識していれば、私達は影響を受け
ずに調べることができます。失敗しても……私が壊れるだけです」

ディアナ1は凄絶な笑みを浮かべ、ブライ達を怯ませた。

「……解りました。2年前に幾多のギガバンクのメインコンピュー
ターを停止させたデジタルウィルス「ゴルゴダ99-9999」の
変異タイプですね。対処方法は……」

ブライ達はディアナ1の次の言葉を待っている。

「……ハードウェアリセット。但し立ち上げる前にサブシステムな
どから該当ウィルスに感染したファイルなどを総て削除しなければ
なりません」

「それはつまり……どうなる？」

『セルケトの記憶が一部、或いは……殆どを消去するコトとなるかも知れません』

テミスが冷静に話す。そしてブライに確認した。

『時間をかければ影響は少なくなるでしょう。ですが、今は急がなければなりません』

ブライはさっきのバグラン達の言葉を思い出す。

「セルケトが……落下するの？」

『ええ……御覧下さい』

テミスはリビングルームのモニターの電源を入れる。そして映し出されたのは宇宙戦艦テミスのブリッジ。

『テミス様に報告。移民船セルケトの動力がダウン。惑星ルクソルの重力に囚われて落下しています。予想落下時間は130,493秒後。約36時間15分後です』

「本当に……そんな急に落下するの？」

『私達は低軌道に位置しています』テミスが冷静に説明する。

『常に短距離空間跳躍を実施し、この居住区が見える位置に移動し続けていたのです。それがシステムがダウンし軌道修正が行われなくなれば本来の軌道上の動きに従う。それが落下という結果をもたらします』

「落下を防ぐ方法は？」

『強制的にシステムをリセットし、少なくとも空間跳躍機能を復活させる』

「それに必要な時間は？」

『推定ですが、最短で約24時間。最長で128時間。そして最短で行った場合……』

テミスは言葉を匂切り、ブライを見つめる。

『セルケトの記憶は殆ど失われるでしょう』

「だが……他に方法はない」

ブライの苦渋の決断をビージー達も黙って肯いた。

「頼む。セルケトを……復活させてくれ。できるだけだけの記憶を残し

て」

『承りました』

テミスが微笑む。

そしてモニターから冷静な声が希望を告げた。

『報告します。連絡用シャトルでデアアナ25〜36、そして修復用作業ロボットが移民船セルケトに到着。コレより内部に入ります』
映像が切り替わり、連絡用のシャトルが移民船セルケトのドッグの扉をこじ開けて中に入った映像が映し出された。

「治るんですね？」ハカセが嬉々とした声で確認する。

『ええ。直して見せます。移民船セルケトと同型機である私、テミスが……イシスの名にかけて直します』

「あ、ありがとうっ！ 治してくれるなんてっ！」

ビージー達は代わる代わるにテミスに感謝し、そして立ち去った。

「アルテさんに、トマに教えてきますっ！」

吉報を皆に知らせるために。

リビングルームに残ったのはテミスとブライだけになった。

「泣いたカラスが何とやらだ」ブライも安堵の溜息を吐いた。

『コレで後は……』

テミスがブライを見つめる。

『ただ単に時間との勝負です。そして運との勝負です』

「運？」

テミスは笑う。少し悲しげに。

『ええ。ウィルスの感染ファイルが少ないことを祈りましょう。そして銀河中央政府がセルケトの……』

テミスが何かを言いかけた時、モニターからさらに事態が急変したことが告げられた。

『テミス様に報告。銀河中央政府より緊急通信っ！』

そして緊急回線用のモニターが再び点いた。

映し出されたのは……ただの文字の羅列。そして合成音声。

『戦艦テミスに告ぐ。惑星ルクソル付近を航行している船舶から移

民船セルケトの停止が報告された。事態を確認し報告されたし。移民船セルケトの停止が確認された場合、「指示」を速やかに実行されたし。移民達を収容し、惑星ルクソルを破壊。特に「遺跡」の完全破壊を実行されたし。繰り返す。移民船セルケトが停止していた場合……」

テミスは沈黙し、ブライもまた黙って銀河中央政府からの緊急通信を見つめていた。

沈黙の後、テミスはブライに告げた。

『ブライ様、貴方にだけは……総てをお話し致します。私が指示されている総てを』

8・タイムリミット 2 (後書き)

この小説は『イシスの記憶』、『ラプラスの魔女』、『101人の瑠璃』などの後編となります。

途中ですが感想をお待ちします。

9・奇蹟 1（前書き）

惑星に残された12人の少年少女とアンドロイド達の物語

9・奇蹟 1

9・奇蹟

夜が明けた頃。

全員がリビングルームに集まっていた。

宇宙戦艦テミス本体が録画していた緊急通信の再生を全員が見て……押し黙っている。

「つまり……セルケトが停止したことが銀河中央政府にバレたということなのね」

アルテが確認するように呟く。

「通報したのはバグラン達に間違いありません。アイツら、どこまでボク達を……」

拳を握りしめてハカセは怒りを露わにしている。

「アイツらのことはどうでもいい。総ては銀河中央政府とオレ達のことだ」

ブライが静かに話す。不自然なまでに静かに。

「そうよね。でも……あと30時間以内にセルケトは再起動するんじゃない？ それから銀河中央政府に報告したらいいじゃない。セルケトは動いているって。それですむんでしょ？ 違うの？」

アルテが確認するようにテミスに訊く。

だが誰も答えなかった。

レミとラミとビージー達とキッズ達は知らないが故に。

そしてブライとテミスは知っているが故に。

「どうなの？」

アルテが詰問するような声でテミスに詰め寄る。

テミスは目を伏せている。深い闇を瞳に宿して、言葉を失ったかのように。

自身に命じられている指示が過酷だと表すかのように。

「黙ってないではっきり言いなさいよっ！」アルテの手がテミスの

襟に伸びる。

それを遮ったのは……ブライ。

「テミスは……今から約24時間以内に銀河中央政府の指示により惑星ルクソルを破壊しなければならぬ」

「え？」「なぜ？」「どうして？」「そんなコトになるんです？」「口々に驚くアルテとレミとラミ。そして驚きざわめくビージー達とキッツ達。

ブライは目を閉じて絞り出すように言葉を繋ぐ。

「そういう風に『指示』されている。銀河中央政府によって。機械であるテミスやセルケトにとって『指示』は絶対だ」

テミスは黙って目を伏せたまま。

「じゃ……それじゃ、セルケトはどうなるの？」「アルテが詰め寄る。「セルケトが復活するのの後30時間必要なんですよ？ その途中で……テミスは、テミスは帰っちゃうの？ 修理しないで？ セルケトを置いて、アタシ達を置いて？ そんなの……」

「違う」ブライは冷静な声を挟んだ。「オレ達は置いて行かれることはない。テミスは24時間以内にオレ達を連れて遺跡を、惑星ルクソルを破壊してこの星系から立ち去らねばならない。それがテミスが果たさなければならぬ使命なんだっ！」

「セルケトは？」「アルテは努めて冷静に訊き返す。

「セルケトはどうなるの？ その場合、セルケトはどうなってしまうの？」

ブライはアルテを見つめて答えた。

「その場合、セルケトは……廃棄される。あるいは現時点で強制リセットして……最悪、総ての記憶を失う。そういう選択肢しか残されてはいない」

「総ての記憶を失う？ 私達のことも？ 全部忘れるの？」

「最悪の場合は……だ」

ブライはアルテを見つめたまま……苦しそうに顔を歪めた。

「そんな……ひどい」

アルテは言葉を失い口籠もる。代わりに八カセが訊いた。

「テミスさんは……どうしてそんな指示に従わなければならないんですか？ おかしいですよっ！ そんなの……そんなのおかしいですよっ！」

八カセも自分の感情を抑えるのに精一杯だ。

「……銀河中央政府も一枚岩じゃないってことさ。一方でセルケトにこの星への移民を命じ、セルケトの提案である遺跡調査を承認し、もう一方で遺跡の破壊と惑星ルクソルの破棄を決定した。そしてそれらが別々に実行され、この星にオレ達の親がきて、テミスが派遣された。確かにセルケトの意見が最初は重要視されたんだろう。だが、遺跡調査に来たオレ達の親も疫病で死んでしまったっ！ だから一度は押さえられていた意見が復活し、テミスが派遣されたんだっ！ だが……セルケトが存在する限り遺跡調査の意見が尊重されたという事実が残る。残っていたんだ。それでテミスへの指示の実行が保留された。セルケトとテミスの間での取り決めだがな。それは銀河中央政府内部の意見が対立し、互いに睨み合っていたという証でもある！ それがつ！ そう決まっていた取り決めが……」

感情が脈動し言葉が、声が荒れる。ブライは一度言葉を切り、自分の感情が納まるのを待った。

数度、深呼吸してから言葉を続けた。

「……そのセルケトが停止してしまった。停止したことが知られてしまった。それで銀河中央政府の意見が『遺跡の破壊と惑星ルクソルの破棄』に確定したっ！ それだけのコトだっ！」

声の大きさが感情の起伏がブライの心境を露わにしていた。そして皆に告げていた。

この事態に「オレ自身も納得なんかしていない」と。

「そして……テミスに命じた人間達がセルケトの意見を支持した人間達より少しだけせつかちだった。それだけのコトだ」

「納得できないわっ！」

9・奇蹟 1（後書き）

この小説は『イシスの記憶』、『ラプラスの魔女』、『101人の瑠璃』などの後編となります。

途中ですが感想をお待ちします。

9・奇蹟 2（前書き）

惑星に残された12人の少年少女とアンドロイド達の物語

アルテがブライに詰め寄る。

「そんなのっ！……そんなの無視すればいいじゃないっ！ 銀河中央政府なんて、勝手なことを言っつて、勝手なことをして何もしてくれない。セルケトは今まで私達を護ってくれていたのよ。そうでしょ？ 無視すればいいのよっ！ そうよ。銀河中央政府のバカどもの指示なんて無視すればいいじゃないっ！ 違う？ ブライ、私が言っていること間違っている？ ねえ？ お願い、はっきり言っつー！」

ブライはアルテの肩に手を置き、そして……心を潰すような声で言った。

「……オレも同じ意見だ。だがな……」

苦渋の表情を浮かべるブライ。悔しさが……作り笑いになってしまふ。

「今のオレ達じゃ……何も変えられないんだ」

ブライの言葉に皆が黙った。

アルテの感情が止まる。ブライの目に零れんばかりに浮かんでいる涙を見て。そして自分の瞳にも涙が浮かんできている。総てを理解してしまつたがために。

ブライが呟く。アルテの気持ちも、皆の気持ちも、総てを理解して。

「オレ達に奇蹟なんて……起きないんだよ」

過酷な現実を言葉にした。

重い沈黙の後……誰かが動いた。

『……アルテ様。今何と仰いました？ 誰のことをバカと？』

テミスが目を見開き、アルテを見つめている。

「いま？」アルテはテミスの変化に戸惑っている。

「えーと。銀河中央政府のバカって言ったけど……だよな？」

アルテはブライに確認する。ブライも戸惑いながらも肯く。

「そうですか。「銀河中央政府のバカども」……ですか」

テミスは記憶の奥底を検索しているかのように深い光りを瞳に宿している。

『……イシス様の記憶にある言葉を現実に耳にするとは思いませんでした』

そしてテミスは微笑んだ。迷いが払拭されたような笑みで。

『そして思い出しました。私への指示の中に「惑星ルクソルの住民の意見は最大限尊重するように」という一項があることを』

テミスはアルテの手を取り宣言した。

『私は……アナタの指示に従いましょう。銀河中央政府の指示は変更できませんが、時間までできるだけのことを致しましょう』

ただ1人、ハカセが何かを思い出して呟いた。

「奇蹟だ」

「奇蹟？」皆が疑問形で返す。

「奇蹟ですよ。ほら、ブライさんが言っていた奇蹟。ある植物学者の言葉を、呪文を言えば奇蹟が起きるって。それですよっ！」

皆が怪訝な顔で互いに見つめ合っている。

心の中で「そうか？」と戸惑っているのを隠せずにいる。

そして本当の奇蹟は……ひっそりと動き始めていた。

動いたのは……セルケトだった。

停止していたセルケトをリビングルームのソファに寝かせていた。そのセルケトが動き出している。起き上がるうとしている。

『ブライ様……』

その声に反応したのはテミスが一番最初だった。

セルケトの手を取り、抱き起こす。皆は……セルケト動き出した

という事実の数舜だけ戸惑い、そして歓喜した。

「セルケトっ！」アルテがそれだけ言っつて口を手で押さえている。涙ぐみながら。

「動けるのか？」ブライは驚きを歓喜に変えながら確認する。

「……ええ。今の私はエマーゼンシーモードで動いています。本体が何らかの原因で停止した時、このインフォメーションアンドロイドである私の端末が単独で起動するように……」

セルケトはゆっくりとブライを、アルテを、そしてレミとラミを見て力なく微笑んだ。

「皆様の……御両親様達から指示されています。私の本体が停止した時にも総てを、指示を……不揮発記憶媒体に記録した指示を実行するため。ですが、再起動システムコードが損傷を受け……起動に時間がかかってしまいました。申し訳ありません」

言葉に脈絡があまりないのは再起動中だからだろうか。それとも記録が損傷したためだろうか。セルケトは頭を下げようとすると動作がぎこちない。テミスが支えていないと倒れてしまいそうだ。

「ううん。いいの、セルケトが起動してくれただけで充分。そうだよね？」

アルテが皆に確認する。もちろん皆は肯く。満面の笑みに涙を飾って。

「もつたいたいお言葉……ですが、私は最後の選択を皆様にして戴かなければならないのです」

セルケトが何を言い始めたのかは誰も解らなかった。

「これから……皆様に求められていた……遺跡について、遺跡のことをお話し致します。そして選択して下さい」

セルケトはブライとアルテを見つめた。

「この星と皆様の未来を……」

9・奇蹟 2（後書き）

この小説は『イシスの記憶』、『ラプラスの魔女』、『101人の瑠璃』などの後編となります。

途中ですが感想をお待ちします。

10・イノーガ・エレメント 遺されていたモノ 1(前書き)

惑星に残された12人の少年少女とアンドロイド達の物語

10・イノーガ・エレメント 遺されていたモノ 1

10・イノーガ・エレメント 遺されていたモノ

『ブライ様とアルテ様、そしてレミ様とラミ様の御両親は遺跡を調査し……解明致しました。遺跡がナノマシンの集合体であることを。そして「あるプログラム」でナノマシンが制御されていることまで解明しました。そのプログラムとは……「ガイア神教」の規範、つまりガイア神教の……ある狂信者の意志が遺跡を司っている総てだ』

セルケトの説明を聞きながら皆は倉庫へと向かっていた。テミスも、そしてディアナ達も数体従っている。

『この中に……皆様の御両親が辿り着いた研究の成果が、結晶があります』

倉庫の端にあるブライが見つけたドアの前に立つ。三色の3つの菱形が六角形の中にある相転移炉動力室にあるのと同じマークが書かれているドア。セルケトがノブに手を伸ばし……そして動きを止めた。

『いけません。このドアの鍵は……何処に仕舞ったのか。記憶が損傷しています』

セルケトは額に手を当てて記憶を探るが……損傷してしまった記憶は空白を返すだけ。

『お気になさらず』ディアナ1が前に進み出て、ドアノブに手をかけて力任せに回す。

金属がひしゃげる音が響き、ドアノブというよりもドア自体が引きちぎられて……強引に開けられた。

『おや？ どうやら長年の劣化で脆くなっていたようですね』

ディアナ1の冗談に皆は引きつった笑いで「違っだろ」と心の中で返していた。

ドアの中に入ると……様々な研究用の機材。そして……壁際に放置された壊れたアンドロイドが数体。その姿形は……

「セルケト？ のスペアなの？」

「どうして……こんな所に？」

訊くアルテとブライにセルケトは微笑む。

「調査用のロボット、つまり御両親が筐体で制御する調査ロボットに私のスペアボディを提供致しました」

セルケトは微笑んだまま、自分のスペアボディを見つめる。

「……それしか私には協力できる術がありませんでしたから」

セルケトを支えているテミスは「バカなことを」と呟いた。

「それで本体が停止したのですね。スペアが存在し、移民船本体で待機していれば、あのようなデジタルウィルスで移民船本体が停止することはなかったでしょうに」

セルケトはテミスに微笑み返す。そして奥へと歩を進めた。

「私は移民船として失格ですから。何度も移民を……この星に来た方々を失っています。私が、私だけが何体も残っていても仕方ありません。私もでき得ることは総て成し遂げたかったです。私は……私自身は銀河中央政府からの指示で調査は禁じられています。

ですが、人間の制御で遺跡に赴くことは……銀河中央政府から禁止されてはいませんでしたから……」

ブライは「それで……記憶が無かったのか」と心の中で呟いていた。

普段から見えていたセルケトが目の前にいて、別のスペアボディが筐体で制御されていた。

だから記憶に筐体で制御していた調査ロボットの記憶が……無かったのかと納得していた。

「だから私は私の総てを賭けて協力を申し出たのです」

テミスは目を閉じて呟いた。

「だからといって……アナタが停止してしまっただけ……」

「良いのです。私は……総ての元凶が遺跡だと信じていましたから」

セルケトはアルテとブライを見る。レミとラミも。

『そして賭けていました。移民船としての運命を、使命を……皆様の御両親に。調査に賭けていました』

『バカなことです』 テミスは一蹴した。

『イシス様の記憶にも在ったでしょう？ 機械である私達は「バクチは禁止」だと。そんなコトも忘れてしまったのですか？』

セルケトは力なく笑った。

『私は機械である前に……移民の皆様を御守りする責務がありましたから』

そして言い直した。

『いえ……移民船として失格である私は……この星が人間を拒むのでしたら、それを取り除くことで失格であることから逃れたかっただけなのかも知れません』

「そんなコトはない。そんなコトはないからっ！」

アルテがセルケトの手を握る。

「セルケトは……移民船として私達を護ってくれていた。失格なんかじゃない。私達にとってセルケトは……失格なんかじゃない」

セルケトは微笑むだけ。

『もつたいないお言葉。ですが……私はやはり失格です。何故ならば……皆様に星の運命を決めて戴かなければならないのですから……』

……

部屋の奥に辿り着き、指差す。セルケトが示す先には……虹色に光る液体が満たされた大きなガラス槽が在った。ガラス槽には数個の電極が浸されており、そしてプレートが貼られていた。

ブライ、アルテ、レミ、ラミと記されたプレートが。

『遺跡を構成するナノマシンを採取し、ブライ様、アルテ様、そしてレミ様、ラミ様に再プログラムされたナノマシン。それが……』

セルケトは数舜、言葉を止めた。まだ迷っているかのよう。

『……皆様の御両親が遺されたイノーガ・エレメントです』

10・イノーガ・エレメント 遺されていたモノ 1 (後書き)

この小説は『イシスの記憶』、『ラプラスの魔女』、『101人の瑠璃』などの後編となります。

途中ですが感想をお待ちします。

10・イノーガ・エレメント 遺されていたモノ 2 (前書き)

惑星に残された12人の少年少女とアンドロイド達の物語

倉庫奥の部屋からイノーガ・エレメントはガラス槽ごとディアナ達の手によって運ばれ、筐体に接続された。

『このナノマシンは……制御用信号が伝えられないと結晶化します。一見、単なるセドニウム遷移体として判断されるような状態に』

確かにその虹色の液体は倉庫奥から運び出すために電極で伝えられていた信号を遮断すると一瞬で砂のようになり、そして互いに接触し融合してこぶし大の大きさの結晶へと姿形を変えてしまった。

そして今、それぞれの筐体に接続し信号を流すと……熱せられた蟻のように溶け、虹色の液体へと姿を変えた。

『……今まで、7日毎に行っていた「戦争」の度にそれぞれのガラス槽へ私が皆様の信号、筐体からの信号を転送して同調制御を、つまり馴れさせていました』

「馴れさせていた？」ブライが訊く。

「どういう意味？」アルテも訊く。

『このナノマシン集合体は……』

セルケトが髪に挿した簪の1つをポキリと折り、虹色の液体に浸す。

簪は浸した部分が跡形もなく溶けて消えていた。

『……この様に自身と違うと判断した物体を総て「喰い尽くす」のです』

皆が震え上がる。

『正確には……浸蝕します。そして虚数次元振動を与え、虚数次元振動物質と変え、自分達と同じナノマシンを造り出す。まるでアメーバが増殖するように』

「それが……」アルテが怯えた声を出す。

「イノーガ・エレメントなのか」ブライが呟く。

皆、怯えて……足がすくんでいる。

そんな雰囲気を破壊したのは素っ頓狂な声。

「それは……以前見たことがあります」不思議少女レミの声だった。
「何言ってるの？　こんなの見たこと無いわよっ！」慌ててラムミが止めに入る。

「あれ？　ラムミは覚えてないのですか？」レミが小首を傾げて訊き返した。

「この星に来る前に御父様が誕生日プレゼントで造ってくれたスライム・ロボット。あれはワタシ達と呼ぶとみよーんと身体を伸ばして呼んだ方に来たではないですか。忘れてしまいました？」

ラムミは暫く悩み、何かを思い出した。

「ああ。あの気味の悪いナノマシンの集合体みたいなヤツ。アレが何でこれと……え？」

ラムミ自身が言って驚き、振り返った。自分の名前が貼られたガラス槽の中の液体を。そして同じキーワードを言ったことに驚いていた。

「アレは……プログラムしたスライムに、プログラムしていないのをくつつけると……一体化して……2つに分けても同じように動くようになった。アレが……コレの？」

「基本システムなのです。つまりコレはワタシ達の御父様の技術の結晶なのです」

晴れやかに万歳するレミをラムミ以下、全員が呆気にとられていた。
「そうと解れば早速……」

「いけませんっ！」

ガラス槽に近寄るレミをセルケトが止めた。

「コレは……そんなに生易しいモノではありません。制御が……信号が正しく伝わらないと先程のように……」

皆がさっきの出来事を思い出す。簪が溶けるように消えてしまったことを。

「……浸した総てが消えて無くなるのです」

セルケトに言われてもレミは納得していないようで、人差し指を

唇に当てたまま「むう」と不満そうに唸っている。

「ま、何にしても試してみないことには始まらないさ」ブライは努めて軽く言い放った。

筐体に座りヘルメットを被り、信号をガラス槽の電極に伝える。

それだけでガラス槽の中のイノーガ・エレメントは……虹色の煌めきが増していく。

『ダイブインシンクロー率……50%、60%、70%……』

セルケトの説明ではシンクロー率が90%を越えないと危険だと言われている。それがイノーガ・エレメントを創り出した。ブライ達の親の指示だと。

『80%……85%……88%……89%……ブライ様、もっと意識を集中して下さい』

セルケトに言われてもブライはなかなか意識が集中できない。先程の光景が、簷が溶けて無くなった映像が脳裏に焼き付き……恐怖を呼び起している。

『88%……85%……80%……70%。駄目です。一旦休みましょう』

セルケトに言われてブライはヘルメットを外し、汗を拭う。

『やはり……止めた方が宜しいのではないでしょうか？ この星に住むのは……皆様は他の星に住まわれた方が』

セルケトが再度、決断の変更を促す。だがブライは首を横に振る。

10・イノーガ・エレメント 遺されていたモノ 2 (後書き)

この小説は『イシスの記憶』、『ラプラスの魔女』、『101人の瑠璃』などの後編となります。

途中ですが感想をお待ちします。

10・イノーガ・エレメント 遺されていたモノ 3 (前書き)

惑星に残された12人の少年少女とアンドロイド達の物語

10・イノーガ・エレメント 遺されていたモノ 3

「もう決断したことだ。オレ達はこの星に住む。住み続ける。そのためにあの遺跡を……制御する。あと21時間以内に」

時計を見ると既に昼。

イノーガ・エレメントを前にして決断した1、2時間前のコトが遙か昔のようにも感じる。

ブライは深呼吸して自分に問い直す。「何をまだ迷っているのか？」と。そして皆を見ると……安心したような怯えているようないんな感情が奥底で渦巻いた視線で自分を見つめている。

「ふ、そんなに心配するなよ」ブライは努めて明るく戯けるように言う。そして思い出した。

「そつだ。レミとラミの親父さんは……ここに来る前はコロニーで義手とかを造っていたんだよな？」

「そうです。御父様が造った義手はまるで本物のように動いてみんなに感謝されていました」

レミが自慢する。ラミはそんなレミを「あんまり威張らないように」と小声で諭している。

ブライはレミを見て、ラミを見て……もう一度、筐体のラテン文字を見る。

メモント・モリ。

『死を忘れるな』という意味の文字を。

そしてアルテを見て微笑んだ。

「思い出したよ。親父が……あの言葉は「死を忘れるな」という意味じゃなく、本当は「今を精一杯に生きろ」という意味だと教えてくれたことを」

アルテは黙って肯く。

「オレ達は……この星に生きる。生き続ける。だよな？」

アルテは肯く。レミとラミも肯いた。ゆっくりと、確認するよう

に。

「そのためには遺跡を制御する。いや総ての元凶だとセルケトが判断したあの遺跡を倒さなければならぬ」

全員が肯いた。

「じゃ、オレが今成すべきコトはただ1つだ」

そして……ブライは左腕を無造作にイノーガ・エレメントの中へと挿し入れた。

「えっ？」突然のことに皆が驚く。セルケトも、そしてテミスやデイアナ達も。

「何してんのよっ！ セルケトの説明を聞いてなかったのっ！ さつさと引き抜いてっ！」

アルテが怒ったように指示している。

しかしブライには聞こえていない。ブライは自分の腕が喚き立てる感覚を押さえ込むのが精一杯で何一つ聞こえてはいなかった。

ブライの腕の中にエレメントが浸入してくる。浸蝕してくる。傷痕を通り、細胞の中へと。まるで細胞の総てが何物かに嚙られているような……おぞましい感触。

ブライは苦悶の表情を露わにし……そしてゆっくりと左腕を抜いた。

その左腕には……イノーガ・エレメントがまとわりついていて。まるで水飴が腕についているかのように粘性の高い液体が腕にまとわりつき蠢いている。

「……浸蝕されていない？」アルテが訊くように呟く。

「ああ、レミヤラムの親父さんが造りだしたんだろ？ 腕は確かさ。

……うわっ！」

ブライがおぞましい感覚を押さえて自分自身をも納得させるように呟いた瞬間っ！ イノーガ・エレメントはガラス槽の中から総て飛び出て……ブライの身体を包んだ。

「うおっ！ んぐっ！」

突然のことで呼吸ができない。口の周りのエレメントだけでも取

り払おうとするがエレメントの粘性は高く、引き剥がせない。そしてブライはがくりと膝を落し……四つん這いになり……そして床に消えた。まるでドライアイスが気化し、溶けて消えてしまったかのように。

「……え？」

皆は驚き、そして見渡す。何処にもブライの姿はない。

「どこ？ 何処に消えたの？ ブライ、返事してっ！」アルテが狼狽し叫ぶ。

だが叫びに呼応するモノは何もない。

沈黙だけが、静寂だけがその場にあった。

「ブライ様っ！ 戻ってきて下さいっ！」レミが静寂を破り、床を叩き叫ぶ。

ブライが消えた床を力任せに叩いている。

「ブライっ！ さっさと出てこないと、戻ってこないと酷いからねっ！」

ラミも叫ぶ。床に手をつき、その向こう側、次元の向こう側に届けとばかりに。

「ブライっ！ お願いっ！ 戻ってきてっ！ 戻ってこないとアタシ……アタシ、一人つきりになっちゃうっ！ お願いだから……戻ってきて。お願いだからっ！」

アルテが叫ぶ。

3人の声だけが静寂の中に響いていた。

他の誰もがあまりの出来事に声を呑んでいた。そして心を押しつぶされそうになり涙ぐんでいる。

そしてアルテの頬を涙が伝う。レミとラミの涙がぱたと床に落ち……アルテの涙もぱたりと床に落ちた。

その瞬間。

アルテの涙が光った。

「え？」

いや光っているのは涙ではない。

3人の涙の跡を中心に光の輪が広がりつつあった。ゆっくりと。

「これは？」アルテが呟く。

「なに？」ラミが呟く。

「これはきつと……」レミが涙目で微笑んだ。

そして3人同時に叫んだ。

「ブライ(様)っ?」

その声に呼応したかのように……床全体が光り出す。まるで魔法陣のような形に煌めきだし……ブライは床から出てきた。

悪魔が魔法陣から召還されて出てきたかのように。

そしてその姿は……ウォーマシン。3Dシミュレーションでの姿そのもの。

そして頭部が変形し……ブライの顔になった。

「ふう。死ぬかと思った」

「ブライ(様)っ! 戻ってきたのねっ!」

3人は異口同音に叫んでブライに抱きついた。

そして3人同時に抱きつかれたブライは蹠踉けて……後頭部を床に打ちつけて盛大な鈍い音を響かせた。

今現在のブライの姿を有体に記述すれば……サイボーグ。ウォーマシンの身体に人間の頭部をつけたような姿。普段のウォーマシンと違いがあるとすれば、ブライが操っているマシンの腕はガトリング砲なのだが今の腕は……ロボット然とした手という事だろうか。「ブライ……それって……アレ?」アルテが訊くが質問の形になっていない。

それでもブライには意味が判ったようだ。

「ああ。やっぱり馴れた形になってしまっらしいな。このイノーガ・エレメントってのは」

腕を伸ばし、指を開いたり閉じたりする。その腕は機械そのままであり、指もマニピュレーターのように。

「序でながらナノマシンに操作マニュアルが記録されていたみたいだな。脳細胞に強制コピーされた感じた」

「え？ どういう意味？」

「こづいうコト」

ブライは全身を強ばらせるようにポーズを取り、集中する。直後にウォーマシンとなっていたイノーガ・エレメントが虹色の液体のようになり……ブライの身体の中に染みこむように消えていく。

「ほら。エレメントを虚数次元に押し込んでしまえば元の身体に……」

言いかけたブライが何かを吐くような仕草をしたかと思った次の瞬間には……ブライの身体はウォーマシンに戻り、ブライは姿勢を崩して床に転がった。

「ははは。まだ巧く制御できないや。脳味噌にナノマシンの情報を総て取り込まないとな」

皆は呆れ、そして安堵の息を吐いた。

10・イノーガ・エレメント 遺されていたモノ 3 (後書き)

この小説は『イシスの記憶』、『ラプラスの魔女』、『101人の瑠璃』などの後編となります。

途中ですが感想をお待ちします。

11・意外な戦い 1（前書き）

惑星に残された12人の少年少女とアンドロイド達の物語

11・意外な戦い 1

11・意外な戦い

『コレで私が伝えるべきコトは何もありません。ブライ様、アルテ様、レミ様、ラミ様。御武運を祈っております』
テミスに支えられたセルケトは深々と頭を下げた。年老いた婦人のようだとブライは思う。

確かにセルケトは第9次入植時からこの惑星にいる。数千万人近くまで増えた記録にある第9次入植者達は数度の疫病で数を減らし、数十万人になった。その段階で第10次入植者を受け入れ、第11次入植者を受け入れた。そして疫病が再び猛威を振るい、数百万人にまで増えていた入植者が数十万人に。そして第12次入植者として自分達が来た。

入植するためだけではなく遺跡調査をするために。

そして再び疫病が流行り……今は12人。

その12人も8人は宇宙へ飛び立つ。

自分達、4人を残して。

ブライが決死の思いでイノーガ・エレメントを自分のモノとした後で、アルテ達も自分のラベルが貼られたガラス槽に腕を挿し入れた。
た。

実にあつさり。

レミが「女は度胸なのです」となんにも気にせず無頓着のまま勢いよく突っ込んだのに比べるとラミは慎重に、アルテは恐る恐るではあったが……セルケトの簪が溶けた時の様子などを総て忘れてしまったかの度胸であった。

（まったく、オレがアレほどためらっていたのが……根性無しに思えるほどだ）

ブライは思い出して呆れた溜息を心の中で吐く。

とにかくも4人はイノーガ・エレメントを自分のモノとし、異形の姿となっている。

ブライとアルテとラミは……7日ごとに行われる戦争で使用していたウォーマシンそのままの身体に人間の頭部というサイボーグ然とした姿だったが、レミは違う。

魔法の姿になったり、違うマシンになったり、映画やドラマの主人公の姿になったり、人魚になったり、天使や悪魔、幾多の妖精、妖怪、様々な姿形に変化した後で再びホウキに乗った魔法になったりしている。

それを観てキッズ達がはしゃぎ、次々とリクエストしている。そしてレミも気ままにキッズ達のリクエストに応えていた。

「イノーガ・エレメントの性能というか能力は……おかげで解ったが……」

ブライは頭を抱える。レミのおかげで解ったイノーガ・エレメントの性能とは……

1. どんな姿にもなれる。

イメージできればエレメントを操りどんな外見にもなれる。大きさもイメージできる範囲で変えられる。小さくなる時は身体が虚数次元空間に存在し、大きくなる時は身体の周りのイノーガ・エレメントが虚数次元空間から出て実体化する……らしい。

2. 空を飛べる。

というか空中に停止できる。エレメントの材料が虚数次元振動物質のおかげだろうか。短距離ならば空間跳躍ができ重力に関係なく移動できる。これに関しては同じシステムがディアナ達の翼に実装されている。ディアナ達の動力源が小型相転移炉であり、その『燃料』がセドニウムであり、つまりは小出力の空間跳躍機構であるからだ……とセルケトとテミスに教わった。とにかくイメージができさえすればディアナ達と違い遠距離の瞬間移動（正確には虚数次元

跳躍)も可能だろうとは説明されたが、瞬間移動した先が宇宙とか水中とか地中とかで身動きが取れなくなったり呼吸ができなくなったりしたら困るのでブライ達は試せないでいる。

3・物体の中を移動できる。

身体全体がエレメント、つまりは虚数次元振動物質に覆われているため虚数次元での移動が可能。ブライが床の中に消えてしまったのもこの能力が暴走した結果……らしい。

4・取り込んだ機械のシステムを再現できる。そして誰かが実現できれば他の誰もが再現できる。

無線機をイノーガ・エレメントの実体であるナノマシンが浸蝕した際にシステムを記憶し、再現できる……らしい。実際に試しにブライが浸蝕させた超次元通信機能付ヘッドホンの性能が身に付いてしまい、目の前にいるテミスと本体である宇宙戦艦テミスとの超次元通信が聞こえている。多少というかかなり煩わしいのでアルテやレミヤラミはさっさとミュートにしているらしい。ブライもまたコントロールして脳内に響く音声は最小にしている。

さらにアルテが試しにとトマの玩具をであるトラクター(壊れて動かなかった)を手にして取り込んで見た所、キャタピラタイプローラーシューズとして再現できた。

なお、トマが激しく悲しそうな顔になったので、すぐに玩具を手放した。ついでに壊れていた筈なのに動くようになっていた。

アルテ曰く「なんか軸の幾つかが歪んでいただけだから直しておいただけよ」とのこと。

キッズ達がならばと壊れた玩具をアルテに押しつけようとした所で、テミスに制止させられて若干不機嫌気味となった事は無意味な余談。

5・傷などが簡単に修復される。

イノーガ・エレメントは虚数次元振動物質で構成されており、常に虚数次元に自身のコピーを置くことにより、現実世界（実数次元）の構成を修復する。つまりイノーガ・エレメントを取り込んだブライ達は事実上の不死身と成っている。……らしい。

6 様々なモノを放出できる。というか影響を与えられる。

レミが腕をガトリング砲に変えて撃つ真似をしてみると実際に砲弾が出た。さらに炎を吐くある映画の怪人の真似をすると炎が出たし、別なキャラになると電撃も放出できた。全てを凍りつかせる魔法の姿となつて真似すると、熱湯すらも凍りついた。悪乗りしたレミが一目見た者々を石へと変えるという石化の魔法の姿形になろうとしたところで皆が止めたので確認はしていないが、たぶん可能だろうとテミスが解説した。

『対象となる物体の元素組成を変更するだけです。物質に虚数振動を与えて虚数次元振動物質に変えられるプロセスを応用するだけで実現できます』

「ところで……別にどうでも良いけどアタシ達が射出した弾丸とかつてどこから供給されているの？」

アルテの疑問も尤も。ウォーマシン形態で幾ら撃つても弾丸はつきる事はない。まるでウォーゲームの中で戦っているかのよう。

『さあ？ この宇宙のどこか辺境に漂っている直径数kmの鉄隕石が数個無くなったとしても宇宙全体にはなんの影響もないでしょう？ それらが虚数次元に取り込まれ、弾丸として皆様に供給されていたとしても広大無辺な宇宙の中のほんの些末な出来事システム。そして私達の未来にも。お気になさらず現実をありのままに受け入れるのが宜しいかと思われませう』

したり顔のテミスの説明にアルテは眉を顰めた。

「それってつまり……どういうこと？ ブライ。説明してよ」

11・意外な戦い 1（後書き）

この小説は『イシスの記憶』、『ラプラスの魔女』、『101人の瑠璃』などの後編となります。

途中ですが感想をお待ちします。

1 1 ・意外な戦い 2 (前書き)

惑星に残された12人の少年少女とアンドロイド達の物語

11・意外な戦い 2

テミスからブライへと質問の矛先を変えては見た。しかしブライもまた現実を受けいるのが精一杯で半ば上の空。それでもアルテの質問に答えた。

「つまり……なんでもありの超能力者が魔法使いになっちまったてことだな。エレメントのおかげで」

アルテはまだ納得していないようだが、「もう解らないけどもうどうでもいい」という表情を露わにした。

ブライは諦念して何度目かの溜息を言葉に変えた。

「古い……なんかの辞典に載っていたという『不必要な領域にまで進んだ科学は魔術と呼ばれるだろう』って言葉を思い出したよ。まあ、誤訳だけを集めた辞書だったと記憶しているが」

「いいでしょ？ こういう姿にならないと元凶である遺跡を叩きのめしにいけないんだから」

アルテは開き直りの極地にいるようだ。

「そうなのです。コレが正しいヒーローとヒロインの姿なのです。一気に思いつきり強化したのですから」

レミは悪乗りの極地にいる。

「そうね。さっさと遺跡を叩き臥させて、この星を取り戻しましょうよ」

ラミはレミを注意するのを放棄して同調している。

「そうだな。オレ達が遺跡を制御するか、破壊すればテミスは……銀河中央政府の使命を放棄できるんだからな。そしてセルケトを完全修復できる」

ブライの言葉にテミスは肯く。希望を込めたような視線で。

『皆様、御武運を。途中までディアナ達を送ります。離脱ポイントで皆様と別れたディアナは自力でこの惑星往還機に辿り着きます。では……これで』

テミスが深々と一礼し、セルケト共に船内に消えた。キッズ達はしゃいで手を振りながら。そしてビージー達は……沈痛な表情を隠さずに地上にまだ留まっている。

「ブライさん。アルテさん。レミさん。ラムさん。頑張ってください」
ハカセが涙をこらえながら敬礼の真似事をしている。ユキもマキもアキも涙を拭いながら手を振っている。いつまでも。

「早く行けよ。オマエ達が地上に残っていると……遺跡と喧嘩できないじゃないか。いつオマエ達を人質に取るかも知れないんだからさ」

ブライは敢えて軽く言う。ハカセの気持ち解りすぎるぐらいに解っていたために。

「はいっ！ エレメントは……総てボクが解明しますっ！ 例えブライさん達が……」
ぱしししし。

軽い音が響いたのはアルテ以下、ユキ、マキ、アキがハカセの頭を前後左右から万遍なく軽く叩いた結果。

「ハカセ？ その先は言わない」アルテがウインクする。

「そ。ハカセつて空気読まないんだから。それはクセなのかな？」
ユキが肩で小突く。

「いくら頭がよくてもネ？ 度胸とTPOがないとダメダメだぞ？」
マキが指で突つつく。

「そうだヨ。英雄になるのはブライさん。ハカセは精々、家来だね」
アキが止めを刺した。

ハカセが涙目でブライに助けを求める。が、ブライはハカセの額を指で小突いた。

「さあ、さっさと行った。宇宙からオレ達のことを見ていてくれな？」

「はいっ！」ハカセは大きな声で返事を叫び、もう一度、敬礼して船内へと駆けていった。

ユキ、マキ、アキが続き、往還機の扉が閉められ……空に舞い上

がった。

ブライ達とディアナ8体を残して。

「さあ。往還機が見えなくなるまで……」

「……見送っておられたら私達が帰れなくなります」

ディアナ1が冷静に言う。

「は？」ブライ達が異口同音に訊いた。

「皆様が少なくとも私共と同じ性能、或いはそれ以上を持っておられるのでしたら、ここから戦艦テミスの外装検査ができるでしょう。いくら何でもそんな……と思い、今、真上に位置している戦艦テミスに見上げると……」

「へ？」「え？」「あ！」「……できますね」

確かに外装板の継ぎ目が見えた。

「現在、皆様の全細胞にイノーガ・エレメントが同化しているのが確認できます」

ディアナ1が不敵に笑った。

「視神経もそうなのですが、驚くべきは……皆様が情報を無意識下で共有、解析していることです。皆様がもう少し立ち位置を広げられればもっと詳しく見えられるでしょう」

試しに互いに数歩離れてもう一度見上げると……外装板を止めているビスまで見えた。

「はあ？」「あらら」「あ、あのビス、取れかけてる」「レミ、そんなコトは良いからっ！」「」

ブライは脳裏から単語と知識を引っ張り出して感心してしまった。まるで合成開口望遠鏡のようだ。それは幾つかの望遠鏡のデータを付き合わせることで望遠鏡間の距離を口径とした巨大な望遠鏡と同じ分解性能を実現するシステム。

「つまり開口合成望遠鏡ってコト？」「ブライの脳裏の情報を口にしたのはアルテ。

「便利ですね。邂逅豪勢って……豪華な歓迎会ですか？」何かを勘違いしているレミ。

「レミ？ 音韻しか合ってなくて意味が全然違う。というか創作している」「ラミは頭を押さえて指摘した。」

「なんか……テレパシーというのが情報共有機能もついていたとは」「ブライは呆れるしかない。」

『気にする必要はありません。私達も同じように互いに情報を共有しています』

それは確かだろうとブライは思った。トマを救出した時のディアナ数体による連係攻撃は情報を共有していなければ実現不可能だ。

『では……参りましょう』

11・意外な戦い 2（後書き）

この小説は『イシスの記憶』、『ラプラスの魔女』、『101人の瑠璃』などの後編となります。

途中ですが感想をお待ちします。

1 1・意外な戦い 3 (前書き)

惑星に残された12人の少年少女とアンドロイド達の物語

11・意外な戦い 3

バックバックの翼を広げたディアナ達に促され、ブライ達は背中から翼を出現させ広げ、飛び立った。

アルテは空を飛ぶのがイメージできずにディアナ達に抱えられてだったが。

「頼むから早く飛べるようになってくれ」ブライは溜息混じりに頼んだ。

「いいでしょっ！ アタシは『戦争』のなかで飛んだりしていないんだからっ！ イメージできないのよ」

アルテはやはり開き直っていた。

海を越え、山を越え、谷を越えたあたりでディアナ達は岩だらけの平原にある一際大きな岩の上に降り立った。

どうやら、テミスが言っていた離脱ポイントらしい。

ブライ達も同じ岩の上に降り立つ。

「ここでお別れか？」

「ええ。ここで少し試したく……」

試すって何を？ とは声にならなかった。ディアナ1がブライの頭めがけてハイキックを繰り出したがために。

瞬時に身を屈めるブライ。ディアナ1の足が頭上を通過した後で空気が切り裂かれたよう音が耳に届く。

(な、何だ？ いまの？ うおっと！)

声に出すより早くディアナ1が身を屈めて体を回転させ足払いを放っている。先程の蹴りと同様の音速を超えた攻撃だがブライの両脚は解っていたかのように飛び上がり、躲す。埃と風がディアナ1の足にまわりついていく。さらにディアナ1が空中にいるブライに回し蹴り。流石にコレは両手で受け、蹴りの威力に身体を任せて後方へと離れ……なかった。ディアナ1は素早く立ち上がり、正拳

突き。肱で受け止め後ろへステップ。ディアナ1は歩を進めて連続突き。ブライはそれらを肱と掌で受け止める。

後方へのステップがディアナ1の前進速度を上回ったようで距離が離れて……ブライは身構えた。そして叫ぶ。

「何をするっ！」

『テストです』ディアナ1がトントンとその場で小さくステップしている。そして微笑む。

まるで野獣が獲物を見つけたかのような……凄絶な笑み。

『では、参りますっ！』

瞬きすらもディアナ1の攻撃の前には邪魔。それでもなんとかブライはディアナ1の攻撃を捌いていた。

音速すらも軽く超えるディアナ1の攻撃を。

普通の人間ならば……いや、通常の戦闘型アンドロイドですら為す術もなく一撃の下に倒されているであろう攻撃を……全て捌き躲していた。

「何でこんな時にっ！ うおっ！」

ディアナ1の攻撃を躲しながらも疑問を口にする。

『……全ては我が本能。ブライ様？ 躲しているだけでは決着はつきませぬっ！』

ディアナ1が全力で向かってくる。そして鋭い正拳突きが伸びてくる。

本能的に……ブライは応戦した。

右腕を伸ばし……意識の中でトリガーを引く。感覚の中で撃鉄が落ち、無数の弾丸が射出された。

ディアナは即座に飛び退き、距離をとる。そして姿は弾幕の霞の向こうに隠れて見えなくなった。

「え？」

見れば右腕がウォーマシンと同じくガトリング砲に変わり、絶え間ない断続的な炎とともに弾丸を射出していた。

「わわっ！ 止めろっ！」

自分で自分を制止させようと左腕のロボット然とした手で右手のガトリング砲を破壊する。

強靱な金属でできているであろうガトリング砲は鉛細工のようにひしゃげて弾丸の射出は止まった。

「ふう。怪我は……」

ディアナ1はと見れば……両手にそれぞれ何かの塊を掴んだまま微笑んでいる。いや、凄絶なる笑みを浮かべてブライを睨んでいた。「お心遣い有り難うございます。しかし……」

ディアナ1の手の塊がぼろぼろと崩れ落ちる。

「……原初のガイアにおいて私達の原型となる護衛用突撃型戦闘アンドロイドは幾つかの薄氷を踏むような勝利と屈辱的な敗北のケースを経験し、「悟り」ました」

ディアナ1の表情が……きわめて人間に近くなる。

悲しみの中の希望というような表情に。

「常に自身の戦闘能力を高め、少なくとも「人類史上最強」と称される存在でなければならない。少なくともそれを目指さねばならぬと。これらは私達のOSのカーネルの存在と同等に刻まれ組み込まれています」

つまり、人間で言えば「本能」レベルだという事なのだろう。

「そして私達は……軌道エレベーターの素材、虚数次元カーボン・ナノ・ファイバー、つまり実次元での積層ダイヤモンド・ナノ・ファイバーを自らの皮膚である防弾シリコンに埋め込み、常時で音速での行動を可能としました。動力炉を相転移炉に変えた時においても、常時出力型を腰部に、緊急時の高出力型の2つを胸部に備えて四肢ならば音速の数倍での行動を実現させております。その私達にとつて……」

11・意外な戦い 3（後書き）

この小説は『イシスの記憶』、『ラプラスの魔女』、『101人の瑠璃』などの後編となります。

途中ですが感想をお待ちします。

11・意外な戦い 4 (前書き)

惑星に残された12人の少年少女とアンドロイド達の物語

瞳の威力が増していく。まるで瞳に高出力のレーザーを備えているかのように。いや、瞳の威力だけで総ての生物を石化するという想像上の化け物も斯く在らんかというような迫力を放っている。

『……たかが音速程度の弾丸に私達が壊れる事なぞあり得ませぬ。改めて表明致します。私は音速を遙かに凌駕した速度で行動できます。その私達が自らより遅い物体に傷つく事は……』

両手の塊は……塊だったモノは総て弾丸。弾丸のなれの果て。ブライが射出した弾丸を手で受け止め、次の弾丸を受け止める。結果として総ての弾丸は泥団子のように変形し溶着していた。

飛び退いたとはいえ、音速程度の小口径弾丸だとはいえ、至近距離で音速近くの総ての弾丸を捕らえたという事実にはブライは驚愕を隠しきれない。

両手の弾丸の塊を指先で崩し壊しながら、ディアナ1は清澄なる笑みへと表情を変化させている。いや、押さえている？

『……大魚が水に溺れ、不死鳥が自らの炎で焼け死ぬような事だと断言致します。それとも……』

ディアナ1は再び凄絶なる笑みに戻る。

『この私にはその程度の戦闘能力しかないと判断されたのですか？』

「あ、いや。決してそういう訳では……」

口籠もるブライを一睨みし、ディアナは軽く跳躍した後で構え直した。

『では言葉ではなく……行動でお示し下さいませっ！』

ディアナ1が突進してくる。そして音速を軽く凌駕した正拳突きが襲い来る。

いや。脚下の岩を砕かんとはかりに踏み込み、突き出されたのは正拳ではなく腕から伸びた針。ではなく槍の穂先のような重厚なる鋭き直刃。

それを受けたのは……盾。

(え?)

瞬間的に左腕が盾に変形している。受け流しながら……反撃の手段を考える。と、右腕が何かに変形しているのが解る。

(なんだ?)

視線をディアナに固定したまま確かめるために右腕を前に突き出すと……槍になっていた。

ディアナ1は右腕の槍の突きを躲し、後方へと飛び逃げた。

「……これは？」

『それでこそ超音速での戦い。いざっ!』

ディアナの超音速での攻撃を盾で受け流し、槍で応戦する。

確かに音速程度の弾丸で攻撃するよりも重厚なる衝撃が相手に加えられるだろう。

互いが生み出す衝撃波の中でブライはそれでも考えていた。

「しかし……何故だ? 何故、攻撃するっ!？」

『考えるより応戦して戴けませんか?』

声に振り向くと別のディアナが襲いかかってきた。両手に刀を持って。盾で払い除けると今まで戦っていたディアナ1が別の角度から襲ってくる。

『コレからは2対1です』

そんな卑怯な。と声にする前に視界の端に映った状況は……

アルテ達も2対1で戦っていた。

(いったい何故だ?)

訝るブライは無数の衝撃波が飛び交う戦場の中で……それでもあの記憶を探し出した。

脳裏に甦るのは……砂浜での光景。そしてテミスの言葉。

『ディアナ達が申すにはブライ様と心ゆくまで戦いたいと』

ブライは叫んだ。

「だからって今戦わなくてもいいだろうっ！」

気合いと共に2体同時に身体を当てて弾き飛ばした。アルテ達も同じように弾き飛ばし、ディアナ達は1箇所を集められた。直後！地面の岩から虹色の光が出現し、ディアナ達を包んでしまった。

そして……光りが消え去った後に残る透明な壁。

「へ？」「何ですかコレは？」「レミったら知らないの？ コレはバリアって……え？」

ブライ、レミ、ラミが振り向く先には……両手を突き出したままの格好で自分に驚いているアルテの姿。

「あ、あれ？ 閉じ込めたいって願ったら……何か出て来ちゃった。ははは……」

「……どうやら御陰様で大幅にレベルアップしてみたんだな」

透明な壁は超硬質ガラスだった。ディアナ達の力では割れず、ブライの一撃で粉々になった破片をディアナ1が拾い上げ、見つめている。

『アルテ様は周囲の物質を意のままに操るまでになりましたね』

ディアナ達の分析に因ればそれは『虚数次元積層ダイヤモンド・ガラス』だという。ディアナ達の防弾シリコンに埋め込まれているファイバーがクォーターニウム・ファイバーだとすれば、アルテが作り出したソレはセドニウム・ファイバー。

強度において最低でも53万1441倍ほどの強度を持つと解析していたが、ブライ達には……正直、さっぱり解らない。

11・意外な戦い 4（後書き）

この小説は『イシスの記憶』、『ラプラスの魔女』、『101人の瑠璃』などの後編となります。

途中ですが感想をお待ちします。

11・意外な戦い 5 (前書き)

惑星に残された12人の少年少女とアンドロイド達の物語

そんな事ができるのは……アルテが周囲を『操作』できる司令官の脂質を持つているからだともディアナ達は分析していた。

思えば……『戦争』ではアルテは司令官というか大将役だった。

下地は『戦争』で養っていたらしい。

「結果論だが……良い実戦練習ができた。実際、ぶつつけ本番では不安だったからな。感謝している」

ブライが手を差し出す。ディアナ1は一瞬、無表情になり、そして微笑んだ。

『ええ。私も久しぶりに戦闘を堪能致しました。対テロ用アンドロイドとしての本分を確認させて戴きました』

そしてブライの手に手を重ねて握手し……不意に身を当てるように腕の中に滑り込み……

「んぐっ！」ブライの唇を塞いだ。艶やかな唇で。

ブライが意味が解らずに目蓋を瞬かせると視界の端でアルテ達も同じコトをされていた。

アルテとラミは驚きのまま。何故かレミは逆に奪っているかのような姿勢で。

「な、な、な、何なんですかつ！」

真っ赤になりながら抗議するアルテにディアナ1は肩をすくめて返答した。

『私達は原初のガイアから存在した古い型のアンドロイドです。私達の記憶には……私達の原型となった対テロ用アンドロイドはある人間に仕え、口づけを交わしたとあります。そしてその後の人間は大怪我にあつても何故か短時間で完治した……と。例えば全身骨折でも僅か数日で完治したそうです。だからコレは……』

言葉を句切りウインクした。

『……単なる縁起担ぎです』

艶やかな唇からチロリと舌を出す。不覚にもブライは可愛いと思つてしまい、アルテ達の極寒の視線が突き刺さってしまう結果となつた。

「だ、だからって……」

抗議を続けようとするアルテにビシツと人差し指を差してディアナは笑つた。

『勘違いされませんように。ワタシ達の皮膚は防弾シリコン。もちろん唇も。つまりは単なる物体。グラスやストローに唇が触れても「キス」とは誰も言いませんよ?』

ディアナに煙に巻かれてアルテは感情の捌け口が無くなり……

「ブライっ! 笑い過ぎよっ!」

……ブライへの蹴りへと変えて放出した。

「なるほど。でしたら奪い返さなくてもよかつたのですね」

「はい?」レミの言葉を全員が疑問形で訊き返す。

「やはり奪われたモノは奪い返そうと頑張つてしまいましたが、無意味だったというコトです。つまり……」

レミは唇に人差し指を当ててブライに囁くように言った。

「ワタシのファーストキスはまだ誰のモノでもないと言つてことです」
ブライは何と言つていいか解らず、アルテとラミは総てを無視して思考を放棄していた。

『私達も安心致しました』ディアナ達は雰囲気が変わり……遠くを見るような視線に変わる。

『音速を超える蹴りや突きをも躲し、反撃する。しかもその身を武器に変えて。正に戦いの神の化身』

そして視線を上げ……まだ遠い遺跡を見て目を閉じた。

『皆様の御武運を祈っております』

そして全員が深々と礼をする。ブライ達も神妙な表情となり礼に応えた。

『最後に……もう一つお願いがあるのですが。あと、テミス様からのプレゼントとセルケト様からの言付けを預かっております』
頭を上げたディアナは実に晴れ晴れとした顔で『願い』と『言付け』を言葉にし、最後にプレゼントを渡した。

ディアナ達が飛び去った後で……ブライ達は怪訝な顔をしていた。
「何なの？ 髪の毛が欲しいって？」

ディアナ達の最後の願いとはブライ達の頭髪を数本、それだけだった。

「よくは解らんが……たぶんテミスの指示だろう。何か思いついたんじゃないのか？」

「遺髪とか？ きゃいつ。ラミ、頭を叩かないで下さいっ」

「不謹慎なことを言ったからよ。それに『遺髪』じゃなくなっていたでしょう？」

ラミが言うとおりの。切られた髪の毛は入れられたガラス瓶の中で即座に結晶化し、セドニウム遷移体の粉末のような形になっていた。

「それに言付けて……何なの？」

「何だろうな？ 『イメージして下さい。常に御自身の心の形を具体的に。深くイメージして下さい』って言われてもな。何が何やら」

ブライも思案投首で判断を放棄するしかない。

「それでも……何か意味があるんでしょ？」ラミも意味が解らないながらも考える。

「まあ、さつき別れた後でセルケトの記憶の中にあつたのを思い出したんじゃないのか？ それでディアナ達に頼んだんだろ？ オレは通信を聞いてなかったからな」

ブライはテミス達の通信が聞こえるが、煩わしいので音量をほぼ0にしていたとアルテは思い出した。

11・意外な戦い 5（後書き）

この小説は『イシスの記憶』、『ラプラスの魔女』、『101人の瑠璃』などの後編となります。

途中ですが感想をお待ちします。

11・意外な戦い 6 (前書き)

惑星に残された12人の少年少女とアンドロイド達の物語

「まあ、そんなとこよね。でも……イメージねえ」アルテはまだ釈然としていない。

「解らないのならば解らないなりにイメージを具体化するのです」何故かレミが乗り気だ。

「はい？」全員が再び疑問形で返すがレミは気にしない。

「ブライ様は炎、ラミは風というか雷鳴、アルテ様は大地でワタシは水なのです」

「はあ？ ブライは置いといてアタシが何で雷鳴なのよ？」

「いつもレミを怒ってカミナリを落とすからなのです」

ラミは何か言い返そうとしたが納得が先行し、反論はできなかった。

「ブライは兎も角、アタシは何で大地なのよ？」アルテが代わりに反論する。

「巧く飛べないからなのです」

アルテ以外の全員が納得した。

「そ、それで何でレミが水なのよ？」アルテが訊き返す。

「そうよ。ブライが炎だというのはどうでも良いけど、レミが水だという理由は何？」

ラミもアルテに同調する。

「それは……」レミがくると身体を回し何かの姿に変わる。

「……ワタシが水の女神のように美しいからなのです」

変った姿は女神の彫刻のような、絵画の中の女神を象ったような姿。

「……はいはい」

アルテとラミは怒るよりも呆れることを選択した。

ブライは自分が何故に『炎』なのかを確認したかったのだが、そんな雰囲気ではなくなり、ただ溜息で、呆れているアルテ達に同調

した。

「あ、そうだ。プレゼントって何？」

渡された小箱を開けると入っていたのは……メモリースティック。丁寧にも『ウイルスは入ってませんよ』と子どもが書いたようなイラスト付きの付箋が貼ってある。

「なんだろうな？　というかこんなモノをこんな場所で渡されても……読めないぞ」

ブライが困惑しているとレミが指摘した。

「ブライ様はテミス様と交信できるではないですか。つまり、テミス様が読み込めるのでしたらワタシ達も読み取れるのです」

何故か胸を張って自慢しているようにも見える。

「そうか？」

まだ困惑のままにいと……メモリースティックを持つ指の先がコネクタへと変わった。

「おお」とブライを除く全員が感嘆の声を上げる。

「便利なのもここまで来ると嫌味に思えてくるよ」

ブライは何十回目かの溜息を声に変えて接続しメモリーの中を読み込んだ。

『銀河中央政府のデータベースから次の情報を検索致しました。一読下さいませ』

「え？」

中に入っていた情報は……在る狂信科学者の情報。

メディア・ドウガイア・デイモン。

狂信的自然科学者。ガイア神教関係者からも異端と言われる。テロリスト。『宇宙があるがままで美しくあるためには人類は滅亡すべきだ』と主張。性別をも否定していたため性別の記録無し。自身の細胞を遺伝子レベルで改造していたとの怪情報在り。惑星アポピスなど数十の星系での大規模テロを画策し実行。終身刑を受ける。

本人の申し立てにより宇宙流刑へ変更。共犯者達と共にフロンティア型宇宙移民船にて凍結睡眠状態で放出。その後、凍結睡眠が解除された信号を辺境を巡視していた銀河中央政府監視船ランス01型機体番号1999が受信。微弱だったため到着した惑星等は不明。現在、発信源と推定される星域は植民が完了しているが、総ての星系では痕跡が確認されず。解除信号は誤信だと判断されている。

「なお、推定された星域は……」ブライは言いかけた言葉を失った。推定された星域を銀河中央からの角度で延長すれば……惑星ルクソルの星域へと辿り着く。

「……コイツらか」ブライは遺跡を睨む。

「みたいね」アルテも睨む。

「己を知り、敵を知れば百戦錬磨、必勝不敗なのですっ！」レミが気合を入れる。

「レミ。微妙にというよりかなり違うけど……それで良いわ」ラムミが訂正よりも気迫を選ぶ。

そして皆で睨み付けた。

虹色と漆黒が混ざり合う遺跡を。

11・意外な戦い 6（後書き）

この小説は『イシスの記憶』、『ラプラスの魔女』、『101人の瑠璃』などの後編となります。

途中ですが感想をお待ちします。

12・遺跡へ 1 (前書き)

惑星に残された12人の少年少女とアンドロイド達の物語

12・遺跡へ 1

12・遺跡へ

再び空を飛び遺跡へと向かう。

「ブライ……手を離さないでよ」

アルテは巧く飛べずにブライに引つ張られている。

「……少しは自分でなんとかできないか？」

「気にしないでよ。アタシは気にしていないんだから」

妙な理屈をこねるアルテにブライは説得を諦めた。

先行するラムが急降下して、岩山の尾根の先、空中に突き出した岩棚の上に着地する。ブライ達も同じ場所に着地した。

「……でかいな」

ブライが呟く。ホテルからだとは尖塔のようにしか見えなかったが、近づいてみると巨大な岩山としか感じられない。

辺り一面は岩だらけの平原。その中から天を突き刺すかのように遺跡が聳え立っている。

遠くからは虹色に見えた遺跡が近づくと漆黒へと姿を変え、それでも所々が虹色に煌めいている。

「えーと。標高5km。今居るこの場所が標高で500m程度みたいだから4、500mの尖塔ってコトね」

地に足が付き安心したようでアルテがいつもの調子を取り戻し、戦艦テミスからの情報を口にしてから……感慨を口にする。

「コレが総て……ナノマシンの塊だなんて信じられない」

「スコープで見えてみな」ブライが自分の額の横を指先で叩き、眼前にスコープを出現させる。

「アタシは司令官で大将なんだからそんなコトは……あ、できた」

ブライの真似をするとアルテの眼前にスコープが出現し尖塔の表面をクロースアップした。その表面は……無数の漆黒の虫？ いや総てが波打つナノマシンの塊だった。

「……うげ。アタシは虫が苦手なんだけど」

アルテは心底嫌そうな顔でスコープから目を逸らした。

「なんか……コツチを見ているような雰囲気なのですわね」レミが冷静に分析している。

「そりゃそうでしょ。アイツらはこの惑星の総てを統括しているつもりなんだろうし」

「でも、まだこっちを攻撃してきませんよ」

「いつでも対応できると思っっているんですよ。油断大敵って言葉を教えてあげないとダメね」

レミが珍しくレミと会話を成立させている。

「油断はしていないみたいだが」ブライは冷静に分析していた。

「衛星写真では……遺跡の周りには虹色の湖が見えた」

「あ……」アルテ達はブライが言いたい事が解った。

「つまり……この岩だらけの場所にセドニウム遷移体というか液体となっていたナノマシンが溜まっていた……のね」

それらが今は見あたらぬ。岩の窪地があるだけ。

「つまりそれらを呑み込んで遺跡が自身を巨大化させているってコトね」

「ああ。随分と衛星写真よりもでかくなっているようだ」

「ワタシ達が来たので全部、呑み込んで巨大化したというコトなのですわね」

「防御を固めるのは臆病者の証でしょ。準備万端、金剛堅固でも蟻の一穴で城が崩れるって言葉を知らないのね」

珍しくレミが諺を創作している。やはりレミとは姉妹だとブライは実感した。

「そんな言葉はない」

「やあね。真面目に指摘しないでよ」

断言するブライをレミが脇で小突く。じゃあいつもの態度は何なんだと、ブライとレミとアルテは思ったが言葉にするのは止めた。

「……でも、全部相手しなきゃならないの？ 何処かに弱点とか無

いのかな？」

ラムミがブライに少しの猫なで声で訊く。ブライは何かを探るような表情となってから遺跡の下を見るように示した。

「そのままスコープの種類を変える。そうだな。拡散ガンマ線スコープってのを選ぶだろ？」

ブライに言われるままにスコープの種類を変えると視界が変わり……遺跡全体が透きとおって見える。

「そして下を見ると……コアが見えるだろ」

言われるままに視線を下に向けると……4つの尖塔の中心の下に巨大な球体が見えた。漆黒の球体が。

「多分アレが……コア。総てのナノマシンを操っているヤツだ」

「どうしてそんな事が解るの？」

アルテが訊く。レミとラムミも同じコトを訊きたかったようでブライを見つめている。

「何でだろ？ えーと……」

ブライが自分の頭をコツコツと指で叩く。

暫く悩んで出て来た答えは……

「たぶんナノマシン達の記憶じゃないかと」

12・遺跡へ 1（後書き）

この小説は『イシスの記憶』、『ラプラスの魔女』、『101人の瑠璃』などの後編となります。

途中ですが感想をお待ちします。

12・遺跡へ 2 (前書き)

惑星に残された12人の少年少女とアンドロイド達の物語

12・遺跡へ 2

「何よそれ？」

アルテが訊き返す。睨むような目で。

「オレ達が今まどつているナノマシンは元々は……あの遺跡のモノだ。それをオレ達の親が再プログラムした。それでも元の記憶というか記録は残っている。そんなトコロじゃないか？」

「でもアタシ達は解らないわよ？」

アルテの問いにレミとラミも肯く。

「それは……」

ブライは頭を傾げる。ブライ自身も何故理解しているのかが解らない。

「たぶんダイブインの経験時間の違いじゃないのか？」

ありきたりな答えにアルテ達は「つまらない」とそっぽを向く。

ブライは「どんな答えを望んでいた？」と訊きたかったがやめて空を見上げた。

いつも見える月が見えない。

移民船セルケトは軌道に沿って動き、今は地平の下、惑星ルクソルの反対側なのだろうか。さっきまで上空にいた戦艦テミスもセルケトに沿って移動しているのだろうか。

頭の中でタイマーがカウントダウンを続けている。タイムリミットまでの時間を。

ナノマシンと合体し自身がサイボーグになってしまったという実感はあまりない。それでも便利だと思ってしまうのは……別れ際のキッズ達の反応だろうか。それともबीジー達の願いだろうか。

それともセルケトから伝えられた自分達の親の研究の成果だと理解しているからだろうか。

或いは……これからの戦いを、その無謀さを理解しているからだろうか。

不意に信号が届く。

「ん。信号を確認。惑星往還機が戦艦テミスに着艦。全員、保護された」

ブライが脳裏に届いた信号を確認。アルテ達も同じく確認し肯き合う。笑顔で。

「キッズ達もビージー達も無事」ラミが確認するように呟き笑う。

「セルケトも……少なくとも端末1体分は無事」アルテも微笑む。

「後は……コイツらを叩きのめすだけ」ブライが気合を入れる。

脳裏に浮かぶカウンターの数字が残り18時間ちようどを示した。

「それでは突撃なのです」レミが宣言し、全員がウォーマシンの姿となって突撃した。

彼らの数千倍のナノマシンの塊に向かって。

もう自分の能力に疑いはない。

戸惑いもない。

総てはイメージするだけで、あらゆるモノになれる。

あらゆる能力を実現できる。

ディアナ達との戦いで実感した。

総てはイメージするだけだと。

アルテは岩山を駆け下りていく。足の形が変り無限軌道となり、岩を削るように破壊して突き進む。

ブライは空を飛び、炎と化していく。炎の鳥となり尖塔の一つに突撃した。総てを炎で焼き尽くすかのように。

レミもまた尖塔の一つに突撃した。自身を氷の槍へと変えて。

ラミは遙か上空から尖塔の一つに急降下して突撃した。雷光と共に。

アルテが尖塔の根本に突撃した。地面から叩き折るかのよう
に。そして……長い戦いが始まった。

ナノマシン達は虫の集団のようにブライ達にまとわりつき、自由を奪おうとする。ブライ達は炎となり、稲妻を放ち、虫たちを凍りつかせ、石へと変えて叩き壊す。

だが相手は無数。

たちまちのうちにナノマシンに呑み込まれていった。

遙か上空。

宇宙空間に位置している戦艦テミスは惑星ルクソルを回る軌道から離れ、外宇宙へと向かっていた。

探査船であるランス02型数隻を遺跡上空の静止軌道に残して。

そして全員が戦艦テミスのブリッジに集まり、巨大なスクリーンに映る遺跡の状況を見つめていた。

『始まりましたね』テミスが呟く。

『ええ。始まってしまいました』セルケトが祈るような姿で見つめている。

遺跡からは紅蓮の衝撃波、青藍の衝撃波、稲妻や純白の衝撃波が数舜毎に放たれブライ達の戦いの凄まじさを露わにしている。

その一方で……

落下しつつある移民船セルケトではディアナ25以下12体が作業を続けていた。

『メインシステムは後っ！ 空間跳躍システムを最優先っ！ セルケトの落下を食い止めるっ！』

『ブライさん達は……勝てるのでしょうか？』

『ディアナ36っ！ 無駄口は後っ！ ブライさん達が勝ってもセルケトが落ちたら何にもならないからねっ！』

それでもディアナ25は通信を繋いだまま作業を続けている。

ランス02型からの映像を見続けている。
遺跡の状況を見守りつつも自分達の作業を続けていた。

ブライは疲れて途切れそうになる意識を繋ぎ止めていた。
何度も挫けそうになる。総てを投げ出したくなる。

もう何時間戦っているのだろう。

サイボーグとなったが故だろうか。空腹感を感じない。
それでも何かが……失われていく。

心の中の何かが少しずつ失われていく。

無限とも感じられる時の流れの中で……疲労が囁く。

(もう……いいんじゃないか?)

(充分戦っただろ?)

(戦いを止めても誰もオマエを責めない)

(止めてしまえ)

(戦うのを止めてしまえ)

(総ては無駄だったのさ)

(オマエは星そのものと戦って勝つつもりなのか?)

(不可能だ)

(勝つことは有り得ない)

(相手は幾多の移民を根絶やしにした……怪物なんだぞ)

(化け物だ)

(悪魔だ)

(或いは神だ)

(人間が勝てる相手ではない)

(止めてしまえ)

「やめねえっ!」

ブライの気迫が炎となり、周囲のナノマシンを焼き尽くす。

「やめるモノですかっ!」アルテの叫びが聞こえる。

「やめてあげないのですっ!」レミの声も聞こえる。

「勝つまでやめませんっ!」ラミの声が響いている。

脳裏に響く仲間の声が、意志が、気迫がブライを奮い立たせる。

「そうだった! 勝つのはオレ達だった!」

ブライの叫びが響き渡る。が、直ぐにナノマシン達に覆われ、落

ちていく……奈落へと。

……漆黒の闇の中へと。

……落ちていった。

12・遺跡へ 2 (後書き)

この小説は『イシスの記憶』、『ラプラスの魔女』、『101人の瑠璃』などの後編となります。

途中ですが感想をお待ちします。

13・統べるモノ 1 (前書き)

惑星に残された12人の少年少女とアンドロイド達の物語

13・統べるモノ 1

13・統べるモノ

ふと……水滴が落ちたような音が耳の奥に響いた。

(なんだ?)

ブライが頭を上げると……白色の球体の中。

ぼおつと光る球体。その中に……玉座が浮かんで見えた。

漆黒と金で飾られた玉座が。漆黒と金で織り込まれた分厚い敷物の上に。

(誰だ?)

玉座に誰かがいる。

精緻な飾りが施された冠、宝石が飾られた錫杖。煌びやかな刺繍がなされた法衣を幾重にも重ねている。

その姿はまるで……

(法皇?)

何処かの惑星にあるという荘厳な教会を司り統べるという法皇に見えた。

だが……明らかに違うのはその顔。

骸骨の上に乾涸らびた皮膚が張り付いているような顔。

眼窩に光りはなくそこには……ただ闇があった。

『……………』

骸骨が何か言った。

『……………よくぞここまで辿り着いた』
なに?』

『惑星ルクソルの総てを統べる……我が玉座によくぞ辿り着いた』

玉座だと? オメガは誰だ?

『我が名は……人としての名は既はない』
なんだと?』

『我は真理を知り得たモノ。アルファでありオメガであり、唯一で

あり総てである。宇宙の総てを知り、叡智の総てを知り得た。つまりは神となり、この世界の次元空間の総てとなったのだ。そしてこの星にて……完全なる調和を実現している』

調和だと？

『美しい山、美しい海、美しい森林、美しき大地。それらを美しく煌めかせる風。様々な生物が、細胞が、物質が、元素の性質のままに反応し、生み出され、行動している。総てが……宇宙の総てを体現している』

宇宙の総てだと？

『知らないのかね？ もっとも単純な物質は素粒子。陽子と電子で構成された水素原子。水素原子が集まり恒星となり、核融合の光を放ち、幾多の元素が創り出され、超新星爆発と共に宇宙に撒かれ……再び集まり惑星となり、生命となった』

それで？

『生命は美しい。ただ、存在するだけで美しい。単純な細胞が、その遺伝子が、重なり、絡み合い、幾多の生物となり、存在し続ける。本能と呼ぶ、神経細胞の脈動を自らの行動と変えて存在しているのだ』

……。

『だが？ 人間はどうだ？』

何が言いたい？

『人間は……人間だけが知能と呼ぶ不必要な精神活動を発生し、行い、積み上げる。まるで神々に逆らい土塊の塔を天上界へと建てていくかのよう』

悪いことではない。

『悪い。それが総ての罪悪。原初の罪。悪の根源、悪魔の所業。人類こそが悪魔なのだ』

オマエもその悪魔のなれの果てだろう？

『黙れっ！』

言葉が気迫となり衝撃波となった。

ブライは気圧されて……壁に叩きつけられた。

(何?)

見れば……人間の身体の自分が石の壁に鋼鉄の鎖で繋がれている。腕が吊り上げられ、足首も石の床に繋がれている。自由の総てを奪われている。

まるで……罪人のように。

『ほう？ 自分が如何に罪深き存在であるのかを自覚したようだな』
『なんだと？ ここは何処だ？』

『気づかなかつたのかね？ ここは……君達が「遺跡」と呼んでいた場所。その中の……』

相手は笑う。嘲るように。

『我が玉座だ。君達の仲間もここにいる。解るんだろう？ 仲間の位置か？』

見渡せば……玉座の左右、石の壁に繋がれているのはレミとラミ。そして玉座の向うの壁に……アルテが繋がれていた。

『我が玉座をここに設けてから……ここまで辿り着いたのは君達だけだ。その無謀な行いに敬意を払い……我が意志を、宇宙の真理を君達に伝えよう』

意志？ 真理？

『宇宙には……人間は不要である……と』

13・統べるモノ 1（後書き）

この小説は『イシスの記憶』、『ラプラスの魔女』、『101人の瑠璃』などの後編となります。

途中ですが感想をお待ちします。

13・統べるモノ 2 (前書き)

惑星に残された12人の少年少女とアンドロイド達の物語

相手は両腕を掲げた。まるで自身の上に総ての真理が存在するかのよう。

『考えてみたまえ。人間が存在してもしなくても宇宙はそのままだ。恒星が輝き、惑星が周囲を巡る。恒星もまた銀河を巡り、銀河が集まり銀河団となり、超銀河団となっている』

(はい？ それがどうしたって言うのよ)

アルテの声が響いた。

『……人間だけが宇宙を、その心理と美しさを理解せずにその足で踏みじり、星系を渡り歩き、形を歪める。宇宙によって存在するという自分達の立場をわきまえず、神となったかのように宇宙を蹂躪する。世界を穢している。そのような存在は……不要なのだ』

(変なところ見つけてそんなコトを言っただけで感心なんかしてあげないだからねっ！)

ん？ 変なところ？

『……理解した。君達は我が深遠なる意志を理解できないようだ』
(ワタシも理解などしてあげないのですっ！ コツチを見ないで下さいっ！)

(何いってんのよっ！ レミっ！ このミイラもどきはアタシのコトをずうっと気持ち悪い視線で見ているんだからっ！)

ブライは相手を見る。気づいた時から……相手は自分の方だけを向いている。

玉座に座り自分の方だけを見つめている。

しかし？

アルテもレミもラミも自分の方を見ていると言っている。

(つまり？)

ブライの脳裏で何かが答えを囁いている。だが……どんな答えなのか聞き取れない。

『……君達を残しておいたというのは間違いだっただようだ』

ふっ……と、玉座の大きさが変わったように感じられた。

いや、勘違いではなく玉座を巨大に感じている。玉座からの得体の知れぬ何かは圧力として感じられている。

畏怖が心の中を支配していく。

(残す？ 残すって何よっ！)

アルテが叫ぶ。総てから逃れようとするかのように。

『疫病は……我が慈愛。不必要な人間を我が美しき星から一掃するための……真理の賜物。真理の具現。だが、幼き君達を残したのは……命を奪わずにいたというのは、我が情け。我が真理を授けようとした慈愛を理解できぬとは……』

(アナタは嘘つきなのですっ！)

レミが叫んだ。

(ワタシより幼い者も亡くなりましたっ！)

(そうよっ！ ミヨ、マリ、ケータ、シーナも死んじやったわっ！)

アタシより小さくて幼くて可愛かったのにつ！)

ラミも叫んでいる。涙声で。

(アタシ達が生き残ったのはねっ！)

アルテの声が震えている。恐怖ではなく、悲しみで、そして純粹なる怒りで。

(みんながアンタを叩きのめしなさいって護ってくれたからよっ！)

アルテの叫びが衝撃波となり響き渡った。

ブライの身体の自由が戻った。一瞬だけ。

『増長するのもいい加減しろっ！』

相手が巨大となった玉座から立ち上がり……掌を向けた。

直後に凄まじき衝撃波がブライ達を襲い……石の壁に叩きつけられる。そして石から伸びた冷たい無数の鉄の鎖がブライ達を縛めていく。

『……ならばその命、今奪ってやるっ！』

鎖が身体を締め上げ……意識が霞んでいった。

13・統べるモノ 2 (後書き)

この小説は『イシスの記憶』、『ラプラスの魔女』、『101人の瑠璃』などの後編となります。

途中ですが感想をお待ちします。

14・祈る者達 1 (前書き)

惑星に残された12人の少年少女とアンドロイド達の物語

14・祈る者達 1

14・祈る者達

……光りを感じた。

目蓋を開けると……ガラスの中にいた。

(……え?)

よく見るとガラスの筒。細長い筒の中。

隣の筒にアルテがいた。その奥の筒にラミが。そして振り返ると別の筒にレミがいる。

(ここは何処だ?)

もう一度見渡す。離れた場所にいるのは……キッズ達、ビージー達、テミスがいる。セルケトもいる。ディアナ達も。

そして何かを見て叫んでいる。黙って見つめている。声を出して拳を突き出している。

(……何を見ている?)

皆の視線の先には……巨大なスクリーン。

そこに映っているのは……遺跡。惑星ルクソル。

そして遺跡が黒い光りに包まれて……時折光る紅い光り、瞬く稲妻、青嵐の衝撃波、純白の光りが遺跡から放たれている。

(ここは……戦艦テミスの中なのか?)

ふと……脳裏に別の映像が浮かぶ。

それは移民船セルケトの中で戦っているディアナ達の姿。

『セルケトの落下が……予想を上回っていますっ!』

『原因はっ?』

『制御を失ったタンクからのガスの放出っ!』

『さっさと止めなさいっ!』

『作業ロボットが向かっていますっ!』

『空間跳躍装置の復旧はっ?』

『もう少し……っ！ 装置、ナンバーF、復旧完了っ！』

『直ぐに稼働っ！ 少しでも落下を食い止めるよっ！』

言いながらもチーフであるディアナ25は別の行動を覚悟していた。

（もし……もし落下が食い止められないのであれば、せめて……せめて遺跡に直撃させてやるっ！ それこそが私達がこの星系に来た本来の使命。そしてセルケトの本来の渴望っ！）

部下達に指示しながらディアナ25は『その時』のためのコントロール方法を計慮し始めていた。

そんな……

セルケトの復旧作業が続いているディアナ達の動きが、通信が、思考が、総て、総て脳裏映像となっている。

全て理解できる。

全て解っている。

ブライもアルテもレミもラミも全てを理解し、全てを……感じて
いる。

キッズ達が叫んだ。

スクリーンに映る遺跡が……黒い光りに包まれて巨大化していく。
まるで惑星ルクソルを総て包み込んでしまふかの如く、巨大にな
っていく。

ビージー達も叫んだ。テミスが射るように見つめている。セルケ
トが祈っている。ディアナ達も祈るような仕草に……

ブライは……ブライ達はお互いに見つめ合い、そして肯き合った。

(行く。オレ達が存在すべき場所に)

(戻りましょ。戦いを続けるために)

(ワタシ達は負けないのです)

(勝つまでやめないからね)

(ああ……祈ってくれる皆のため、覚悟を決めている皆のために……必ず勝つっ！)

ふとディアナ1が……横を見た。

コンソールデスクの上に置いてあるのはガラス瓶。ブライ達から貰ってきた髪の毛が変化したセドニウム遷移体の粉末が入っている。ガラス瓶が置かれている。

『どうしました?』

尋ねるテミスにディアナ1はガラス瓶を指差した。

『そこに……ブライ様達の気配、というか反応を感じました』

『バカなことを。ブライ様達はいま遺跡の中で戦っています』

『……そうですね』

ディアナ1は時刻を確認しテミスに進言した。

『テミス様。そろそろ質量プラズマ砲の準備の指示を。距離が離れてしまい、全砲門が最大出力、そして誤差を最小にて攻撃するには時間がかかりますので』

『必要在りません』テミスはきっぱりと言い切った。

『宜しいのですか? 銀河中央政府からの指令を放棄するコトになりますか?』

『構いません。もし確認の通信が来ましたら「戦艦テミスは惑星ルクソルで行われている戦いを監視。生存者を救出する予定。生存者が確認されない場合にのみ、遺跡の破壊を実行する」と返信してください』

テミスの言葉にディアナ1は微笑んだ。

『了解しました。救助船の準備をしておきます』

『……アナタも信じているようね』

『ええ。機械としましては……記録が総てですから』
ディアナ1はブライ達の勝利を信じていた。

あの時。

ブライ達の腕の中に滑り込み、唇を塞いでいた時。

ディアナ1は腕から針を突出させ、腹部を突き刺そうとした。が、まるでそうなることを予め知っていたかのように、ブライの腹部は針の形に凹み変形し……針は身体に届くことはなかった。

（あのような攻撃、ブライ様自身が意識していないような状況でも
ナノマシン達はブライ様を護っていた。ならば……どの様な状況に
なるうともブライ様達は……不滅。つまりは不死身）

そして祈る仕草をする。

（願わくば……もう一度戦えますことを）

テミスはディアナ1を見つめ、スクリーンに視線を戻してから仕草を倣った。

祈る仕草を。

14・祈る者達 1（後書き）

この小説は『イシスの記憶』、『ラプラスの魔女』、『101人の瑠璃』などの後編となります。

途中ですが感想をお待ちします。

14・祈る者達 2 (前書き)

惑星に残された12人の少年少女とアンドロイド達の物語

「……解った」

ブライは呟いた。

石の壁に鉄の鎖で束縛され……鉄の鎖がブライの喉を締め上げていたにもかかわらず、声は……放たれている。

腕が、足が、全身が無数の鉄の鎖で石の壁に縛り付けられている。身体を千切れんばかりに締め上げている。しかし腕は何事もなかったかのように動いた。

『何が解ったというのだ？ 宇宙の真理の欠片でも解ったというのかね？』

ブライは相手を見据える。そして呟いた。

「……コゴト・エルゴ・スム。我思う。故に我在り」

『ほう。古き言葉を。意味は知っているのかね？』

「……実在は物質だけではない」

『感心するな。それで？ 原初のガイアの古びた哲学で何を説明しようというのかね』

相手は嘲る。

「この場所は……ただのイメージだ」

『……それで？』

嘲りが止まった。

「つまり、今のオレ達は……キサマが操っているナノマシン達の中にいる」

喉に巻き付く鎖を引きちぎる。片手で。

「今この時も、オレ達のナノマシンは、オレ達のイノーガ・エレメント達はオレ達を修復し、存在させ続けている。キサマがオレ達を呑み込み、無に帰そうとしてもそれは不可能だ。だが……だからこそオマエは別の手段に出た」

相手の表情は動かず、ただ「ほう？　それで？」とだけを声にする。

「そしてオマエが……オレ達にあるイメージを植え付けて支配しようとしている」

足を踏み出す。足を束縛する鎖が脆く引きちぎられた。

「オレ達を護っているナノマシン達を引き剥がし、自分の支配下に置こうとしている」

全身に力を入れると……まだ縛り付けようと蠢いていた鎖が千切れて四散した。

総ての鎖が四散して消え果てた。

「……オレ達が疫病から生き残った理由も解った」

ブライに倣ってアルテ達も自分の縛めている鎖を引きちぎった。

「ナノマシンには意志が宿る。イノーガ・エレメントには遺志が宿るんだ。イノーガ・エレメントだけじゃない。人々を襲ったナノマシンの中には亡くなっていく人達の遺志が宿っていったんだ。ほんの僅かな数だったとしても。そんな……ナノマシンがオレ達を護っていてくれた。だからこそオレ達は生き延びた。オマエの邪悪な意志がナノマシンに宿り遺跡を象っていたように。疫病として人々を襲っていたように」

1歩踏み出す。石の床がぐにやりと変形し、虹色の液体に変化する。

光の無かった石の牢獄に虹色の光が満ちていく。

邪悪を、闇を、邪念を抜うかのように。

「オレ達を……死なせまいと、疫病から護ろうとした人々がいた。その遺志が……ナノマシンに宿り、オマエの意志に操られていたナノマシンから護ってくれていた。それが……」

玉座へと近づいていく。1歩ずつ。足跡が炎となり燃え上がっていく。

ブライの身体が巨大になっていく。

「この星を統べる……みんなの遺志だっ！」

玉座に座る相手を……見下ろす。

「この星のただ1つの意志だ」

いつの間にかブライの身体は大きくなり、玉座は小さくなっていく。

アルテも玉座を見下ろしている。

レミもラミも玉座を見下ろしていた。

ブライの身体から紅蓮の炎が上がる。

レミの身体からも青藍の煌めきが、ラミの身体からは稲妻が、そしてアルテの身体からは純白の煌めきが立ち上がっている。

「意志が、イメージがナノマシンを操作する。オマエの意志よりもオレ達の意志が、オレ達を護ろうとする人達の遺志の方が強いっ！」

『黙れ、黙れっ黙れえっ！ 我は真理、我こそが叡智、人間を凌駕し、宇宙の総てを……』

玉座毎、相手が巨大化し、ブライを見下ろそうとしていた。

「黙れえっ！」

ブライの怒りが炎となり……腕に宿る。

ブライの腕が炎となった。

アルテの腕に純白の炎が立ち上るのを感じる。

レミの腕に青藍の炎が立ち上るのを感じる。

ラミの腕に雷光が巻き付いているのを感じる。

そして相手は……ただ狼狽している。巨大化できず、ブライと同じ大きさのままに狼狽していた。

「キサマは神じゃない」

拳を握りしめる。炎が一際燃え上がる。

「キサマの名はマディア。マディア・ドウガイア・デモン。ただの狂信的科学者、ただの犯罪者、ただのテロリスト。そして……ただの人間だっ！」

ブライの腕が、拳が相手の顔面に突き刺さった。紅蓮の衝撃波が玉座ごと相手を破壊した。

アルテの拳が、レミの拳が、ラミの拳も邪悪なるモノを突き破る。青藍の衝撃波が、稲妻の衝撃波が、純白の衝撃波が、紅蓮の衝撃波と重なり……玉座を粉碎し、遺跡をも破壊していく。そして惑星ルクソルを衝撃波が響き渡った。

遺跡は……衝撃波の中で崩れ落ちていった。

漆黒の闇が千々に粉碎され、紅蓮の光と、純白の光りと、青藍の光りと雷鳴の輝きが漆黒の闇を呑み込み……消していった。暁光の光の中で……遺跡は消えていった。

『……遺跡の消失を確認』ディアナ1が冷静に告げる。

キッズ達もビージー達も歡喜して騒いでいる。

ディアナ1は時間を確認する。

残り時間、僅か12秒。

『長い戦いが終わりました。ブライ様達の18時間もの戦いが』

『それは間違いです。訂正を』テミスがディアナ1に指示した。

『移民船セルケトが……惑星ルクソルに辿り着いてからの長い戦いが終わったのです』

テミスはまだ紅蓮と青藍と稲妻と純白に煌めいている惑星ルクソルを見上げた。

『そして……第1次移民から始まっていた人間達の戦いが……ブライ様達によって終わったのです』

ディアナ1は黙って肯いていた。

14・祈る者達 2 (後書き)

この小説は『イシスの記憶』、『ラプラスの魔女』、『101人の瑠璃』などの後編となります。
次回はエピソードになります。

15・惑星ルクソル 1 (前書き)

惑星に残された12人の少年少女とアンドロイド達の物語

15・惑星ルクソル 1

15・惑星ルクソル

惑星ルクソルの朝は早い。

夜が明けると皆が起き出し、洗顔を済ませ、簡単な朝食を取る。そして畑に行き、収穫の時期となった作物を採り、雑草を取り、次に苗を植えるべき畑を耕す。

作業が一段落すると……ブライは額の汗を拭った。

「ふう。今日は暑くなりそうだな」

「そうですね。そしたら皆で海に行きましょう。作業を速めに終わらせて。ね?」

「レミ? だったら休んでないで、少しは手伝ったら?」

「あのね。ラミ、アナタこそ手伝いなさいよ。ブライの身体から出て」

「アルテ様こそブライ様の頭の上に乗らなくてもいいじゃないですか」

「レミ? アタシはみんなの作業の進捗具合を見てなきゃならないの」

「つまり、もう尻に敷いている訳なのですわね」

「レミ、それは的確すぎるわよ」

「ラミ? それはちよっとひどくない?」

ブライは自分の頭上と両肩で行われる言い合いにうんざりしていた。

「あのな? 口喧嘩をするんだったらオレの身体から出てやってくれないか?」

「ばしっ」

アルテ達がブライの後頭部と側頭部を同時にはたく。

「文句言わないっ! こんなに綺麗で……」

「……気立てが優しく、なおかつ可愛くて……」

「スタイルのいい娘を三人も独り占めしているんだからね。文句は言わないのっ！」

妖精のように小さくなっているアルテ達がブライを睨んだ。笑いながら。

遺跡との戦いの後、遺跡跡を搜索したテミス達が見つけたのは……岩の平原に降り積もった虹色のセドニウム遷移体の結晶の中に横たわるブライ一人だけだった。

アルテとレミとラミの姿は何処にもなかった。……のだが、全員は生きていた。

ブライの身体の中に。

ブライの身体にアルテ達が何故か同時に存在している。本人達の気の持ちようによってはブライの身体から出ることもできるのだが……それでも離れることができなくなっていた。

例えば指先でも触れていれば個々の身体が実物大で存在できるし、気分というか気合次第では数時間は離れても大丈夫なのだが、何かの拍子に虚数次元の何処かの次元空間に身体が呑み込まれて消えてしまいそうになる。……というのはアルテ達の実感として報告されている。

実際、ブライ自身もアルテ達全員が離れてしまうと同じ感覚に襲われ、地面の下に呑み込まれてしまいそうになる。

つまり全員が重なって存在していないと存在そのものが不安定になっってしまう。

唯一便利なのは、身体が重なっている時には隠れている3人の分身が現れるというコトだろう。今現在の状況としてはブライの頭の上と両肩にミニチュア人形のような大きさのアルテ達の分身が乗っている。

知らない人が見たらブライを手品師か腹話術師、あるいはミニチュアドール蒐集家と勘違いしてしまうかも知れない。

何故そんなコトになったのかと原因を探せば……やはり遺跡との戦いだろう。

ナノマシン同士の戦い。マディアを叩きのめした時の全員の衝撃波が虚数次元にも干渉してしまい、ブライ達を護るナノマシン、つまりイノーガ・エレメントにも影響を及ぼし、存在確率というか存在できる次元空間が重なってしまった。

……とはテミスの推定。

普段ならば兎も角、農作業をする時は腕組みとか背負ったりもできないので全員ブライの身体の中に重なっている。そして分身が頭の上と両肩に乗っている。

仕方ない……のだが正直、鬱陶しいと思ってしまう。

「ブライ？ そんなに嫌だったら耳掃除してあげないからね？」

「ブライ様。そんな嫌がらないで下さあいませえ。ご飯を食べさせてあげますからあ」

「それともアタシがブライの身体を操ってしまおうかしら？ ね？」

ブライが何を思っても心の隅々までアルテ達には解ってしまう。

身体を自由を制限できるのも事実だ。

ブライは……何も言えずにくったりと頂垂れた。

遺跡を崩壊させた衝撃波はブライ達が住んでいたホテルも破壊していた。

テミスとディアナ達と作業ロボット達によって復旧作業が続いているが、完全復旧にはまだかかりそうだ。

それでも悪いことだけではない。

惑星ルクソルに響き渡った衝撃波は大気圏をも震わせた。そして落下し始めていた移民船セルケトをも弾き飛ばす結果を伴っていた。移民船セルケトは外装板が大きく破損する結果となったが、現在もディアナ達の手により修理が続けられている。

完全復旧には時間がかかりそうだが、少なくとも落下することの

ない軌道を周回している。

15・惑星ルクソル 1（後書き）

この小説は『イシスの記憶』、『ラプラスの魔女』、『101人の瑠璃』などの後編となります。

次で終わります。

15・惑星ルクソル 2 (前書き)

惑星に残された12人の少年少女とアンドロイド達の物語

「テミス様、クタード星より入電。検査機械をそちらに送るのでプライ様の身体を調査してデータを返信して欲しいとのことですよ」

ブライ達の身体について、様々な機関、様々な星々の科学者達や医者達が調査を依頼されている。ナノマシン自体が量産不可能だとされている現状で人間そのものがナノマシンでサイボーグしたという事実、さらに人間自体が虚数次元振動を起こし現実の次元空間で重なっているという事実が科学者達の研究心を駆り立てているようだ。

「ディアナ1。いつもの文面で返信。「調査したい場合は直接こちらに出向くこと。なお、移民船セルケトは未だ修理中。我が戦艦テミスは銀河中央政府の指令を放棄していた角により船籍の剥奪が検討されているため内蔵している空間跳躍装置、小型コスモゲートは使用不可能。ただし、そのような調査依頼は多数に及んでいるため大型コスモゲートの建設を検討中。しかし資金不足のため、資金、資材の援助を募集している。そして最も多くの援助を申し込んだ方々には優先権を検討中」とね」

テミスはなかなか商売上手なようだ。惑星タマジを急速発展させたという経験がものをいっているのかも知れない。

テミスはホテルのロビーからセルケトやブライ達の様子を眺めている。

微笑みながら。

「了解しました。ですが……本当にブライ様達への調査を認められるのですか？」

「私達は「検討」するだけです。認めるかどうかは……ブライ様達の自由。私達、機械が人間の行動を制限する事自体が有り得ない。してはならないことです。気にすることではありません」

ディアナ1は微笑んだ。

『了解しました。機械は機械としての仕事を全うします』

皆が今、この瞬間、この時を楽しんでいる。

吉報が届いたのは……遺跡を破壊してから1ヶ月後だった。

銀河中央政府は移民船セルケトが動作停止したのを老朽化による一時的な状態と判断。但し再発する可能性を考え、代役として戦艦テミスの任を解き、セルケトの後任とした。

移民船セルケト自身はディアナ25達の既に完全復旧しているが、テミスの補佐、或いはバックアップとして惑星ルクソルにそのまま存置されている。

また遺跡が無くなったことで使命を半ば放棄していたテミスへの叱責もなかった。

バグラン達は何処かへ飛び去っていた。

ブライ達が遺跡と戦った時の様子に驚き、虚数次元振動の暴走が起きると怯えたのだろう。

余談だが……

ブライ達が7日毎に行っていた「戦争」はテミスの中、惑星往還機を数機格納できる大型格納庫に設置された巨大なジオラマだった。ブライ達とディアナ達が操縦するミニチュアロボットの視線からは天井は霞んで見えるほどの広大な空間に設置されたジオラマでの戦い。

戦いそのものは爆薬などは使用せず、攻撃はただのシミュレーションシステムの中での判定。

そしてテミスに告げられた。

『ディアナ達は何故か自分達よりアナタ達のロボットのメンテナンスを優先させていました。そして着弾判定もディアナ達自身が甘く

判定してました』

その理由を尋ねるとディアナ達は笑った。

『恐れながら私達是对テロ用アンドロイドです。戦闘訓練では常に自分に厳しく判定致します。それだけのコトです。そしてやはり私達は機械だというコトです。素早い動きが必要とする状況下で動くのは自分の身体。ミニチュアロボットの操縦桿では微細な動作ができなかったのです』

つまり……ブライ達が「戦争」に勝ち続けていたのは、単にディアナ達とロボットの動きの差異と相性、そしてディアナ達の行動規範がシステムに合わなかったがための結果だった。

そしてセルケトの記憶は……大部分が欠損していた。

「セルケトお。いっぱい取れたよ」

「トマ。みんなで取ったのに自分だけの事のように自慢しないの」

「そだよ。ユマの言うとおり。そんなんじゃダメだぞ」

「そ。嫌いだからってニンジンを取らないんじゃダメだよね」

『そうですね。夕飯はニンジンも美味しく料理して食べましょうね』
ただし、欠損していたのは過去の記憶。

残っているのは……疫病の後。ブライ達と共に生きた時間の記憶は総て残っていた。

ブライはそれだけで充分だと思っている。

必要なのはこれからの時間。これからの日々の思い出。

それだけで充分。

「ブライさんも大変だな」

ハカセが農作業の手を休めてブライ達の様子を見て呟くと隣にいたユキが茶化した。

「あれ？ どんな格好で寝ているんだろう？ って羨ましがってい

なかったかな？」

「そうそう。いつも一緒だからいいなって言ってたよネ？」

「そっぴやお風呂も一緒なのかって……なんか変な想像していたヨ？」

ハカセも変わらずユキ、マキ、アキに冷やかされている。

ハカセが助けを求めるような視線をブライに向けるが、ブライは自分の頭に両肘を乗せているアルテと両肩から頬を突っついたりしているレミとラミの扱いだけで精一杯。

「……自分で何とかしろ」

ブライはハカセを無視して農作業に戻った。

惑星ルクソルの平和な日々は始まったばかりだ。

15・惑星ルクソル 2（後書き）

この小説は『イシスの記憶』、『ラプラスの魔女』、『101人の瑠璃』などの後編となります。
完結です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5324m/>

機械仕掛けの未来

2011年7月21日03時42分発行